
IS語

謎人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS語

【Zコード】

Z2123V

【作者名】

謎人

【あらすじ】

尾張時代の半ば 一つの物語が終わつたが、歴史の遺産はまだ残つていた。時は現代、ISが進出した時代に再び異質な刀が現れた。そして歴史の亡靈達も動き出す。刀をめぐる争いが再び始まり、始まり。

設定（前書き）

よろしくお願ひします。

設定

主人公
まにわほむら
真庭焰
まにわほむら

所有刀 絶刀 鉈

プロフィール

突っ込みのポジションかつボケ。人柄は穏やか。体格は小柄。鈴より少し高め。やや女顔。髪は長髪。趣味 甘味巡り 気苦労 信条
終始一貫

使用忍法

演武 他者の忍法の使用法を見たり聞いたりすれば、まねることができ。ただ自身が一度でも無理だと感じると使用することができない。また完璧にその忍法を使用することができず制限がある。)
使用できる忍法 足軽 卷き菱指弾 爪合わせ 永劫鞭 記録辿
り 涡刀・鎖式 柔球術 音飛ばし 断罪円 大嵐木枯し)

鬼火 火を自在に扱う。

真庭拳法 段位持ちの実力

???? かつて真庭毒鶴が使っていた忍法

鏢
じく
刻葉
じくよう

流派　？刀流

プロファイール

七花に似で長身。七花とは違った趣味は無趣味ではない（散歩と修行）。顔は七花似。髪は黒金（日にかざすと金色）肩まで伸ばしている。掛け声は、チエリオ。

両親は、幼少時に他界。？刀流継承者である祖母に引き取られたが、中学二年次に他界。いろいろつてを頼りに、中学三年時に焰たちに出会う。

織斑 一夏

所有刀 薄刀 針

プロファイール

原作通りだが、針を手に入れてからは剣道に励むようになつている。

技

薄刀開眼 型月の直死の魔眼の扱いで。万物の死を見、針で線を斬ることができるのが、脳に負担をかけるので使って最大5分。剣舞にすることできれが上昇する。なお舞つた時にときめく人数は数知れず。

白刀開眼 薄刀開眼とは似て異なる技。

剣舞 零の舞 雪月花 3体攻撃
一の舞 月下氷刃 広域攻撃

真庭家
真庭 白夜

使用忍法 逆鱗探し

焰の兄。24歳。初代真庭白鷺の再来と言われているほど、実力は高い。

真庭 真希

使用忍法 永劫鞭

焰と白夜の姉。白夜とは双子。ほぼ真庭鷺鷺さん。外観も。職業はアパレル関係。恋人は遠い親戚でもある真庭 蝶次郎。

真庭 蟻太郎

蝶次郎

密三郎

焰とは遠い親戚。この作品における虫組。鎌太郎さんは弁護士。朝次郎さんはバイク便兼真庭道場師範。密三郎さんは大学生。

真庭 龜有

焰の叔父。保護者。商店街の会長をしている。

真庭 海

使用忍法

渦刀 チェンソーを操る。

渦刀・鎖式 末代真庭喰鮫の忍法。

真・渦刀 雨の日限定で使える。初代真庭喰鮫の忍法。

亀有の長男。焰と同一年。弾と同じ高校。部活は水泳部。可愛い物好き。

真庭 涼

使用忍法

運命崩し 柔球術 結界術

亀有の一男。小学生。ペンギングッズが好き。

この小説では、十二頭領の一人、まにわべんぎん真庭人鳥の生存が前提です。左右田から逃れており、情報力を駆使して財をなし、無事天寿を全うしたという形でいきます。

といった形で時代は巡って現代へ。ISが進出したこの時代に再び刀をめぐる物語の始まりはじまり

プロローグ

それは、中学最後の夏の日のお盆の時だつた。その日俺は、親友の織斑一夏と鑑刻？と一緒に蔵の掃除にかかっていた。

「すまんな一夏、刻？。人の家の大掃除に駆り出しちまつて

「いいや。いろいろ世話になつてゐし。飯もありつけるしな」

「同じくだ」

「まあな。真希姉と静香おばさんの飯はつまいしな

「しかしでかい蔵だな。何お宝でも埋まつてんじゃないのか？」

「それを知るためのお掃除だ。といつてもほとんぢは一束二文のがらくたや急場しのぎにしまいこんだ資源ごみが大半だ」

と言つて俺たちは掃除に取り掛かつた。俺の家こと真庭家は忍者の末裔だつたりする。実際に忍法も使えるし、「ご先祖様も「真庭語」という真庭忍軍の歴史書も書きつづつてゐる。実際に読んでみたが（訳は密兄さんにしてもらつた）事実は小説より奇だ。という感想だ。

真庭忍軍 暗殺を生業とした忍びの一族。十一人の頭領を中心とし、鳥、獸、魚、虫組に分かれ奇怪な忍法を駆使し生きてきた一族であつたが、天下泰平の折に起こつた大乱で力を落とし挽回しようと幕府を裏切り変体刀をめぐる争いで一族は滅んでしまつたと表の歴史は語るが、実際には末代魚組十一頭領が一人、まにわべんぎん真庭人鳥が生き残つ

ていた。真庭人鳥^{まにわべんきん} 童でありながら十一頭領になれたのは情報収集が優れていたのと使う忍法が優れていたからだ。刀集めの際に途中で離脱し、追手に追われたが逃げきったものの故郷に帰ると灰燼になっていた。彼は絶望しかけたが、生きるという目標のもとその情報力で商人となり財をなしたと真庭語は語る。

もう一つ語るとするとここから一帯は一級災害指定地不要湖であつたが一部開拓したのもうちのご先祖だつたりする。そういう掃除をしているうちにガタンと音がした。あれは

「一夏大丈夫か?」

「ああ、悪い。焰、階段の裏側壊しちゃつた」

「なにーちょっと見せろ」

「待て」

「なんだよ、刻?」

「これ隠し戸じゃないか?」

「まじでか」

言われてみれば隠し戸だ。中になんか入つていてるのか?調べてみると

「おお、なんか箱が三つ出てきた」

「まさかのお宝?」

「とりあえず、三つあるから三人で開けようぜ」

「いいのか？」

「いいんだよ。 じつにうのつてなんか楽しくないか？」

「わくわくはあるよな

「じゃいくぞ」

三人同時に箱を開いた。そこには、

「真庭語（裏）？」

「なんだこれ？ 珠が12個ある？」

「うわちは一つだ…これ以上のコアじゃないか」

「何一本当か。一夏」

INSもともと宇宙空間で活動を想定してつくられたマルチフォーム
スーツ。製作者の意図とは別に兵器に転じてスポーツに落ち着いた
機械であるが、女性にしか使えない機械もある。この機械の進出
で各国の防衛の改革及び女性の地位の上昇は記憶に新しい。てこと
だが

「たぶんそうだと思う。この間、特集で見た」

「だとしてもだ。俺達が触れたといふで反応しないんじゃないか」

「そう突っ込む刻？」

「そつちは何が入つていたんだ?」

「ああ、真庭語（裏）だ。裏つて書いてあるから表じやかけない暴露本かなんかだろうがね」

そう言って適当にめくつたが、いかせん古い字体なのでほとんど読めない。あれ、と一夏が呟いた。

「えーと？」

「なあ、これ光つてないか」

なに、と俺と刻？が言つて球を見直すと三つ光っていた。よく見ると

鉛
釤
鑪
？」

「物は試しだ。夏おまえは針。刻？は鏗だ。俺が鉋に触れてみる」

「触れる分はタダだ。死には
しないと思つ」

「まてまて、言い淀んでるだ。思いつき」

「どうあえず触れるぞ」

「まあ、いいか」

そつして俺たちは触れてみた。すると

「主、認証しました」

といつ声が聞こえた。瞬時に光を放つた。頭の中で鉋の使い方等などの情報が流れ込み目を開けると、まっすぐな刃に鍔なし鞘なしの綾杉肌に一筋桶が膨らんである。

「絶刀・鉋」

俺はそつづき、一人見ると一夏は白い柄の刀を、刻?は手甲と足甲が装備されていた。

「……………」れひ?

「いめん、自信ない」

「とりあえず掃除終わつたら、おじさんに報告だな

「そつだなつて、これしまえんのか?」

「しまえるんじゃないか?よつと

俺はしまうイメージをしたところ右中指に一筋桶をあしらつた指輪がはめられていた。

「どうやつたんだ?」

「頭に浮かばなかつたか?」う、しまう感じで?」

そう言われて一人は、念じてみると、一夏の右中指には、水晶みたいな美しい指輪が。刻？には、左手の中指に紅葉色の指輪が装着されていた。

「とにかく急いひせ」

「だな」

一旦お宝をかたづけ、掃除に取り掛かった。

「なんとまあ」

掃除が終わり俺たちは真庭家家長である龜有おじさんに事の報告をした。

「ふむ。真庭語（裏）の管理と訳は密に任せよつかの。しかし、工の「アか？」については難儀だね～～」

ふむと頷くおじさん

「ま、しばりくは様子見じや。焰、白夜に連絡はつかんか?」

「白兄か?ちょっと時間かかるけど大丈夫だと想ひ。やつぱ、白兄
経由で束さんに頼むしかないよな」

「なあ、束さんって誰なんだ?」

「刻?、篠ノ之 束さんってのは工の発明者なんだよ。現在ビニ
にいるかも不明な研究者なんだよ」

「へえへ。その凄い研究者とよく知り合いだな焰の兄さん

「白兄と真希姉のクラスメートなんだよ。つこでに言つと一夏の姉
さんむ」

「まあな、俺も千冬姉に相談してみます」

「ま、それが妥当かな。しかし、鉋、針、鑓ねえ。四季崎記紀の完
成形変体刀もたしかそんな刀の銘じやなかたかな?」

! ! !

その言葉に俺と刻?は反応した。逆に一夏はキョトンとしてくる。

「なあ、四季崎記紀つて誰?」

「まあ、マイナーな人物だよな。歴史上では。ま、説明してやる。

「一夏、旧将軍は知ってるよな」

「まあな、受験生だし。確かに天下を統一した後、刀狩令を出して、清涼院護劍寺だったか。刀を溶かして大仏作ったんだよな」

「おおむねそうだ。その旧将軍の天下統一に四季崎記紀の変体刀が絡んでるんだ」

「どうしてだ?」

「四季崎記紀の刀を手に入れれば天下を得るって信じられていたんだよ。その数、合計千本。旧将軍は四季崎の刀を集めて天下を統一したんだよ。この時点で5~6割だったかな? その集大成で

「刀狩つてわけか」

「正解。最終的に988本集まつたんだが残りの12本の収集にこじごとく失敗した」

「それらが完成形変体刀つてわけか?」

「そうこうつこと

「しても頭の回転速いな一夏。恋愛感情には鈍感な奴だが

「12本だよな。珠は13個あつたぞ?」

「そいつは刻?。説明できるか?」

「ああ。一夏俺が使ってる流派知ってるよな?」

「ああ、？刀流だったか。己を一本の刀に見立てる無刀の剣法だよな」

「そうだ。俺の『先祖様鑓一根が開いた剣法だ。どうも』先祖様は四季崎と面識があつたらしい。どういう関係かわからないがな。どうも、四季崎記紀は完成形変体刀を踏み台にして完了形変体刀、つまり意思を持った刀（？刀 鑓）を作りたかったらしい。何のためかは、俺にもわからん」

「へえ～～

「兎にも角にも、待つしかないか」

そう言つて、俺達は昼飯を食べに居間にいった。

数ヵ月後

夏休みが終わつた。が肝心の兄貴からは音沙汰がない。連絡を入れたところ、すぐに返事は返つてきたが内容が

「しばらく替れない。束も匂しいので他聞雷燃の波留にならないと替れない」

訳 しばらく帰れない。束も忙しいので多分来年の春にならないと帰れない

ということだった。一夏も千冬さんに連絡はしたがしばらくは織斑家には帰れないということだ。

日々は無情に過ぎていき、一月の受験。俺達は私立藍越学園を受けるため受験会場に来たのはいいが、刻?と一夏が道に迷つてしまつ

た。

「何をしてるおまえ?..」

「知るか!なんだよ、エントイレ行つただけで迷うなんて」

「つべ」べ言つな。とつあえず、エリは次見つけたドアに入つちまえば問題ない」

「だな」

頷いて、さつそくドアを見つけ入室した。

「すいませーん」

「ああ、君たち受験生だよね。向こうで着替えて。時間おしてるから急いでね。ここ4時までしか借りられないから」

試験官らしき人が見向きもせずにいった。役所仕事?か、思い言われるがまま部屋に入ると、

「エリ?」

そう、エリだ。ちょうどいい具合に3体ある。エリまで来るとさすがにおかしいなと思うのだが、一夏は何を思ったのか、それに触れてしまった。次の瞬間、ピッカと光つたと思ったら、そこにはエリを装着した一夏がいた。

「「まじでかー..」」

「ひ、とつあえず、お前らも触れてみろよ？」

明らかに混乱しているが、つられるがまま、俺達も触れてみた。すると、

膨大な量の情報が頭を駆け巡り、最後に頭に浮かんだのは、

鉋

目を開けると、HJを装着していた。隣を見ると刻?も装着していた。

俺達3人は同時に

「「「まじでか!!!!」」」
と叫んでしまった。なにしろ命じ通りに動く。女性にしか反応しないんじゃないのこれ?
と混乱していると、

「準備はできた?はいじゃ、適性検査にいってね

と、さつきの試験官がさつさと俺達に紙を渡しつけていった。

「じつする?」

「いけるとこまで行っちゃいますか

ま、こんな経験滅多にないだろ?しな。俺たちは向かった。

どうやら、模擬戦のようだが忍法を使うまでもない。俺は鉋を、一

夏は針を、刻？は無刀で、

「報復絶刀！！」

「薄刀開眼・零の舞・雪月花！！」

「？刀流・蒲公英！！」

瞬殺で決まった。すると、ピピピ

『試験官機撃墜。お疲れさまでした』

と表示された。

その後が大変だった。やつと男だつていうことが分かり、悪ノリで受験しましたつて白状したところで、見たこともない装備を使用していることでああ、大変。結局その日は、家に帰れず、翌日、亀有おじさんと静香おばさんが迎えに来てくれた。俺達はそのまま、真庭家へ。一休みの後、さつそく家族会議が開かれた。内容はもちろん今後の方針である。事前に連絡が着ていたのか、俺達はIS学園に入校ができると、通達がきたそうだ。

おじさんいわく、この申し出は受けた方がいいそうだ。曰く、IS学園はどこの国の影響力も及ばない学園だそうだ。少なくとも3年は大丈夫ということである。実験動物扱いはごめんなので、俺達は、入学することに決めたが、この二年間は相当苦労する羽田になることはこの時考えてみなかつた。

第一話 入学（前書き）

少々忍法の設定をいじつけています。

Side — 夏

「どうした？一夏。緊張のしきりではないか」

小声で隣の焰が話しかけてきた。

「緊張もするさ。そんなことより、焰。あの窓際の子、算だよな」

窓際の席から時折こちらに低温の視線を送つてくる女子。俺はその女子に見覚えがあった。幼馴染の篠ノ之箒。小学生のころ転校しまつたけど、昔と髪型が変わつていなかつたのですぐ気がついた。話しかけて行つていいいのか非常に疑問だ。機嫌が悪そうだ。あの低温の視線がそれを物語つている。

「確かに、篠だとは思うな。しかしそく気がついたな一夏。我も一見だけでは気がつかなかつたぞ」

「！！何を根拠に」

「一人称が我になつてゐるぞ。使うときは、真剣勝負の時か、緊張しているとだぞ」

「く、我としたことが」

「なんにせよ、自己紹介でわかるんじやないか。先生来たぜ」

と刻?。緊張してないよ!に見えるが、せつねから髪をこじつてい
る。ああ、お前もか。

まずい、非常にまずい。どのくらいまずいかっていうとマジまずい。そのくらい混乱するほどまずい状況だ。自己紹介の順番だ。てっきり、左から右だらうと思い真ん中の俺はゆっくり考えようと思ったのだが、ようによつて出席番号順だ。焰と刻?は、アイコンタクトで「good job」と呟わせるだけで何の助けにもならない。僅かな希望を託して篝の方を向いたが、田をそらされた。俺、嫌われてる?

「・・・君、織斑一夏君！！」

卷之二十一

いきなり大声で呼ばれたので思わず声が裏返つてしまつた。案の定、くすくすと笑い声が聞こえる。というか、お前らも後でこうなるだ

からな。

「あ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってる?
？怒ってるかな？ごめんね、ごめんね！でもね、あのね、自
己紹介、”あ”から始まつて今”お”の織斑くんなんだよね。
だからね、ごめんね？自己紹介してくれるかな？ダメ、ダメ
かな？」

早口でせつまくし立てられ、必死に頭を下げる……えっと、そう、
副担任の山田真耶先生。上から読んでも下から読んでも”ヤマダマ
ヤ”だからすんなり覚えられた。

じゃなくて！サイズの合つてなさげな眼鏡がずり落ちてつまくら
い頭を下げる山田先生をどうにかしないと。

「あの、先生。そんなに謝らなくても自己紹介をしますから……」

「ほ、本当ですか！？絶対ですよ？約束ですかね！？」

……本当にこの人は年上と言うか教師なのだろうか。
同年代の人が無理に先生をしてるつて方が頷けるぞ。

「よし」

と、そんなことを思つてゐる時間も視線がなくなるわけではないので、
ひとつと終わらせる為に振り返る。正直何も良くないし、言つこと
も決まってないから忘れることにした。

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

儀礼的に頭を下げる。よし、このまま

「以上です」

戦略的撤退に持ち込む。がたたつ。思わずすこつける女子が数名いた。どんだけ期待してんだよ。無茶言つな。そこ刻?、ため息交じりに苦笑するな。焰は何びびつてんだ?

パンツ!

いきなり頭を叩かれた。痛い、という無脊椎反射より、あることが頭によぎつた。この叩き方は

「げえ、関羽!-!」

「誰が、三國志の英雄か、馬鹿者」

振り返つた俺に再び同じ衝撃が襲いかかってきた。なるほど、名簿で叩いてるのか、じゃなくて!

「ち、千冬姉!-?」

「馬鹿者、ここでは織斑先生と呼べ。それとなんだ、お前は挨拶も口クにできないのか」

……職業不詳、月に一、二回しか帰つて来ないうちの姉が立つていた。名簿を持つていかにも教師な感じで。

「織斑先生、職員会議はもう終わったのですか？」

「ああ。すまないな山田君、ホームルームを任せてしまつて」

千冬姉はそう言つと教壇に立つて俺達を見下ろした。
霸氣でも纏つてゐるんじやないか、つてくらゐのオーラで。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者
にするのが私の仕事だ。私の言つことはよく聞き、理解しろ。でき
ない者にはでくるまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らつても
いいが、私の言ひことは聞け、いいな」

言葉がまるで物質化でもしたんじやないかつて思ひくらゐに強い声
が俺達に響き渡つて行く。うん、この暴力宣言は間違いなく俺達の
姉、千冬姉だ。

「キヤーッ！ 千冬様よ！ 本物の千冬様よー」

「わ、私ずっとファンでした！」

「お姉さまつて呼んでもいいですか！？」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

俺が生きてきた中で一番の騒音が鼓膜を揺らした。

なんだこれは？おい、焰、いつの間に耳栓を？刻？もか！？

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。

それとも何か、私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

違つぞ千冬姉。その理論だとおそれりの学園の生徒の大半が馬鹿者になるだ。

「キャー！ 千冬様、もつと罵つて！」

「付け上がらないよううに嬲をしてえつ！」

もはやカオスだ。

「わついえば、織斑くん、わつかせ千冬姉つて……」

「名前も一緒に、まさか姉弟ー？」

「いいなあ、変わつて欲しいなあ」

うわ、なんかこっちにまで飛び火してきやがった。

千冬姉も、お前のせいだみたいな目をしないでくれよ。言わなかつたそつちにも問題有りだからな！

怖いからそんなこと言えないけど。

「……まあいい、続けるぞ。そこで笑っている男子一人。さつさと紹介しろ」

side 焰

まさか、千冬さんがここで働いているとは。驚いたものだが、違和感はあるでないな。さて、我の紹介か、なるようになれだ。

「真庭焰だ。趣味は甘味巡り。特技は忍法だ。諸事情あって工事参与到させた。一年よろしく頼む。」

区切る。反応は、戸惑っているな。山田先生は、困惑気味だし、千冬さんはため息をついている。

「あ、あの真庭君、忍法つてなんなのかな？」

「実際、見せた方が早いでしょう。織斑先生」

「好きにじる」

「では、忍法・演武・爪合わせ」

右手をかざす。みると、爪が伸びていく。クラス中が唖然としている。反応が薄いのは、一夏と刻?に千冬さん、それに筹もかな。

「以上だ。すまん、刻?、切ってくれ」

「あいよ」

手刀で爪を切っていく刻?。さすがに、千冬さんと筹も驚いているな。

「次は、俺か。鑑刻?だ。趣味は散歩と修行だ。特技つーか流派は?刀流。俺も、一夏と焰と同じくIIS動かせた。一年間よろしく」と刻?が紹介した。

「まあ、及第点だ。次」

あれで及第点か。そんなことを考えつつ、クラスメートの自己紹介を聞いていった。

一時間目が終わり今は休み時間。この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。俺ら以外は全員女子。「IS使える男」として一年生は当然在校生がみな知っているということだ。肩身が狭いな。しかも、俺の忍法のことも電光石火の「ごとく知られわたつていく。まあ、いざればれるからな。そんなには気にしてはいけない。

「よかつたのか、焰」

「別にかまわん。こればかりは、真庭の人間にしか使えんしな。刻？、無事か？」

「なんとか」

一時間目の授業内容すでにHPは黄色ケージか。一月で、電話帳の厚さを何とか覚えたばかりだしな。

「ちょっといいか」

「「「ん」」」

突然話しかけられた。

「筈」

田の前にいたのは、6年ぶりの再会になる幼馴染だった。

「廊下でいいか？」

「お、おひ」

と一夏。

「いひらー」

「いや、お前もだから」

なんだ俺もか。

side刻？

一夏と焰が出ていたことで自然に教室に残る男子は俺しかいない。
とやこへ

「ねえ～、ねえ～、よつよつ」

よつよつ～見ると、女子3人が俺に話しかけてきた。

「俺のことか？ええと・・・」

「私、布仏本音だよ～」

「で、その本音さんはなに用で？」

「うん。 ようようがほむほむの爪を手で切つたのって忍法なの～？」

「いや、純粹に手刀でだ。 ?刀流じゃ技にも入らない当たり前の技

術だ

「？刀流～～？」

「虚しい刀の流れ。と書いて？刀流。刀を使わない剣法だ」

「剣法？拳法じゃなくて～？」

「そういう流派だ。実習で見せる機会もあるから詳しく述べるで」

「そう言つたところでチャイムが鳴る。やれやれ、また授業か・・・。
罰せられー」

side焰

「- であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて

く、頭が痛いな。勉強は苦手というほどではなかつたが、アドバンテージが違ひすぎる。今の俺は、記録辺りの応用でやりくりしているが、あいつらはどうなんだろうか？一夏、頭に混乱のマークが付いているぞ。一か月まじめにやつてこれが。刻？～～～。戾つてこい。HPが残つていなぞ。頭から煙が出ていなぞ。

「織斑君、真庭君、櫻君、何かわからぬといふことがありますか？」

と山田先生。

「あ、いえ、大丈夫です」

と俺

「……と、……がわかりません」

と一夏

「…………」

返事がない。ただの屍のようだ。って違う。

「鱗君……」

「鱗、起きろ……」

と、出席簿で鱗の頭を叩く千冬さん。様になつてゐるな。

「つお、なんかさつきまで顔も知らない頬に入れ墨彫つたちよいわ
るやうなおつさんと話してた」

「「臨死体験……」」

ダブルで突つ込む俺と一夏。

「馬鹿者。騒ぐな」

と頭をはたかれる俺ら。

「鱗、入学前の参考書は読んだのか?」

「一応読みました。内容の6割しか理解できませんでした」

「全部理解しin」

「織斑先生、無茶言わないでください。これでも、刻?は頑張った方ですよ」

「甘いぞ、真庭。I-Sはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そう言った『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起きる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できるまで覚えるものだ」

確かに正論だな。

「とにかく頑張ります」

「つむ。精進するよ」

「え、え?と、鑑君。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張つて?ね?ねつ?」

「ありがとうございます」

「ほ、放課後・・・・・放課後見一人きりの先生と生徒・・・。あつ、だ、駄目ですよ鑑君。

先生、強引にされると・・・・」

「チエンジで」

「いや、気持ちはわかるが、そんなのねーから」

「ボケに同時に突っ込む俺と一夏。前途多難だ。

「ちょっと、よろしくて?」

「「「ん」」」

二時間目の休み時間、また三人でだべろうかとしていたところ声をかけられた。話しかけた相手は地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

「どうらさん?」

「これは一夏。

「・・・・・・・・・・・・

あんた誰? という田線。これは刻?。

「……あなた達、このわたくしを知らないと?」

顔が真っ赤になっている。ときどき、真希姉が蝶兄さんにでれるときによく真っ赤になっていたがな。やれやれ、気苦労も趣味なのかねえ。

「失敬。そして、なに用だ。セシリ亞・オルコット嬢?」

「あら、あなたはそちらのお二人より好感は持てますわね。このイギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしのよつと選ばれた人間とクラスを同じ……って聞いてます？」

「「「ん」」」

実際、「ここの……」の段階でまともに聞いてはいない。最後あたり、選ばれたの時点で鼻で笑つたがな。

「失敬。なにせ、俺らは四季崎の刀に選ばれているからな。国代表程度では動搖はせん」

「だな」

「つか、入試つてEISを動かして戦うやつ？」

「そうですね。わたくしが唯一教官を倒しましたわ」

「あれ、俺らも倒したぞ、教官」

「ああ、そうだな」

「わ、わたくしじだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃね？」

と、刻?。ピシッ。何か嫌な音だな。

「つかぬ事を聞くが、何分で倒した?」

「俺ら、一瞬だつたよな」

と一夏。一瞬、という言葉に反応してかオルコット嬢が何か言おうとした時、チャイムが鳴った。

「つ・・・・・一またあとで来ますわー!逃げない」とねーよくつて
!?

よくないわ。俺達はシンクロした。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特徴について説明する」

山田先生ではなく千冬さんが教壇に立つて
い。よつよど

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでの代表者と副代表者を決めないといけないな」

その言葉にじわめく教室。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。副代表はその補佐だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると変更はないからそのつもりで」

さて、クラスの状況を考えると自信家のセシリヤ嬢か？と考えてい

ると

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います！」

「私は鱗君を推薦します」

「私は、真庭君を・・・

「いや、私は副代表を自薦する」

しまった。条件反射で答えてしまった。

「では、代表候補者は織斑一夏か鱗刻？、副代表は真庭焰か。他にはいなか自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「すいません。俺は、副代表の方を希望します。そして、一夏を代表に推薦するぜ」

立ち上がっている一夏と冷静に対処する刻？。しかし、セシリ亞嬢は騒がないな。このままいけばいいのだが…

「納得がいきませんわ！？」

とはならなかつたな。

「『J』のような選出は認められません！」

だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしですね。わたくしに、このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえるとおっしゃるのですか？」

とまくし立てるオルコット嬢。しかし、よく舌をかまないな。

「実力からいつてクラス代表はわたくしがなるのが必然。それを、物珍しいからと言つて極東の猿にされでは困ります。わたくしはこのような島国まで『JS』技術の修練に来ているのであって、サーカスをするつもりなど毛頭『J』ぞいませんわ。いいですか、クラス代表は実力基準で決めるべきであり、つまりそれはわたくしですわ！」

改めて思つ。よく舌をかまぬものだ。

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らせないといけないこと自体、わたくしに取つては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて対してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

と一夏。やつてしまつたな。

「あ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの」

「それは、そちらもだらつ。オルコット嬢」

こいつなつては仕方がない。何とかおさめて見せますか。

「要は、我らの実力が知りたいのであるう？ならば、『J』は模擬戦

でもしてみた方が白黒はつきつづくのではないか?」

「おお、いいぜ。四の五の言つぱりわかつやすい」

「上等ですわ。完膚なきまでたたきつぶしますわ」

「だ、そうだ一夏」

「え」

「何を呆けている。代表候補はお前だぞ。それに我は、刻?と戦いたいしな」

「一年前の再戦か?」

「そのよつなものだ。織斑先生、いかかですか」

「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、セシリ亞、眞庭、鑓はそれぞれ準備を行つよ。それでは授業を始める」

さて、セシリ亞嬢を一夏に押し付けたが、意外にも早く再戦の機会を得た。今度は我的勝利だぞ、刻?。

第一話 入学（後書き）

感想、質問よろしくお願いします。

第一話 真庭家にて（前書き）

質問、感想よろしくお願ひします。

第一話 真庭家にて

放課後、俺達は職員室に呼び出された。

「部屋ですか？」

と、俺ら。もう決まったのか。一週間はかかると聞いたが

「事情が事情なので、一時的な処置として部屋割を無理やり変更したらしいです。そのあたりのことって政府に聞いてます？」

最後らへんは俺達にしか聞いられないよう耳打ちした。

「いいえ。てっきり、政府から嫌われているものだと思っていますし。よかつたいや悪いのかこの場合？」

と刻？。山田先生はぽかんとしているが、実際、刻？の「先祖様は家鳴将軍8代目を暗殺している。ま、俺の家も表舞台の連中から見れば大層な家ではないしな。

「つてことは荷物を一回家に取りに帰らないと、今日はまつ帰つていいですか？」

「あ、いい、荷物ならー」

「私が手配してやつた。ありがたく思え」

と千冬さん。

「織斑は生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろ?」

「うなだれる一夏。」愁傷さま。その時、内線が鳴った。千冬さんが取り、一言三言しゃべつたあと、

「真庭、鏻、駐車場まで行つてくれ。真庭の姉が荷物を届けに来た。ああ、鏻は一旦帰つて準備しろ。出迎えも頼んだからな」

「わかりました」

「寮の詳しい」とは織斑に教えておくから、聞いておくよ!」

もつ一度度返事をして、刻?とともに駐車場に向かった。

side刻?
あれか?」

駐車場に着くと、長身の真希さんと小柄の蝶次郎さんがいた。

「真希姉、それに蝶次郎さん」

「お、来たか」

焰の姉の真希さんと蝶次郎さん。一度、蝶次郎さんと戦つたが、負けた。だけど、そのおかげでずいぶんましになれたと思う。

「荷物はこんなでよかつた?」

「十分だ。真希姉。もしかして、仕事の途中だつた？」

「安心しなさい。有給よ。といひで、ナタリイで教師してゐつて？」

「ああ、しかも俺らの担任。だけど、違和感はなかつたな
「かもね。あ、刻？君は夕食ざつするの？」「こゝ、時間とか決まって
そつだけど？」

「だつたら家で食つか？」

「そういえば考へてなかつたな。

「いいんですか？」

「いいわよ。だけど、ちょっと帰り遅くなるけど大丈夫？」

「その辺のことは俺が伝えれば十分だろ？」「

「それもわづね」

「焰、たまには道場の方にも顔出せよ」

「わかつてますよ、蝶兄さん」

「そんときは俺もいいですか、蝶次郎さん？」

「いいぜ、刻？」

焰の荷物を下ろし終え、俺は真希さんの車に乗り家に向かつた。

side 焰

荷物を受け取り、寮に向かひ。番号は「026号室か。よひやく着いた途端

「なんだ、これは？」

突つ込んでしまひ。見れば廊下に女子がぞろぞろと出てこる。全員がラフな格好である。一部の子に至つては、田のやり位置が困る格好だ。原因は、

「何をしている一夏」

何とか通してもらひ、原因である親友に問い合わせめる。

「焰か？なんだうつな、非常に言い難い」

「やうか」

恐るべく、口にのじだ。嬉し恥ずかしいイベントでも起きたのだらう。

「寮の」とは夕食後にでも聞いた

「やうじてくれ」

会話を終え、1026号室に入る。

「織斑君の隣が真庭君の部屋だね」

「いい情報ゲット～～～」

聞こえなかつたことにしよう。

部屋に入ると、大きめなベットが一つ目に入った。ふむ、どちらかといえば布団派なのだがな。さつく荷物の整理にかかる。流石は真希姉。娯楽品も少しばかりは入つてゐる。情報端末もある。あらかた片付け終わり、最後に4つ残つた。一つは鳳凰の開け軸。一見アンティークに見られがちだが、これは音飛ばしの道具だ。2つ目は臘脂水晶。こいつは持ち主が死ぬと碎けるといいうわくつきの真庭の家宝だ。実際砕けたらしい。掛け軸を机の前の壁にかけ、その下に水晶を置く。3つ目は、真庭語（裏）の要訳のレポートだ。ところどころ暗号染みた文章になつていていたため訳が遅れたがようやく完成したものだ。そして最後に、去年の夏に見つかったISのコアらしい珠、計十個。真庭語通りにすれば残りは、鈍、？、鎧、鎧、鎧、釵、釵、鋸、銓、鎧、鎧、銓

真庭家の方針としては、反応があつた人にやろうという形になつた。ただ、鎧と鎧は危険だということで消極策で鎧を巻いてゐる。これらについては明日、千冬さんにでも相談しよう。そう思い、机の上に置き私服に着替え、焰のことを伝えるため職員室に向かつた。途中、1025室から大きな音が聞こえたが、まあ、なんだという風にスルーした。

食事を終え、1025室をノックする。出てきたのは、

「筹？」

「な、何の用だ？」

剣道着姿の幼馴染だった。明らかに何かあつたな。

「一夏はいるか？」

「すまない、ちよつと氣絶している」

させたんだな。あえてそこには触れずにしてやるひつ。

「ああ、寮の規則のことを見きたかったのだがな。知っている範囲で教えてくれないか？」

「先生たちから聞いていないのか？」

「途中で荷物が届いてな。受け取りにいっていた」

「そりゃ」

こうして、筈から知っている範囲で規則を聞きだした。細かな点は明日一夏に聞けばいいか。

「よくわかった。ありがとな、筈」

「へ、ひむ」

「何があつたかは聞かないが後悔はするなよ」

「べ、別に私は……」

はいはいと受け流し、俺は屋上に向かった。一夏の奴め、美人な幼馴染に恋い慕われているのに気つかないのは、ある意味重症か。まあ、これも青春かと思いつつ、1週間後に行われる模擬戦のため、私は鉢を出した。私は剣士ではない。剣を極めるのは無理だが、修めるることはできる。そう考えながら訓練に徹した。

side刻？

「いただきまーす」

そう言って、肉じゃがを頬張る。「ま

ここは焰の実家の真庭家。荷物をとつた帰りにこいつして御馳走になつていて。ここにいるのは、家長の亀有さん、奥さんの静香さん、焰の姉さんの真希さん、その恋人の蝶次郎さん、弟の密三郎さん、焰の従兄弟の海と涼君。蝶次郎さんと密三郎さんの兄鎌太郎さんは結構多忙な人なのがここにはいない。

「それで、IS学園はどうですか、刻？？」

と海が聞いてきた。皆興味深々である。

「まだ初日だからな。これからだと言いたいが、疲れた」

「そんなんにハードなのか？」

と亀有さん。

「そいつす。一時間目でバタンキューです」

「それは大変ですね」

と密三郎さん。結構イケメンなのに恋人がない。と焰が嘆いていたな。

「ま、学生の本業は勉強つてこと。頑張りなさい」

と真希さん

「あ、あの」

「どうしましたか、涼？」

「まだ、実習とかないのでですか？第三世代型とか見てないですか？」

現代っ子の涼君。そう言えば、エスに興味シンシンだつたか。

「まだだな。そう言えば、一週間後に模擬戦があるんだつたな」

「マジでか！？」

「そりがつつかないで下さい。蝶兄さん」

「で、誰と誰がですか？」

「一夏とイギリス代表の子だ。あと、俺と焰です」

「そいつは再戦か？」

「でしょ。言っちゃ悪いですが負けませんよ、俺は」

「どうでしょうかね？焰の忍法は、私たちの中でも種類が多いです
からね。苦戦になるでしょうね」

「そ・れ・に。あの後、俺がみつちり鍛えさせたからな」

「そいつは怖い」

「 そ う 言 え ば 、 千 冬 ち ゃ ん は 元 気 そ う だ つ た ？ 刻 ？ 君 」

と静香さん。基本的にひとつひとつしている。

「一夏の姉さんですか。 そうですね、元気そうでしたよ。元気すぎると、いつか・・・・・」

「何かあつたのかい？」

「どうせ、呑かれたんだろ。いや、バシッとする。」**図星?**

「どうやらもう少しですね。刻？」

「あらあら、まあまあ」

そういう雑談と食事を終え、再びE.S学園に向かう。部屋に向かう途中、何かと女子に話しかけられた。やれやれ、弾が聞いたら羨ましがられるかな?

side一夏

「なあ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・

「なあつて、いつまで怒つてるんだよ

「・・・・・怒つてなどいない

「顔が不機嫌そうじやん

「生まれつきだ

にべもない。筈と同じテーブルで食べているが、ギスギスしている。今朝気がついて、速攻で謝ったが不機嫌なままだ。原因は俺にあるが、この様子じゃ取り付く島もない。誰か助けてください。

「おはよー、一夏、筈」

「おっす

願いが通じたか、親友一人がやってきた。

「おはよー、焰、刻？」

「…おはよー」

焰が簾の様子に気が付き、俺に小声で話しかけた。

「一夏、何をした？」

「詳しふへは聞えん。助けてくれ」

「しょうがない。皿にイイチ「牛乳おじれ」

「ああ、てか糖尿なるべ、いつか」

「その辺は計算している。それに、カルシウムだ。カルシウムをとつておけば問題ないんだよ、この世の中」

「飛躍しそぎだら、とにかく頼む」

「ねえ~ねえ~、よつよつ。一緒に食べていいく~？」

横から、女子の声が聞こえた。

「本音さんじやないか、いいぜ」

と刻?。本音さんとその友達二人は刻?の隣に座った。

「 McConnell、そんなに食べるの?」

「ああ、朝にがつつり食べた方がいいだぜ。焰の場合、たまに甘い

もの控えた方がいいんぢゃないかってレベルだがな

「計算はしているぞ、刻？」

「それにしたつて、宇治金時丼はやめろよな」

「何を言つ。炭水化物 + 炭水化物は王道だぞ。あんぱんしかり。ケーキしかりだ。それにあまり間食はしないからな。問題ない」

「そういうもんか。てか、本音さんたち、そんなに少なくて平気なのか？」

「わ、私たちはねえ？」

「う、うん平気かなつ？」

何という燃費の良さだ。ISが女にしか使えない理由つて実はこれ
なのか？

「お菓子よく食べるし…」

…間食は太るぞ。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん、ああ。またあとでな。ほつ…篠ノ之さん

「俺も先に行こう、一夏、刻？。またあとでな」

「焰、頼む」

「まかされた」

side 焰

「 篓」

「 焰か、 びりした」

食堂を出るとすぐに見つかった。先ほどとは打って変わつて、血口嫌悪な顔付きになつてゐる。やれやれ

「 昨日の様子だと何かあつたが、 喧嘩でもしたのか?」

「 喧嘩をしたわけではないが、 その · · · · ·」

「 待て、 あの馬鹿はそんなにまことにしたのか?」

「 い、 いや事故だといつのは分かつてゐるが、 その鈍いんだ、 あいつは」

「 なるほど、 一夏の重症は今に始まつたことではない。 ともかく、 变に意固地になると変な方向に誤解してしまつ。 せめて、 一夏つて呼んでやれ」

「善処する」

「しかし、一途なものだな。一夏にはもつたいないくらいだな」「何を言っているー？」

「悪い、悪い。俺からは一言、頑張れよ」

「ああ」

やつて会話を終え、教室に向かつた

第一話 真庭家にて（後書き）

皆様にアンケートです。

もしよかつたら、真庭家獣組を募集しています。どんどん書いてください。

よろしくお願いします。

第三話 変化（前書き）

サブタイトルつけるのが難しいです。感想、質問待ってます。

第二話 変化

s i d e — 夏

一時間目の休み時間。焰たちとだべりつとした。筹も機嫌が治つたのか、今朝のよつなギスギス感は無い。しかし、昨日の様子見が終わりを告げたのか、

「ねえねえ、織斑君さあー。」

「はいはーい、質問。真庭君の忍法つてあれ以外使えるの?」

「鑑君で、休みの日なにしてるのー?」

「今日の昼ヒマ?放課後ヒマ?夜ヒマ?」

と俺達の席に詰めかける。流石の焰もたじたじだ。

「千冬お姉さまって血色はどうな感じなのー?」

「え。案外だらしなー

パンツー。

「休み時間は終わりだ。散れ」

わが姉上よ。いつの間に後ろで? ?

「ところで、織斑、お前のISAだが準備に時間がかかる。予備機が一合しかなかつたんだ」

「あると、一夏のヒミツがどうなるのですか？」

「学園で専用機を用意するそつだ」

「しかし大丈夫なものですかね。俺達は、HSコアモードキを持つて
いるんですが」

「HSコアモードキって？」

「ああ、織斑先生話してもいいのですかね、これ？」

「ああ、それ思つた」

「今のことには問題ない。束の奴にも確認は取れている」

「なるほど」

「ああ、そういうえば、これらの保存するにあたつて何か連絡とかな
いですかね」

と言つて、箱を取り出し見せた。

「特に無いな。初めて見るな。確かにHSのコアに見えるな

「ええ～～～！」

と絶叫。

「HSのコアって世界に467個しかないんだよね？」

「まさか、真庭君・・・

「いや、やましい」と何もしてないからな

「そうだぞ、ん」

見ると、球の一つが光っている。鋸

「この場合どうすべきなんですかねえ、先生」

事前に話はしていたため、千冬さんは

「一人、一人確認するしかないだろ」

ということで、クラスの女子が次々と触れてみたが、無反応。十人過ぎただろうか、箒が触れると、

「主、認証しました」

と声が聞こえ光を放った。光が薄れると、木刀を持った箒がいた。

「木刀だね」

「木刀だな」

「伝説の刀鍛冶も何か迷ったのかねえ?」

「いや、あれが四季崎記紀の造りし完成形変体刀⑨番目の刀、王刀・鋸。主題は、毒気のなさだつたかな」

篠はまっすぐに鋸を見つめていた。

「篠ノ介、しまえるか？」

「あ、はい、大丈夫です」

篠は目を閉じて、念じると右手の人差指に木製の指輪がはめられていた。

「さて、授業を始める。席に戻れ」

とこつ千冬姉の鶴の一聲で授業が始まった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかつたでしょ？」「けど」

休み時間、さつそく俺の席にやってきたセシリ亞は、腰に手を当ててそう言った。どうでもいいけど、お前好きだねそのポーズ。

「まあ？一応勝負は見えていますけど…さすがにフェアではありますせんものね」

「それは、速計でないのか、オルコット嬢。ここの奥の手は我らでも対処に苦戦する」

「あら、あなた方が言つ変体刀のことですか？確かに未知ではあります、所詮は過去の産物。敵ではありませんわ」

「それは勇ましいな。せいぜい、足元を掬われないようにな

「」心配なく。方に一つもありませんわ

「億に一つはあるかもな」

「馬鹿にしてますの？」

「あなた」

とにかく飯を食つに行きたい。そう思つ打ちをつた。

「Hの」と教えてくれないか、筈。このままだと、多分負けるからやあ

「ぐだらない挑発に乗るからだ、と言つたいといふだがいいだろ？」

「助かる」

「ところよつ、焰たがせじつむつもつだ？」

「心配には及ばん。すでに予備機（打鉄）が準備されている。放課後にでもアリーナで訓練する予定だ」

「同じく

「まあ、教官がいないことは不安であるがそれは刻も同じだ」

「ねえ。君達って尊の子でしょ？」

いきなり、隣りから話しかけられる。見ると、ヤヤ外側にはねた髪が特徴的な女子がいた。リボンの色が赤色だから三年生のようだ。

「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと

「はい、そうですけど」

尊ってそんなことまで広まっているのか。流石は女子、尊話には田がないな

「でも君達って、素人なんだよね？EVAの稼働時間いくつくらい？」

「試験の時のみだったよな。10分くらいか。瞬殺だったしな」

「瞬殺！？」だけど、EVAって稼働時間がものを言つのよ。もしよかつたら私が教えてあげよっか？EVAについて

そう言われる。ふと焰たちを見ると、示し合わせたかのように

「そうですか、では頼みます。ああ、一夏は籌が教えることになつてこるんで」

「頼みます。先輩」

と、ソーシャルとばかりにぐらりといっていた。

「ええ、よろしくね。放課後第3アリーナでいいかな?」

「大丈夫です。ああ、そういうばり紹介がまだでしたね。俺が、
真庭焰。こっちが、

「鑑刻? だ」

「私は、皿場硝子。じゃ、放課後に」

そつと去つて行つた。

「ふむ、都合よく見つかったな」

「そりだな」

「一夏」

「ん」

「今日の放課後、剣道場に来い。いちど、腕がなまつてないか見て
やる」

「いや、俺は工系のことを

」

「まだ、機体は無いのだろう。いいから見てやる」

「ま、それもそつか。よろしく頼む」

筈は、なぜか頬を赤く染めつつ

「うむ」

と頷いた。

「一夏」

「なんだよ。焰」

「食後に「コーヒー牛乳お」れ」

「ああ、てかイチゴじゃなくていいのか?」

「今は無性に「コーヒー」が飲みたい気分だ」

どうひじり甘いチョイスだな。

side 焰

放課後、焰とともに打鉄を装備して第3アリーナにいる。皿場先輩が基礎のこと教えてくれたので非常にうまくいっている。どこから噂が漏れたかは知らないが、第3アリーナにはギャラリーであふれかえっている。さてと、用意した鎖を手に持ち

「忍法・演武・渦刀鎌式」

忍法を使用してみた。ふむ、違和感はない。続いて

「永劫鞭」

繰り出す。装備として、チヨーンハウイップなんかないだろ？ か？ 聞いてみよ。焰の方を見てみると、七花八裂の練習をしている。ふむ我も負けられないな。

「真庭君」

「わざわざすみません。皿場先輩」

皿場先輩に頼んで射撃用の的を持つてきもらつた。用意した棒状手裏剣を構え、

「巻菱指弾応用」

先ずは、5丈（15メートル）問題なし。10丈（30メートル）問題なし。

12丈（36メートル）やや横にそれた。15丈（45メートル）きつぎり当たつた。ここまでか。

「すういね。銃器だつたらスコープとかついてるナビ、肉眼で当てるなんてやるじやない」

「あつがとつぜこます」

投擲の練習を切り上げる。時間も限られているので、最後に鉋を使いうか。

「絶刀・鉋」

右手に持ち、練習を開始した。10分経つただろうか。突如、眩暈を起した。何事かと思うと、

設定完成という声が響いた。すると、機体が光り始めた。目を開けると黒を基本とした機体となっていた。床には打鉄のコアらしきものが転がっていた。同様のことが刻?にも起きていた。機体は赤を基本にした十二単風の着物のようになっていた。

「真庭君、鑓君? どうやったの?」

皿場先輩が混乱していた。そう言われても分からぬものは分からない。待てよ、こいつは

「鉋が原因か?」

誰かが呼んだのか、千冬さんがやつてきた。

「真庭、鑓。とにかく、今日の練習はここまでだ。機体は少々調べさせてもらうが、時間はいいか」

「つす」

「問題ないです。あ、皿場先輩、今日はありがとうございます」

そう言って、アリーナを去った。

「検査の結果が分かつた」

ピット内で待機してしばらくたつたころか、千冬さんが戻ってきた。

「一人の機体だが完全に打鉄とは違つた機体になつていた。先ずは、真庭のからだ。性能は第三世代並の機体になつていて、特徴としては、機動性が他のI-Sに比べ高い。装備についてだが、砲のみだな。それでも、拡張領域が十分にある。最後に何かしらの能力が設定されていいるようだがこれについてはまだ分かつていない」

「分かりました。拡張領域が装備したい武装があるのですが可能ですか？」

「大がかりなものでは無ければな。次に鑑だ。鑑の機体は真庭の機体より性能が上だ。ただ、单一使用能力と常時発動型能力で大半が埋まっている。装備は、手甲と足甲のみ。能力についてだが、これも真庭同様まだ分かつていない以上だ。質問は無いか？」

「織斑先生、機体の名前は決まつているのですか？」

「決まつてはいないな。お前たちが決めていいぞ」

「では早速、『黒鳳』（くろほう）で」

「じゃ、俺は『森羅』（しんら）で」

「黒鳳と森羅か。分かつた、そう入力しておこう。以上だ。真庭、
装備については明日に聞こう」

それを合図に俺達は学食に向かった。

s i d e 一 夏 時は放課後

今俺は剣道場にいる。どこから噂が漏れたのか、ギャラリーは満載だ。あいつらのどこも今こうなっているのかな？それにしても竹刀持つのも久しぶりだな。その前に、いつもの習慣で針を発動させる。それを構え、目を閉じる。そしてなおした。

「よろしく頼む、筈」

「ああ、さつきのが一夏の？」

「ああ、四季崎記紀の完成形変体刀4番目の刀、薄刀・針。主題は、軽さと美しさだ。ただ、この刀スゲー脆いんだよな。」

「やうか、では始めるぞ」

30分後

「どうこういとだ」

「と聞われても」

手合わせを開始してから30分。俺の負け。やはり、ブランクが長いのが原因だ。

「…中学では何部に所属していた?」

「帰宅部だ。ちなみにバイトしてた。剣振つたのは半年前からだ。たまに、焰と剣?と稽古したけど、俺の勝率は2割だ」

「鍛え直す!IS以前の問題だ!それに筋は悪くないのだ。これから毎日、放課後に私が稽古つけてやる」

「いや、それはいいが、IS関連も…」

「分かっている。焰たちには一応勝つているのだな?」

「まあな。どっちかっていうと針の能力のおかげだ」

「どうこうことだ?」

「なんつーか線が見るんだよ。トランツって言つのかな。その線を切れば、まつぶたつに切れるんだよ。当ても、鏑でも」

「……す」「こな」

「よしてくれ。続きいいか?」

「いいだろつ」

と会話を終え、トレーニングを再開した。

side 刻?

訓練が終わり、学食に向かう途中、一夏達とであった。そのまま、一緒に夕食を食べることにした。

「で、どうなんだ、一夏のまゝは?」

「感覚を失つてこなが、筋は悪くは無い。1週間で使い物にしてやる」

と篠ノ之さん。明らかに、恋い慕つてゐるな。それに気がつかないとは、焰も言つていたが重症だな。

「焰と鑑君は」

「ああ、すまん。篠ノ之さん。俺のことは、刻?でいい」

「ああ、なら私のことは篠でいい。といひでHISの訓練は順調なのか?」

「それについてだが、機体が変わつた。恐らく、俺らのコアが原因であるがな」

と途中経過を焰が説明した。

「そいつは驚きだ。ことは、俺の針も」

「可能性としては十分あり得るな

「しかし、分からないな。四季崎院はHISで予測できたのかねえ?」

「さうな、今となつては真相は闇の中。知るすべは少ないな」

そう言つてこの話を打ち切つた。食事を終え、部屋に戻る。少し休んだ後は、今日の復習と明日の予習をする。それを終え、修行着に着替え直す。焰はシャワーを浴びていた。屋上に行く。アリーナでは練習できなかつたが、前々から考えていた奥義を完成させるためだ。すでに? 刀流の奥義は習得してはいるが、向上のためだ。梅の連続技その名も

「梅に鸞」

とまあ、発案したはいいがなかなか使い物にならない。まあ、練習あるのみだ。ここでは、打倒焰の技にしてやる。練習を終え、部屋に帰る。

「帰つたか、」
「…」

「どうした?」

「なんだ、半裸なんだ!?」

「いやー、このスタイルが一番しつくつくるし」

「知るか!? まさか」

焰はあわてて廊下に顔を出した。

「見り、刻?。一部女子が鼻血出してるぞ!...」

「ええ……俺のせい……？」

「当たり前だ。わざわざシャワー浴びて着替える」

「ひじり、日々は過ぎていき一週間後の放課後。つこにせつてきた。俺はピットに入らうとしたが、先に来ていたのか、一課と幕が廊下で待機していた。

「速いな」

「まあな。だけどまだ来てないんだよな、エラ。最悪、薄刀でやるしかないのか」

「落ちつけ一夏」

「ま、俺らが前座だからな、その間じや・・・・・

「織斑君、織斑君、織斑君」

「山田先生、大事なことほ一回でここと思こますよ。

「山田先生。落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はこつ。す～～～～～～～～～～～、あ～～～～～～～～は～

」

「はい、やいで止めて」

「ひ」

一夏、先生で遊ぶな。にしても、落ち着きないな山田先生。

「田上の人間には敬意をはらえ、馬鹿者」

パンツ！と織斑先生にはたかれる。自業自得だ。そうして、俺達はピッドに入る。そこには一夏の専用エサが鎮座していた。ゆっくり見たいところだが、あいにく時間が差し迫っている。さつそく森羅を装備する。

「刻？」

「何だ、一夏」

「頑張れよ」

「ああ」

さあ、戦おう、焰。

side 焰

ピッドに入ると、オルコット嬢が先に待機していた。とりあえず、会釈だけはしておく。あとは、頭にかぶり物をかぶる。さて、いく

「あの」

「なんだ？」

「何をかぶつていらすの？」

「見て分からないのか？帽子だが。少々変っているが、気にするな」

まあ、これは、戦闘着ならぬ戦闘帽だ。オルコット嬢は、何か言いたそうだったが、あきらめたのか、ため息をつぶ。

「オルコット嬢」

「なんですか？」

「一ヶ月咲いてやう。一ヶ月とあめくなよ」

「はあ？」

「忠告はしただ」

そう言って黒鳳を装備する。そして外に出る。刻も同時にでいた。

「さて、刻？。勝負の前に名乗りを上げたい。いいか？」

「いこせ、じやうからだ」

一呼吸置く

「？刀流剣士、鑑刻？押してまいる……」

「真庭忍軍末裔、真庭焰、忍び名真庭鳳凰、いくぞ……」

第三話 変化（後書き）

纂ちゃんに鋸持たせました。？もしくは鈍持たせてもいいかなとは思いましたが、やっぱ鋸でとのりで決めました。次回はちょっと長めにかこいつとおもつてます。

第四話 激闘

s i d e 焰

名乗りり上げ、さつそく、棒状手裏剣を投擲する。むろん、刻？は避け、あるいは手で払い落した。出し惜しみは無用だ。

「忍法・鬼火」

火球を発火させる。そして放つ。その数20。さてどう出る。刻？は迷いもせずに火球を避けた。しかもただ避けるのではなく、我に接近する。

「？刀流・牡丹」

避ける。が、追撃の雨だ。一旦距離を置く。チエーンウイップを装備。

「忍法・渦刀鎖式」

発動させ突貫。だが刻？は驚かず、「

「？刀流・桜」

馬鹿な！？発動している鎖を切るだと！？見誤った。桜を左手で防ぐ。装甲にひびが入る。チエーンウイップをしまい、続けざまに放つ。

「断罪円」

しかし刻？も

「離墨栗から、沈丁花まで打撃技混成接続」

打ち合う。ガキ、ガキン、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ

side一夏

俺はモニター越しから二人の戦いを見ている。まだまだ序盤だ。焰に至っては鉋を出していない。

「すごいですね～～、二人とも」

「ぐーぐーと篝が頷いている。

「二人とも、これくらいで驚いているんじゃ、後が持ちませんよ。焰も刻？もまだ奥義だしてませんから」

「奥義ですか？」

「おつと、焰は使っているな。断罪円。近距離最強の忍法ですよ」

「二人とも手が見えなくなるほど、神速で打ち合っている。

「一夏、焰の変体刀はどんな刀なんだ？」

「あいつの刀、絶刀・鉋。一言でいえば折れず、曲がらず、錆びない刀だ。普通、どんなものでも使っていくうちに不備が起きるけど、

あの刀はそうじやない

「何だそれは！？永久機関じゃないか」

「例外はあるけどな」

さて、そろそろ打ち終わる頃かな？

side刻？

埒が明かないでいつたん引く。焰も同様に引いた。

「流石は断罪円。ちょっとばかし、ダメージくらつたぜ」

「ちょっとばかしか。まあいい、どんどんいくぞ」

再び鬼火を発動させた。なら俺は

「？刀流・桜桃」

と衝撃波を放つ。鬼火に当たり粉碎され消える。

「ならば、大嵐小枯！！」

風が吹いた。こつちは向かい風、あつちは追い風。まさか…？

「さらに鬼火だ。名付けて、重ね忍法『百鬼夜行』…！」

成程、分が悪い。避けてはいるが当たるのは時間の問題か。本当は、

まだ隠しておきたかつたんだが、仕方あるまい。

「HS常時能力発動『属性レジスト』」

鬼火をいくつか避けつつ、またははじく。焰に接近する。

「?刀流・梅」

しかし焰は鉋を出しそれで防ぐ。一筋縄じゃいかないか、ならば、

「派生技、『梅に鶯』」

蹴り続ける。だがふさがれる。流石は、頑丈な刀だけはある。一旦距離を置く。すかさず焰は、

「報復絶刀！！」

突き技で来た。甘い。

「?刀流・菊」

てこの原理で武器破壊を狙う。が、気付いたのか、焰はあえて鉋を放した。そのまま、投げ飛ばされ地上に突き刺さった。やるなだが、その隙を逃さず、梅を放った。

s i d e ? ? ?

生徒会室の屋根裏。そこに私は待機している。否、せざるおえないか。

「左近？、いるんでしょ」

「ううう」

「相変わらず、生真面目ね。映像見えてる?」

「問題ありません」

「で、感想は?相生忍軍の最後の一人として」

「お譲りま、私は忍者ではありません。あくまでも、執事です」

「十人が十人今あなたのことを見て、執事より忍者だつて言つわ。脱線したわね」

「まだまだ、発展途上といったところでしょうか」

「そう。確かに、真庭君だつたけ。彼が使つた断罪円。あれ、左近の忍法の・・・

「生殺しです」

「ああ、それそれ。やつぱり、あの子」

「真庭忍軍の末裔でしょう」

「うちの『先祖様も節穴ね』

「調査したのは、わが先祖です」

「問題ないつて許可したのは私の『先祖様よ。左近、この子たちの

経歴ちよつと調べてくれない。期限は、そうね。GWの初日がいいわ。その日は、簪や虚ちゃんや本音ちゃん、正雪くんを誘つてご飯食べに行きましょ。その手配も

「御意」

「ああ、予約は6人よ。ちゃんと自分も入れなさい」

「御意」

そう言つて調査にかかる。忍者か・・・私は、忍法よりも刀の方に興味を持つた。恐らくあれが完成形変体刀であろう。それらを含め、入念に調べなくては。真庭忍軍か・・・思うところは無くはないが、私はあくまでも影だ。影はあくまでも影だ。生きて死ぬだけだ。

side焰

さて、手詰まりか。急に特攻してきたが、ダメージは見るとこり少ない。おそらく、HSの能力であろう。だがそろそろ使えるはずだ。私は棒状手裏剣を構える。

「断罪円か」

「いいや、巻菱指弾応用。一斉射撃」

本来巻菱指弾は精密射撃だ。数を増やすほど、命中率は悪くなる。当然避けられる。接近される。刻?が技を放つ前に

「爪合わせ」

右手の爪を伸ばす。刻？は、冷静に手刀で爪を切る。

「？刀りゅ・・・」

グッサ、本人にも何が起きたか分からぬだろう。我はすぐさま刻？の背中に刺さった鉤を抜き

「報復絶刀！！」

体重を乗せて切る。大ダメージのはずだ。が

「？刀流・董」

足が絡まり、手刀で押し倒され地面に投げ飛ばされる。油断した。上を見上げる。

「驚いたぜ。それが、お前の能力か、焰」

「まあな。私は、これが黒鳳の単一使用能力『死翔刀』。ネーミングセンスがないことはご愛敬だ」

「いいんじやないか、さて、そろそろ時間も押してきたな」

そう言つて刻？は地上に降りた。

「全力でいくぞ！！」

「やつてみる……」

「だだしその時には、ハつ裂きになつてゐだらうがな……」

生半可な技では効果は無い。ならば、

「断罪絶刀！……」

「七花八裂・改！……」

神速で切り合い、打ち合つ。すでに何百合やつあつたのかは分から
ない。気を抜いたら負けだ。だが、胸に掌底をくらつ。続いて、も
う一撃強烈なのをくらつ。氣絶しそうな感覚に陥りながらも、俺は
鉄をふるつた。それが届いた。好機、もう一度胸を切り裂いた。
勝つた。それが命取りだつた。刻？は猛攻にめげずに再び掌底を繰
り出した。同時に我も斬りかかる。同時に、ダメージをくらつ。そ
の時、

「エネルギー残量0。両者引き分け」

はい？

刻？も同様に首をかしげる。会場も同様に啞然としていた。

「よくもまあ、あれだけ持ちあげて引き分けか。仕方ないといえ
ば仕方ないな」

ピットに戻り、千冬さんの一言だった。

「まあ、一週間であれだけの動きだ。明日からも精進しろ」

「分かりました」

と、訓示が終わり、一夏に

「さて、次は織斑だな。いけるか?」

「ああ」

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか?」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

「一夏」

「何だ、焰?」

「勝つてこい」

「同じく、何ならときめかせろ」

「冗談言つなよ、刻?。あと、籌」

「な、なんだ?」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝つてここ

」の馬は。ま、一夏りじこなと思ひ。

「焰

「何だ、簾?」

「こつまでかぶつているんだ。その・・・鶴みたいな

「ああ、つかりしていた。それと、簾。これは、鳳凰だ。断じて
鶴じゃない」

私はそう突っ込んだ。何となく、鶴は嫌いだ。理性が受け付けん。

side一夏

「あり、逃げずに来ましたのね

セシリ亞がふふんと鼻を鳴らす。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。どこか王国騎士を連想させる。

「逃げるかよ。逃げたら、あの一人に笑われてしまつからな

「やつですか。なら、チャンスはいつませんわね」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなれば、今こそご諒諭のうになら、許してあげなすこともなぐつてよ」

「あいにく、そういうのはござらないな」

「やつですか。それなら」

俺は、皿をそらさず、動けるように警戒する。

「お別れですわね！」

避ける。あとからやつてくるソニック・ブームに翻弄されながらも、避けてこぐ。が、とうとう逃げたつていぐ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で…」

武器検索をする。あるのは、近接用ブレードと針のみ。まずは、近接用ブレードを展開する。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘技装備で挑もうなんて… 笑止ですわ…」

「やつてやるや」

激戦が始まった。

s.i.d.e 刻?

「圧倒的不利だな」

「そうだな」

焰が頷く。セシリアは油断はしていない。恐らく

「オルコット嬢が油断するのが先か、一夏が倒れるのが先か……あるいは、一時移行を待っているのか」

「針は扱いにくいからな。一時移行だな」

「針はどういった刀なんだ?」

と、簫が尋ねた。

「軽く、美しいそして脆い。だが……」

「奥の手がものすごく厄介だ。まあ、見ればわかるさ」

s.i.d.e 一夏

「はあ、はあ」

打開できない。セシリアの油断を待っているが、なかなか油断しない。

「まじまじ、どうなれこました

容赦なくブルー・ティアーズで攻撃していく。

「くそ……」

闇雲に降つたが当たりはしない。落ち着け、クールダウンだ。

一回距離を置き、深呼吸をする。よし、近接用ブレードをなおす。

「あら、降参ですか?」

「誰が。使いやすい慣れてない刀から、使い難い慣れた刀に換えるだけだ……!」

右手に、白い鞘の刀を持ち、抜刀する。

「薄刀開眼! !

目が瑠璃色に変化する。短時間で倒す。ブルー・ティアーズがレーザーを放つ。その攻撃を避ける。針が非常に軽いため、移動も早い。先ずはビットに近づき、舞う。

「零の舞・雪月花! !

ビット二三台に雪、月、花と刻みこむ。ビットは音もなく壊れた。

「なつ……」

残る一台もレーザーを放っていたが、壊す。セシリ亞に近づく。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機ありますよー。」

ヒサイルが放たれる。

「一の……つ」

なんで、5分経っていないのに……強制的に能力（力）の使用が闇ざされた。

ドガアアアン！！

s.i.d.e 篇

「一夏つ……！」

さつきまで圧倒していたのに。薄刀・針。実際その刀身は美しかった。そして、それを手にし変化した一夏の瑠璃色の目も……。

「薄刀開眼が切れたか」

「おかしくないか？一夏の許容時間は平均5分。やつと、3分つてとこひだぞ」

「実戦だ。いつもより、緊張はするものだ。負けたか……」

そんな……。

「ふん」

織斑先生が鼻を鳴らした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

黒煙がはれ、その中心には、純白の機体があつた。真の姿で

s.i.d.e — 夏

設定完成。そう声が聞こえた。唐突に変化した。

I.Sが光の粒子にはじけて消え、新たに形をなした。工業的な凸凹はきえ、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインに変化した。情報を整理し変っていたのは武器もだつた。「雪片式型」ああ、まつたく。

俺は針をなおした。どの道、薄刀開眼は使えない。雪片式型を構え、宣言する。

「白刀開眼！――」

目が浅葱色に変化する。これ以上、みつともないとこには見せたくない。守られるだけではいやだ。俺も、守りたい。

俺は、再びセシリ亞に接近した。セシリ亞もライフルで撃つてきたが、あたる気がしない。

「一の舞・月下氷刃」

セシリ亞の機体を切り裂いた。薄刀開眼に比べれば、ランクは落ちるが十分使える。

『試合終了。勝者

織斑一夏』

決着を告げるブザーが鳴った。

「やつたな一夏」

「ああ」

腑に落ちなかつた。月下氷刃一撃で倒せた理由が。白刀開眼は線は見えず、ただ勘で切つたようなものだからだ。

「なんで勝てたか分からぬ顔をしているな。それこそ、単一使用能力じゃないのか？」

あ、言われてみれば。

「やつだな。白式といつより、雪片の特殊能力だ。『バリアー無効化攻撃』相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる。そうするとどうなる筈ノ之？」

「は、はい。EISの『絶対防御』が発動して、大幅にシールドエネ

ルギーを削ぐ」ことができぬ

「なるほど。直にあたる分大ダメージなつえに急所に当たれば尚更だ」

すごいな。白刀開眼 + バリアー無効化攻撃。薄刀開眼より使える口ンボじやないか

「そうつまじ話があるわけないだろ一夏」

あれ、心読まれた？

「俺の死翔刀とてエネルギーを使った。一夏の能力も」

「その通りだ。雪片の特殊攻撃にはシールドエネルギーを使う。使い道を誤れば」

「自滅つてわけか」

なるほど。そうつまじ話は無いらしい。

「まあ、初陣にしては上出来だ。これからも精進しろ。一つのこと極める方が、お前に向いている。何せ 私の弟だからな

その後、山田先生からまた電話帳並みの厚さのルールブックをもうい退出した。はあ～。

ちなみに白式の待機状態は指輪だ。針と同化したらじことのじこと。

「やう言えば、お前、どつちが副代表なんだ？」

「俺だ

と瘤。

「最終的にじやんけんで決めた

さよだ。

「ま、今日は疲れた。飯を食つて寝る限る

「だな

「あ、簞」

「なんだ?」

「明日の放課後からも稽古つけてくれないか?」

「強くなりたい。まだまだ、」
「こいつはまだかなわないからな。あれ何
で赤くなつてるんだ?」

そして、何でお前らは「ヤーヤーしてこらんだ?」

「ま、いやない

「いやとは言つてない……その向だ。特別に付きたくない。いい
な……」

「ああ、よろしく頼む」

「暑いな」

「まつたくだ」

お前らうわさから何なんだと思いつつ食堂に向かつた。

s.i.d.eセシリ亞
「・・・・・ふう」

蛇口を閉じて、シャワーから流れる音を止める。掛けあつたタオルを手に取つて、顔にそつと当てた。

(先ほどの試合)

正直悔つていた部分があつたかも知れない。事前に彼の友人たちの試合を見て驚いたものだ。とくに最後の激突は凄まじかつた。それでも近距離だということで彼のことを甘く見ていた。

「織斑一夏」

あの瞳を思い出す。最初に見せた瑠璃色、最後に見せたライトブルーの瞳を。あの強い意志の宿つた瞳を。父とは逆連想をさせる。父を含め男なんて野蛮だと思っていたのに……ときめいてしまつた。あの人の……織斑一夏（理想の人）のことをもつと知りたい。

「どうしましょう?」

「どうやって彼のことを知ればいい? そつだ!!

「あの人たちならまちがいありませんわ！」

死闘を繰り広げた彼の友人たちなり答えてくれるだろ？。

side 焰

さて、食事がすんだ。そのまま、俺と刻？は部屋で休んでいた。刻？はシャワーを浴びているときだつた。

コンコン

控えめなノックの音がした。さて？誰かな。真庭語（裏）を閉じ、ドアを開いた。

「オルコット嬢？」

何故？とりあえず、部屋に招き入れた。

「じて、なに用だ？」

「織斑一夏さんについてですわ

一夏さん？まさか、

「まつた。一つ、聞おひ。あこひ」とやめいたのか?」

頷く。あの男は……

「要するに、一夏の」とを知りたいのだひ

「まあ、おおむねそういうわ。それと、わたくしの」とセセセシリア
で構いませんわ」

「分かつた。まあ、一言で言つなら、奴だ。良くも悪くもな。そ
れがたたつて、何人もときめかしてゐるからな……

「焰～～、シャワー～～～～～」

失念していた。後ろを見ると半裸の刻?が立っていた。

「つて、セシリ亞さんじやねえか

「ああ、セシリ亞。後ろを向くな。刻?、何か羽織れ

「夜分遅くに失礼しますわ。鏗さん」

「刻?でいいや、でなに用だ?」

「一夏の」とを聞きたいそつだ

「一夏の?まあ、一言でいえば良くも悪くもいい奴だな」

「ダブつてますわね」

事実なのでしょうがない。

「まあ、俺らに根掘り葉掘り聞くよりかは、直で聞いた方がいいぞ。あいつは、細かいことは気にせん奴だ。気軽に話しかけてみればいいさ」

「だな」

「そうですか。ありがとうございます。先週は心ないことを申して申し訳ありませんでしたわ」

「べつにいいぜ。それと、一夏口説くのは大分難しいぞ。俺の見たところ狙ってる人3人はいるかな」

「まあ、俺らは基本悪人でもない限り一応は平等に応援する。がんばれよ」

そう話を打ち切った。まったく、あの男は。そう思いつつ、激動の一日を終えた。

第四話 激闘（後書き）

感想待つてます。

第五話 妹分（前書き）

皆さん、アンケートありがとうござります。出すキャラは後書きにて。

Side刻？

「ではこれよりEISの基本的な飛行操縦を実践してもらひつ。織斑、オルコット、真庭、鏻。ためしに飛んでみる」

激闘の模擬戦から一週間、四月も下旬になつた。俺は早速、森羅を展開する。俺のI.S.森羅はほかの機体とは違い、機械的部品が少なくかつ総合的に能力が高いのが特徴だ。ツと閑話休題。俺はそこで試してみたいことがあつたので実践してみることにした。

「？刀流・七の構え・杜若」

クラウチングスタートの姿勢をとる。位置に着いて

卷之三

加速する。先頭を飛んでいた焰に追う。が、追いつかない。焰の機体、黒鳳は他の機体に比べて速度が速い。さらに、最近編みだしたか「疾風迅雷」という忍法。何でも、通常のどの歩法よりも早いと

「杜若か」

「まあな。まだ、これ使って飛ぶのはなれてないがな」

感覚はつかめた。さて、少ししてセシリ亞が、最後に一夏か

「お前、ひどいやつたら、早く飛べるんだ?」

「一夏さん、イメージはしょせんイメージ。自分がやりやすいよい方法を構築する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなあ」

「説明してもかまいませんが、長いですわよ。反重力力翼と……」

「分かった。説明はしてくれなくていい」

確かに。今の俺たちでは理解できそうにない。

「一夏、開眼のどつちかを使えばつかめるんじやないか?」

「使つていい間だけだ。普通に使えないと意味がない」

「難儀だな」

あの試合以降、セシリ亞は何かと付けて一夏のコーチを買つて出でいた。それに付け加えて、俺や焰にもレクチャーしてくれる。しかし、セシリ亞の好意には当然というか気付いていない。付き合いが焰より浅い俺が言つのもなんだが、うん、鈍感だ。ツト闇話休題。次の実習は、急降下と完全停止か。なら、

「落花狼藉!—!」

「織斑、鏻。誰がグラウンドを破壊していいといった？」

完全停止に失敗した。勢いつけすぎたな。一夏も同様か。とりあえず謝つとこ。

「「すみません」」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやつただろう」

篝が一夏を叱る。昨日のつて、あの擬音混じりのレクチャーか。ギロ！…と睨まれる。なんでわかつたんだ？それで満足したのか、一夏に説教をし始めた。うぐぐむ、あいつ絶対尻にしかれるたちだな。次の実習は武装展開か。俺自身が刀なんだがな。武装がない俺は見学だ。一夏は針を、焰は鉋を、セシリ亞は狙撃銃を展開させる。一瞬でだ。

「流石だな」

そう感嘆する。

「ねえ～～、ようよう

「なんだ、本音？」

「よつよつま武装は無いの？」

「ないな。あつても使えないし

「なんで？」

「鏪の人間は才能がないからな」

「だけど、あの試合はすゞかつたよ」

「まあな。才能がなかつたから？刀流が生まれたんだ」

刀を振るうでなく、刀になる。初代は、何を思つてそう決断したのか？四季崎記紀が絡んでいることは口伝で伝えられているが、それ以上に確かめようがない。うちの先祖は焰の先祖のように、史書は残していない。せいぜい口伝のみだ。現に、真庭語で家の七代目が尾張城を倒壊したと書かれていることには驚愕した。そんなことを考へてゐるうちに、授業が終わる。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、鏪、グラウンド片付けておけよ」

まいつたな。一夏が激突した分より、俺が破壊した方がひどい状況だ。穴埋めをしようとする矢先、

「織斑くーーん、鏪くーーん」

クラスの女子が話しかけてきた。

「今日の夕食の後つて何か用事ある？ヒマ？」

「特に何もないけど」

「まあ、屋上で鍛錬するくらいだ」

「刻？、焰も言つたけど何か羽織れよ」

スルーする。

「もしよかつたら、夕食の後食堂に残つてね」

またまにはいいか。そう思いつつ、穴埋め作業に入った。

s i d e 焰

「というわけでっ！織斑君クラス代表及び真庭君副代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

パン、パンパン。クラッカーが乱射される。さて、夕食後の自由時間の食堂。俺と一夏の就任パーティーが開催された。まあ、賑やかなのは嫌いではない。実家も祝い事があればこんな感じだしな。

「いやー、これでクラス代表選も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さつきから相槌を打つている女子は一組ではなかつたか？ちなみにこの場には三〇人以上いる。まあ、突つ込むまい。一夏の方を見ると篝とセシリ亞に酌されている。刻？は、布仏さんらと喋っている。ちなみに俺は、黙々と団子を食つていて。甘い。

「はいはーい。新聞部でーす。話題の新入生、織斑君、真庭君、鏻君に特別インタビューをしに来ましたー！」

「あ、私の名前は篠薫子。よろしくね。新聞部の副部長やつてます。はいこれ名刺」

受け取つて、その名前を見る。|画数が多い。

「ではではさばり織斑君ークラス代表になつた感想を、どうぞー。」

「えーと。まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといい「メントちゅうだいよー。俺に触ぬヒヤケドスるゼ、とかー！」

「さういふかといえ、俺の台詞だらう。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的」

高 健か。

「じや、まあ、適当にねつ造しておくからいことして、あの白い刀の名前教えてくれる?」

「太刀ですか。それとも

「日本刀の方」

「薄刀・針ですが」

「針ねえ。ありがと、次に真庭君いいかな?」

「かまいませんが」

「じゃ、副代表になつた感想を」

「ふむ。

「善処します」

「真庭君ももつと何かいい口メント言つてよ～～。ま、いつか、こつちもねつ造しといて、では質問です。真庭君の忍法は全部で何個あるの?」

「三つだが」

「この発言に会場がどよめく。

「あれ、試合じゃ三つ以上使つてたよね」

「俺が使える忍法は三つですよ。一つ目に鬼火。二つ目に演武。簡単に言つとほかの忍法をまねることができる忍法だ。俺が無理だとは思わない限りな。骨肉細工とか絶対無理だし」

「骨肉細工つて?」

「姿、形を変える忍法だ。一度やるつとして、1週間筋肉痛になつて以来やつてませんがね。俺からはこれ以上話す気はない」

「えー。三つ目の忍法は」

「それは我が嫌いな忍法だからな。使う氣もさうもない

「じゃ、最後に。試合に使つていたあの刀の銘は?」

「絶刀・鉋だが」

「鉋ね、じゃ、鑓君に質問。剣士手名乗つてたけど肝心の剣はどこにあるの?」

「ああ、否定する。刀流は刀を使わない剣法だ。刀を使えば刀自身に振り回されるからな」

「へえへへ、ま、うまくまとめといて、最後にセシリ亞ちゃんもコメントちゅうつだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか何とかいいつつ満更ではなさそうだな。少しばかり飲み過ぎたか、断りを入れトイレに向かった。なにせ、元々女子校だったために男子トイレというのは来客用のみしかないというのが現状だ。こればかりは不便ではある。用を終え、再び戻ろうとした矢先、懐かしい顔があった。

「鈴」

「へ、嘘。ほ、焰!」

何を驚いているかわからんが出会ったのは1年前、転校していった妹分の鈴だった。

「久しぶりだな。しかし、何で今頃？」

「ちよ、ちよっとした手違いでね。入学遅れて、転校つて形よ。ねえ、煩、悪いんだけど受付つてどこのあるの？」

「HJからだと少々かかるな。ついてこい」

「あ、ありがと」

「しかし、時がたつのは早いものだな。少しばかり見違えたぞ」

「それって、いい意味で？」

「まあな。といひで鈴、転校といひことは国代表か？」

「やうよ。といひでなんであんたはHJ使えるよになつたのよ？」

「色々あつてな。一言でいえば、HJの影響かもしれん」

そう言つて鉋を出した。

「家の蔵から、HJのコアらしきものが見つかってな、そのうちの一つが俺に反応したというわけだ」

「それがその刀？」

「まあな。銘は鉋。過去の四季崎記紀が作つたとされる完成形変体

刀の銘をもつものだ。と、着いたれ」

話しこんでいたらいつの間にかついたよつだ。手続きが長引きそつなので今日は分かれることにした。

「鈴、また明日な

「そうね。また明日」

なぜか、顔を赤く染めていたがまあいい。そのまま食堂へと向かう。

「真庭君、遅いよ～～」

着くなりつた。はて

「真庭君も早く早く」

ああ、集合で真か。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は～？」

「え？え？と・・・2？」

「ふー、74・375でした！」

なんだそれは、パシャリとシャッターが切られる。まあいいか。就任パーティーは10時まで続いた。刻？は少し鍛錬するといふことで屋上にでている。毎度のことながら半裸だ。止めようとしたが、一部女子から反発をくらつた。何故？と思いながら、真庭語（裏）読んでいる。既に読んだ真庭語より、際立つた内容だ。真庭語（裏）

の内容は大きく分けて3部だ。一つ目は初代について。二つ目は大乱について。三つ目は変体刀をめぐる争いについて。目を引いたのは大乱についてだ。飛騨鷹比等が起こした大乱。尾張時代の天下太平の折に起きた戦争。起こした理由も詳しくは分かつてない。その折りで飛騨勢に加算した真庭忍軍毒組。異質な真庭の中でもさらに異形な集団。長年真庭家でも分からなかつたことだが大乱で生き残つた唯一の毒鶴が……

「焰！！」

集中しすぎたか、突然の声に驚く。見れば寝間着に着換えた刻？がいた。

「何驚いてんだ？」

「すまん、集中し過ぎたようだ」

「真庭語（裏）か」

「まあな。さて、シャワー浴びて寝るか」

そう言つてシャワーを浴び、床に着いた。その日、何故だろうか。久々あつた妹分の夢を見た。

side一夏

「織斑君、おはよー。ねえ、転校性の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「国代表なのか？」

と刻？。

「そり。何でも中国代表候補生なんだってさ」

「「ふーん」」

「ちなみに焰はまだ来ていな」。また自販で甘いもんでも飲んでるのだろう。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリリア・オルコット。今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合つ。

「このクラスに転入していくのではないのだろう。騒ぐほどのことでもあるまい」

あれ、さつさと自分の席（窓側）に行つたはずの方気が、気がつけばそばにいた。

「それにしても、どんな奴なんだうな？」

「気になるのか刻？？」

「まあな。それよか、一夏。来月のクラス対抗戦の優勝賞品、学食のデザート半年間のフリーパスって聞いたか」

「ああ。・・・・・・あーー。」

「どうしました、一夏さん？」

「どうした、一夏？」

「あ、いや、焰が甘党だつていつ」と知ってるよな

「ああ、『飯に小豆をかけて食つやつだからな』
「最近はしなくなつたがな。まいつたな、負けたらただじやすまないな」

よし、とにかく頑張りつ。放課後をつそく練習開始だ。

「その意氣ですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をいたしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリ亞・オルコットが務めさせていただきますわ」

「ま、俺も手伝つや。とはいへ、専用機持ちは1組と4組だけじゃなかつたか？」

「そうだよー。余裕だよ」

「その情報、古いや」

ん？教室の入り口からふと声が聞こえた。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないんだから」

「鈴?……お前、鈴か?」

「わうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「なに、格好つけてるんだ?すげえ、似合わないぞ」

「んなつ……!?なんてこと誰つのよあなたはー。」

「うん、やっぱ鈴だ。」いつこう時は

「ナイスタイミング」

「なんだいきなり?」

「鈴と反対側のドアから焰が入ってきた。手には、いちじるおでん!?」

「てか、何だそれ、焰?」

「ああ、新作が出たからな。試しに買ってみたがはずれだ。おでんにイチゴは合わん。と、鈴か、このクラスに転入か?」

「一組らじいぞ」

「つて焰、あんた朝から何飲んでんのよーー。」

「イチゴなんだが」

「わうじやなくて、甘こもの取り過ぎよ。もつと節制しなさーー。」

「おい」

「なにがー？」

バシンッ！？気き返した鈴に痛烈な出席簿打撃が入った。

鬼

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

織班先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ

「す、すみません。畠、夏休み来るからね」
そう言ってダッシュする。変つてないな。

「そして真庭、さうさと飲み終われ」

まだ飲んでたのか！？しかし、今年はこう知り合いと再会することが多いな。

「一夏、わざわざの女子との関係なのだが」

「…」「…」

昼休みになつてすぐに簫とセシリアに囲まれた。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。焰、刻?、いいか?」

「ああ

「焰、気になつたんだがイチゴおでん以外になんか変つたものは試したのか?」

「ああ、練乳ソーダ、まあまあだつたな。蜂蜜「ーラ、甘すぎる。グレープフルーツと伊予柑のミックスジュース、なかなかいけた。その他は……」

「ああ、もういい。聞いてるだけで口のなか甘くなつてきたぜ」

「というより、本気で節制しているのか?」

「そうですね

「心配するな。忍法・鬼火で異常にカロリー食つてるから

「カロリー消費つだつたの、忍法つて?」

そんな話をしているうちに学食へ到着。案の定、鈴は入り口に立っていた。朝みたんなかっこつけた立ち方じゃなくて、昔みたんな鈴らしい仁王立ちで、だ。

「よ、とりあえず中に入ろうぜ。積もる話は毎飯食いながらで

「あ、ち、ちよつと一夏! 勝手に決めるなあつ!」

最近学習したんだ。あまり立ち話をすると俺にひとつよろしくない状況が絶対に展開されるって。

だから、俺はひとつと中で避難する。自分から好んで苦行はしたくないからな。

「それにしても久しぶりだな鈴。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか」

「まあね。昨日は、ありがとね、焰

「気にするな」

「なんだ、焰。鈴が転校したこと知らなかつたんじやないのか？」

「いや、昨日会つた。2組だといつことは今日知つた」

「焰、その娘とはどんな関係なんだ。まさか、付き合つてるとか」と鶴が聞いた。

「べ、べべ、別に私は付き合つてるわけじや……」

「落ちつけ、鈴。まあ、妹分といつべきか……何故睨んでいる?」

「なんでもないわよー。」

哀れ、鈴。というより、普段人のことを鈍感扱いしているがお前も鈍感じやないのか?

「妹分？」

「幼馴染よーー！」

「あー、そうだな。箒が引っ越したのは小4のだつたろ？鈴が転校してきたのは小5の頭だよ。で、中2の終わりに国に帰ったから、会うのは1年ちょっとぶりだよな」

よく考へると、箒も鈴も刻？も入れ違いなんだよな。

「で、こつちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺が通つてた剣道場の娘。で、こつちのでかいのが刻？。鈴が引っ越した後にやつてきた」

「ふうん、そうなんだ。これからよひしくね」

「ああ、ひつひつ

「よひしくな

「つて、箒だつけ。だいじょうぶよ。私はあなたの障害にならないから

「ああ、わざわざすまないな」

「なんの障害だ？」

「焰さん、それを聞くのは野暮つてことよ。わたくしはイギリス代表候補生のセシリ亞・オルコットですわ、同じ代表候補生として、

よろしくお願ひしますわ

「ええ、じゅうじゅうよろしく

セシリアに自己紹介した。

「なあ、鈴。親父さん元氣にしてるか？まあ、あの人こそ病氣とは無縁だよな」

「あ……。うん、元氣 だと思つ」

「うん？急に鈴の表情に陰りがさした。同時に焰も細い目をさらりと細めた。

「まあ、あれだ。これから3年ここに入るのだつ。よろしく頼むな、鈴」

「じつじつや、焰」

「なあ、一夏」

「鳳さんは」

「焰のことが」

鈴の様子を見て気がついたのだろう。小声で二人が聞いてきた。

「そうだよ。小5から慕われてるんだが、妹分としてみてるんだよ。あいつ。まったく、人のこと鈍感だと言つてゐけど、どっちが鈍いんだつて話だ、つてなんで睨んでんだお前ら」

「いや、なあ」

「一夏さんも人のこと言えませんわ」

「同じく」

「なんだよお前ら。

第五話 妹分（後書き）

真庭花梨 まにわかりん 忍び名 真庭火鼠

使用忍法 足軽 鼠火（鼠花火のような火を放つ）

外見は化物語の阿良々木火憐ちゃん（ショートカット）
年齢は、15歳 聖マリアンヌ女学院に通う。蘭とは友人。
V.E（Likeではない）

真庭洋子 まにわよしこ 忍び名真庭銀狐

使用忍法 口先八兆（常時発動型。弁舌上手）
花梨の母。鎌太郎の上司。真庭家の顧問弁護士。

以上を2巻の最初のほうに出せるように頑張ります。感想、質問待つてます。

第六話 歴史は再び（前書き）

感想、質問お願いします。

今回は独自設定がかなり入っています。

第六話 歴史は再び

side 焰

放課後第三アリーナ。いつものように訓練を始めるが、先に先客がいた。

「篠ノ内さん！？」、どうしてここにいますの！？」

そう、いたのは打鉄を装備した篠だった。

「どうしても何も、一夏に頼まれたからだ」

愛されてるな、一夏。さて馬に蹴られて死にたくないの俺と刻？はそうそうに離れる。今日は試してみたいことがある。鉋を構え、

「忍法・鬼火」

火球をまとわせる。が、

「うまくいかないな」

纏わせたはいいが数秒で消えてしまう。

「ま、練習あるのみか」

刻？は、奥義の練習中だ。以前よりきれが上がっている。一夏はなぜか篠とセシリリアと2対1で戦っている。頑張れ、一夏。骨は拾つてやる。

訓練が終わり、夕食を食べ終え、部屋に戻った。刻?は今日は鍛錬しないのか、読書中だ。タイトルは「化物語」どうやら、のほほんさん（布仏さん一夏命名）に借りたらしい。俺も真庭語（裏）を読んでいたが、用を足すため部屋を出る。わざわざ出るのが不便だと思う今日このごろ。部屋に戻ると、何か騒ぎ声が聞こえる。何なんだと想い開けると

「というわけだから、部屋代わつて」
「いや、難しいと思つぞ、それ」

部屋に鈴がいた。

「どうした、鈴？」

「ちよつと、焰は黙つてて。大事な話だから。悪い話じゃないでしょ。私のルームメイトかわいいし。刻?もむか苦しこのはいやでしょ」

「むか苦しへは無いが、ここの寮長織斑先生だぞ」

「え」

「いや、織斑先生だつて。まあ、あれだ。俺、ちよつとここの本、本音に返しにいくわ」

そう言つて刻?が行つた。さて、

「あー」

「なんでもない。今の忘れて」

まあいいか。適当に備えてあつた緑茶を入れる。

「まあ、あれだ。でも言ったが3年はここにいるんだよな」

「わうね」

「もしよかつたら、真希姉の結婚式出席しないか?」

「真希さんの?もしかして、蝶次郎さん?」

「まあな、挙式は今年の秋にだ」

「うう。行くわ、真希さんに色々よくしてもらつたし」

「そう言えば千冬さん、浮いた話とかないのかな?」

「どうだろ、あの人性格きつそだしだし」

「どううな。美人なのにもつたいない」

「そういえば、白夜さんは今何してんの?」

「あー、白兄は束さんの護衛?」

「なんで疑問符?束さんって篠ノ之束博士?」

「ああ。篠の姉さんだ。まあ、篠はよく思つてなこいつだ」

「事実、HISの進出によつて篠はそのせいで各地を転校するやつになつたそつだ。」

「まあ、分かんない」ともないかも」

「篠にはあんましこの事触れんなよ」

「でもよく、白夜さん、篠ノ之博士の護衛なんて、SAPみたいにな?」

「まあな。唯一、真庭家で忍者ぽい仕事をしてゐる」

「やつぱり、白夜さんの忍法つてどんなの?」

「逆鱗探し。名称しかわからない。あのしゃべり方も忍法の影響だとか」

「事実、白兄のしゃべり方は奇妙に聞こえる。」

「ま、拳式の日程決まつたらすぐ教える。とこりより、遅いな、刻?」

「(『氣使つてんのかじら』刻? とはじつ知り合つたの?」

「あいつか。まあ、今の様子じゃわからんが1年前のこの時期は荒れに荒ててな。寄らば切るつて感じだつた。なれそめだつたな。ふとしたことで一夏と喧嘩してな。俺も巻き込まれた感じになつた。まあ、結果は負けたがな。ちょうど通りがかつた蝶兄さんにも吹っかけてきてな、まあ、蝶兄さんが勝つたがな」

「へえ～

「ま、そのあと道場で説教されくな。なし崩し的に親友になつたつてわけだ」

「やうなんだ

そのときドアが開いた。

「遅かつたな、刻？」

「まあな。返したついで本音の部屋で「化物語」のマヨイまこまいの最終話を見てきたからな」

「……やうか。そろそろ寝るか

「さう、今日は帰るね」

「また、明日な、鈴」

「また明日、焰

そう言って鈴は行つた。

「なんだ、刻？」

「いや、な

変な奴めと思いつつその口は就寝した。

それから時は立ち五月、たまに鈴が部屋に遊びに来る以外は変哲もなく過ぎていった。俺の新技「鬼火式・絶刀」はまあまあ「まくい」つた感じか。そしてクラス対抗戦当田。

「焰」

「なんだ、刻？？」

「どうして、両頬にもみじが舞つてゐる。まだ5月だぞ」

「いや、なあ。鈴に応援を頼まれたが、フリー・パスのこと持ちだしたら急に」

「もういい。話さなくて」

「ほむほむ、りんりんに「ちやんと謝らなやや」
「た。

「しかしな、原因がわからん」

「いつ言いつと呟れた顔で俺を見る一人。

「案外自分の「」とはよくわからないもんだな」

「セリだね～～」

何を言ひ。少なくとも、あの鈍感（一夏）よつは自分の「」とは分か
るが。

side一夏

「ぐ、ぐしゃん！～」

今なんか、す””い馬鹿にされた感じだ。誰だ、噂をした奴はとか思
いつつ、アリーナに向かったが、ツインテールを逆立てた鬼がいた。

「え、どりしたんだ。鈴

「あーーー」

あ、やっぱいかむ。田にハイライトがはいつてなこじやなくて

「あ、いや、どりしたんですか。鳳さん」

「別になんでもないわ。ただ、焰をどりゅうつて痛めつけよつか考
えているだけよ」

あー、わかった。恐らく焰が（フリー・パスのため）俺を応援してい
ることに腹を立ててこらしこ。

「鈴」

「なに？」

「憂を晴らししゃへつ当たりで挑めば、負けるだ

「...」

「ひつちは真剣なんだ。焰のことは後回しにしてくれ

「そうね、悪かったわ、一夏。全力で倒すからね

「やつてみる、刀の鍛にしてくれ」

「何その言ひ回し？」

「ああ、刻？の決め台詞に影響されてな。痛いか？」

「いいんじやない」

「やうか」

そう言い終わった瞬間にブザーが鳴った。さて、やるか。

先手、必勝。まず、雪片を装備し、仕掛ける。がかわされる。同時に鈴が持つ青龍刀が襲いかかる。ガキン、何とか受け止めたがいかせん力の差が激しい。衝撃で跳ね返される。

「ひつ

俺は何とか以前ならつた3次元躍動旋回で体勢を立て直し、距離を取ろうとした。

「 甘い！！

パカツと鈴の方のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に「殴り」飛ばされた。

「今日はジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる。ジャブの後は、ストレートと相場が決まっている。あまり自信は無いが雪片を構える。再び光った瞬間に「白刀開眼」する。そして切る。

ドン！！

雪片に衝撃が走ったが、切れたようだ。

「な、なによその眼」

「とつておきだ。行くぞ」

再び仕掛ける。急加速急停止の訓練の際にひらめいた瞬間加速の際にひらめいた移動法「爆縮地」を使う。

「零の舞・雪月花」

切りこむが、雪月はふさがれた。

「やるな

「一年間で散々詰め込まれたんだから」

そういうなり2刀の青龍刀で襲いかかる。これを防ぐ。

ズドオオオオオン！！

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走る。ステージ中央を見るとモモくと煙が上がる。

「何が起こってる？」

混乱する。駄目だ。一度深呼吸をする。よし、

「一夏、試合は中止よ！すぐヒーリングに戻つて」

鈴からプライベート・チャンネルが飛んだ。

「ああ、わかつ・・・

ハイパー・センサーが緊急通告を行つてきただ。

ステージ中央に熱源。所属不明のヒトと断定。ロックされています。

まずい。

ビームが放たれる。そして姿を現したそいつは異形だった。

「なんだよ、あれ？」

深い灰色をしたその I.S. は手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。首がなく、型と頭が一体化した『全身装甲』だった。何より目を奪われたのは、バチバチと電気を飛ばす背中に刺さった日本刀である。

s.i.d.e 刻?

「なんだありや？」

突然現れた I.S.。それだけならまだしも、あの異形な日本刀にだれもが疑問を持つた。

「悪刀・鑑と特徴は似ているな」

「鑑？」

「真庭語いわく持ち主に強力な活性力を与えると書かれてある。クナイの形つて書かれてあつたがな」

アラームがけたましく鳴る。

「とにかく避難するか」

「そうだな。本音、気をつけろ」

「うん」

行こうとした矢先

「なんで扉があかないの？」

そう扉がロックされていたのだ。中には泣いている娘がいる。まずいな、このままだとパニックになる。よし、やるか。

「ちょっとどぞいてくれ」

「鑑君」

俺は手甲を出しながら言った。

「今から、この扉壊すから、離れてくれ

群がつていた女子が離れる。

「？刀流奥義・飛花落葉」

全力で放つ。衝撃を受けた扉は後方に飛び去った。

「さて、落ち着いて避難してくれ」

俺は促す。

「ようひようひ

「どうした本音？」

「ほむほむが急に怖い顔して、どうか行ひちやつた

何が起きているんだ？

side 焰

気配を感じた。何者かは分からないがいやな予感がする。私は急いでアリーナを走る。人のいない廊下を走って見つけた。袖なしの忍び服を着て、蟻を模倣した帽子をかぶった左手が刀の人間を。まちがえない。あれは

「真庭忍軍毒組」

それに反応したのか、そいつは言った。

「いかにも、よく気がついたな」

「ヒリになに用だ。まさかあのヒスーーー！」

「察しの通りだ。さて、流石ヒリ相手に無茶はできないからな。引かせてもらおう」

そつと、左手の刀を振る。すると空間が現れた。

「待てーーー！」

「慌てなさんな。いずれまた会おう。真庭鳳凰いや××

！－何故名乗つてもいよいよ。驚いている隙を突かれそいつは空間に入り消えた。

何が起こつてているのだ。『…………ひ』なぜ「…………む』我のもう一つの

「焰！－！」

はたかれる。

「刻？？」

「それ以外誰に見えるんだ？…………何が起きた？」

「…………すまん。ちよつと混乱している。あとで話す」

「そつか。とりあえず、一夏と鈴を助けに行こひが。苦戦してゐる」

「分かつた。行こつ」

考える」とは後でもできる。ともかく行くか。刻？とともに走るそ
の途中、

「簫

ピットで観戦していく簫に鉢合せた。

「非常口は向ひだぞ」

「まさか」

「…………」

「まつたぐ、恋は眞田とせよくはいつがいの場合は感心しない。

「俺らが救援に行く。避難してくれ」

「……すまない。一夏を頼む」

「そつ、つんだれるな。まつたぐ、いじまで思われるあいつは幸せ者だな」

「だな」

「か、からかうな

「冗談せり」今までにするか。行くぞ、刻?」

「ああ。気をつけろよ」

幕と別れる。さて、戻りますか。

s.t.e — 夏

「ひつ、近づけん

全身装甲のヒュは絶え間なく、ビーム砲を打つてくる。たまに食らわせてダメージの反応がない。針を使うか。できればそれは避け

たい。こちとら、もう何分戦っている分からぬ状況だ。開眼して、即気絶するかもしれないリスクがある。まずいな。

「あくまでもう、何で効かないのよ」

俺が知るかと言いたいが、恐らく原因はあの刀だろう。というより中にはいるのだろうか。動きも機械じみていくつえ、あの背中に刺さった日本刀。

「あれ、人が乗っているのか？」

「はあ、人が乗つてなかつたらエスは動かないでしょ」

「普通はな。だけど、例外はある」

俺がいい例だ。

「考えてみろ。刀がグツサリ刺さつている時点で動ける人間なんていない。試す価値はある」

「どうすんのよ？」

「鈴、援護頼む」

俺は雪片をしまい、針を構える。チャンスは一回、

「薄刀開眼！！」

すぐにはりをつける。爆縮地を使い、ビームを避け、舞う。

「一の舞、月下氷刃」

決まったかに見えたが、浅い。全力でその場から離脱する。離脱し終えると、一気に脱力感に襲われる。開眼をやめる。幾分ましにはなつたが、もう使えないだろ？

「決まったの？」

「いや、浅い

敵は少し止まっていたが、すぐ元にさしに攻撃を仕掛ける。

「やっぱ、あの刀か

どこの原理かは分からないが、恐らくダメージの原因はあの刀にあると思う。

「鈴、後エネルギーはどのくらい残ってる？」

「一八〇つてところね。一夏は？」

「一〇〇。無茶はできなーいな」

まあ、手詰まりだ。

「諦めるのは

まだはやいやつと

「焰ーー！」

「刻？」

「さて、第一回戦と行きますか」

「だな」

軽口を入れ、一人が参戦した。

side刻？

ざつと一夏から状況を聞きだした。やっぱりな、

「壊されて壊れないからと言つて、壊し続けて壊れないわけがないだろう」

「そうだな」

「援護頼む」

俺は、速攻で近づき

「雛壇栗から沈丁花まで打撃技混成接続」

「こいつをまともに喰らえば、272回死ぬと紫苑婆は言つていたな。

喰らい終わつた敵は、動きを止めた。背中に刺さつた刀から見るみると電気をとつてゐるようになつたが、それも尽きたのか刀は碎け散つた。

「一気に決めるぞーー！」

ここで決めるしかない。俺達は敵に向かって奥義を放つ。

「？刀流奥義・鏡花水月ーー！」

「報復絶刀ーー！」

「白刀開眼・雪月花ーー！」

「衝撃砲・最大出力ーー！」

これら奥義をくらつたが最後、敵は沈黙した。

「やつたか？」

「それを言つた、一夏。やつてない証拠になるぞーー！」

「何の話だよ？」

敵IS再起動

ハイパー・センサーからの情報が知らされる。

「だから言つたじゃないか」

「知らねーよ」

刹那、客席からブルー・ティアーズの4起動時狙撃が敵ISを打ち抜く。

センサーも沈黙を確認したようだ。

「やつと終わったか」

俺はそう嘆息した。

side 焰

事件が終わり、いくつかの注意と誓約書で今回の件は特にとがめなしになつた。一夏は打撲がひどいとこりで保健室に。俺と刻?は部屋に戻つた。

「焰、何があつたんだ」

「さつそくか。ま、引き延ばしたところで、お前の目は誤魔化せんしな。さて、語りつ」

一呼吸入れる。

「真庭忍軍毒組がいた」

「毒組?」

「真庭忍軍が12頭領4組に分かれていることは知っているだろ?。かつても1組存在した組があつた」

「それが毒組か」

「しかし。組員は体のどこかが刀で構成されていると裏には書いてあつた」

「それでわかつたのか」

「ああ。その前に」

「私は扉を開ける。そこにはいたのは

「鈴か」

「ほ、焰」

「聞いていたのか？」

「くくりと頷く。

「はいれ」

「いいの？」

「断つても聞くだろ」

頷く。

鈴も入れ、再び語る。

「途中でいやな気配辿つてみて見つけた奴は左手が刀だった。どう

やら、あの I.S を手引きした後だつたらしい。空間操る忍法でばれずに入したんだろう?」

「どんなチートよーー!」

「そうでもないな。少なくとも今回は、I.S 相手に戦闘は試みなかつた。が、実力は不明だ」

「しかし、何で今頃になつて現れたのかねえ?」

「不明だ。毒組が最後に登場したのは、尾張時代の中頃の大乱だ」

「それつて確か飛驒鷹比等が起こしたやつでしょ」

「ああ。毒組は真庭本軍を裏切つて、飛驒勢に加算した。ま、これで真庭忍軍が結構力落とす原因になつたがな。毒組自体は 5 人で構成されてたが 4 人は大乱の英雄、鑓六枝によつて討たれた」

「鑓六枝、鑓?」

「俺の『ご先祖だ』

「へえへ。あ、でも焰、最終的に一人残つてゐんでしょう。だつたらそいつの子孫が

「いや、それは無い」

「あれ、なんで?」

「最後に残つた一人。真庭毒鶴後の鳳凰は完成系変体刀をめぐる争

いで死んでいる。結婚もせずにな

沈黙する。

「無論、出奔したものも少なくは無いがこれとこつて断定できるものはしない」

「先生たちに言つたの？」

「言いたいところだが言つたところで迷宮入りだ。真庭の問題は真庭でけりをつける」

「ま、なんにせよ、アクション待ちか」

「そうだな、すまんな、刻？、鈴。こんな話をして」

「気にすんな。しかし、俺らの刀といい、真庭忍軍といい共通点が

「四季崎記紀」

鈴の一言にハツとした。

「焰、前に話してたよね。四季崎記紀が作った変体刀をめぐつて真庭忍軍は滅んだって」

「まあな。わが先祖人鳥が唯一生き残つて真庭を再興させたが、この国はまだ四季崎の思惑のうちか」

「そうかもしだんな。ま、憶測の一つか

「そうね。ん～～～、なんかいろいろあって疲れちゃった」

「そうだな。結局対抗戦は中止。わいば、フリー・パス」

そう言つと鈴の顔が不機嫌になる。やれやれ、

「冗談だ。機嫌直せ」

「ん～～～、じゃ買い物付き合つて」

「わかった。ここで何かおいらがつ」

「本当！……約束だからね」

そう言つなり、鈴は部屋を出て行つた。

「お熱いね～～

「さあな」

とにかく色々あつて疲れた。今日は寝るに限る。

s.i.d.e.??

「あのIISの解析結果が出ました」

「ああ　どうだつた」

「はい。あれは　無人機です」

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑君達の攻撃で機能中枢がほとんど壊されていて修復不可能です」

「コアはどうだつた?」

「…それが、登録されていないコアでした」

「あの刀については」

「それも不明です。ただ言えることは

「なんだ?」

「現在の技術を駆使しても作れないことが分かりました」

「やはりな」

「何か心あたりがあるのですか?」

「いや、ない。山田先生、ご苦労だった。もう戻つていいぞ。あと
の処理は私がする」

「そして、いつまでそこでいるの?、白夜?」

「荒、場した？」

（あら、ばれた？）

「あの刀は

「吁、折れが追手いた素志木の死技だ」

（ああ、俺が追っていた組織の仕業だ）

「そうか」

再び、巡ります。刀をめぐる物語がくるくるから回ってこきます。

第六話 歴史は再び（後書き）

真庭道場！！（f a t eのタイガード場風に）

師匠（蝶次郎）「さて、第2話以降出番のない俺」と蝶次郎と

弟子一号（海）「弟子役の海が進行する「一ナード。なお、弟子役は毎回変わります」

師匠「さて、今回の話で一巻が終わるが、出てきたな毒組」

弟子一号「そうですね。作者も刀語零話を読んでいないから、W-i k+やその他で補完しているようですね」

師匠「大丈夫なのか？」

弟子一号「まあ、神のみぞ知るつてところですかね。ところで師匠 聞きたいのですが、真希姉さんに尻を敷かれているのですか？」

師匠「さあ、どうだらう？（口笛を吹きあさつての方向をみる）」

弟子一号「原作通りと。次回からは、途中でちらりと出てきたあの人 が出てきます。あの人出す時点で原作と矛盾するのですが」

師匠「元々、原作矛盾で始まつてから問題ないだろ」

弟子一号「そうですね。マジ人鳥可愛いのに（刀語を読みながら）」

師匠「じゃ、今回は

弟子一弔　「これにて終了」

幕間 1 (前書き)

テストやらなんやらで投稿が遅れました。

side 焰

さて、切り上げるか。屋上で鉋を振るのをやめ、部屋に戻ろうかと思つたが、

「今日は月がきれいだな」

そんな理由で屋上にあつた自販でリンゴサイダーを買い、飲む。

ああ、本当に月がきれいだ。

「そう思つわないか、仮面の？」

後ろには洋装の一昔前の歐州貴族がつけていた仮面をつけた男がいた。

「不驚禁、まさか気付かれるとはな」

「何者だ？関係者以外は立ち入り禁止だぞ」

「不答」

「どうか、なら殺るしかないよなあ……」

棒状手裏剣を投擲する。

「甘い」

相手も投げ返し相殺する。近接するが、姿を消す。

「相生拳法・背弄拳」

後ろからの声にせつとするが技を避ける。相生?まさか

「相生忍軍の末裔か」

「不否^{ひていせす}、もつとも壊滅前に離脱した者の末裔だ」

「あんたには恨みは無いが、ここで会ったのも何かの因縁。いくぞ
!」

そう言い放ち、棒状手裏剣を構え断罪円を仕掛ける。

「相生忍法・生殺し」

ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガキ、ガキン

剣戟が鳴り響く。まさかこれが、隙を作り、一旦距離をとる。

「断罪円の原型か」

「不否^{ひていせす}」

この時俺はEISを開いて戦うことは考えていなかった。ただ、単に戦いたい。

「いくぞ、仮面野郎」

「ここ

再び激闘にならうとした瞬間、

「そこまでだ……。」

いつの間にいたのか、千冬さんが制止をかけた。
我には刻？が、仮面野郎には上級生だろうか、水色の髪の先輩が手
を握った。

「さて、そここの仮面の。素性を明かせ」

「答え

「左近、いいわ」

「・・・右近がさいじん左近さいじんだ。更識家の執事だ」

「更識、どうこいつだとだ？」

「どうも向むかひ、学校でできない実家の仕事の報告ほうこくを逐一いちいちまで報
告こくさせていただけですよ」

「はあ、分かった。そういうことは手続きを踏め

「急な仕事もあるんで」

「それでもだ」

「はーーー」

「さて、何でお前たちはあの場で暴れていった?」

「ヤーの仮面が侵入者だと思ったので」

「売った喧嘩を買つたままでだ」

一触即発

「やめなさい、左近」

「落ちつけ、焰てかなんで、喧嘩腰?」

「単純明快だ。相生だ」

「相生?」

「相生忍軍。かつて真庭忍軍と双璧をなした忍軍よ」

先輩が答える。

「ま、今は更識家の執事だけどね、左近これからは彼との私闘は禁ずるわ」

「御意」

その後千冬さんから説教を受け解散となつたが、

「ちょっと待つてくれませんか」

一人を呼び止め、部屋の前まで来てもらい、H.I.G.アを持ち出す。思つたとおり、炎刀・銃が反応した。左近が触れると、

「主、認証しました」

その両と同時に手に自動式拳銃と回転式拳銃が握られていた。

「やつぱりな

「あら、よかつたの?」

「良いも何も真庭家の方針は反応した人が所有者だと決めているんで」

「感謝する」

「言っておくが相生は嫌いだ。直接的な先祖ではないにしろわが先祖に対する屈辱は忘れはしない」

「覚えておいで」

そこで別れた。この時、あの先輩に4ヶ月後に色々ひつかまわされることは予想もしなかった。

「で、それで寝不足なわけ？」

「ああ」

鈴との約束、買い物に付き合つてている。

「それにしても珍しいわね。焰、あんまし人嫌いしないのに

「まあな。生理的に鶴の次に嫌いなんだ、相生は。先祖が死にかけ、真庭の滅亡間近の原因も相生だ」

「そう。あ、あれかわいい」

と興味をなくしたか、ウインドウショッピングに興じる。まあ、たまにはいいかと思いつつ鈴を眺めていた。

午後3時、何か軽いものでもといつことで@クルーズでパフェを頼む。

「ほ、焰。あんた何頼んでんのよ？」

「なにって、メテオ・ブラックチョコパフェ2011だが」

「ちょっとは節制しなさいよ」

「最近気がついたんだが、鬼火でカロリー消費できるからな、なんかどうでもよくなってきた」

「良くないわーーまったく、次から気をつけなぞこよ」

「わいわい」

黙々とパフェを食べる。その後ろの席から

「じゃ、反省会だ。俺ら私設・楽器を弾けるようになりたい同好会のこの前のライブ、最初は盛り上がったが最後の方になるとお通夜のようになった。何故だ!!」

「思うに、原因は横司のあれのせいだと想ひのですが」

「なに、俺のどじがいけなにって言つんだ、真庭」

真庭?

「ほら、輝いた夢をつかむうんだーのところだ、輝いたトウメをつかむうんだー なんですか、トウメって?」

「何でもないよ、ただ、感じだして歌つたまでだよ

「そんな変な感じを出さないでください。はつきつぱつと不愉快です」

「俺もそつ思つ」

「僕も」

「なんだよ、みんなして……俺は真庭のせいだと黙つて……」

またか

「何を黙つのです。私のジーが悪こと黙つのですか……」

「ああ、お前一曲四のイントロからこきなつ歯で弾き始めたじやねえか」

「別にいいじゃないですか」

「良くないわ……それでびつべつして、ウオ、めをつかむうんだ……て、歌つちまつたよ」

「あなたの場合、いやんとしてもトゥメになるでしょーが……」

「俺も海のパフォーマンスは良くないと黙つ」

「僕も」

「何ですか、みんなして、それにライブが盛り下がるのは私のせいだけじゃありませんよ。弾、あなたにだって責任はありますよ」

「弾？」

「なに、ビニか悪いってこりなんだよ」

「盛り上げるためにクラッカー鳴らして、3発中3発が不発だった

でしょ。あれでわざかに残つていた盛り上がりも急降下でしたよ

「へ、反論できねえ」

「なにやつてんのよ。弾、海」

鈴が横槍を入れる。

「り、鈴！お前、ビラシナリに？」

「おや、鈴じやありませんか。焰からエス学園に転校したと聞いていましたが」

「わづよ。りなみに焰は

「呼んだか」

振りかえる。

「おや、焰もいましたか。恥ずかしいところを聞かれてしまいましたね」

「って誰なんだよ。この一人は？」

「うるせえですよ、横司。数馬を見習いなさい。私のことこの幼馴染ですね」

「よのしへ。しかし、聞いたところ呆れるを通り越して、もはやギャグかと思つた」

「私もそう思つわ。とくにトウメ

「初対面の娘にまで、駄目だしされた」

「といひで、焰と鈴は『ティー』ですか？」

「な、何言つてんのよ」

「買い物に付き合つてゐるだけだ」

「あのなあ、いつやつて喫茶店でお茶してゐる時点で世の中じゃ『ティー』

言い終える前に鈴に口を塞がれる弾。何があつた？アイコンタクトで会話をする二人。

終えたのか、鈴が離し、弾は

「まあ、あれだ。久しぶりだな。鈴、焰」

「そうね」

という感じで、雑談となつた。その後弾達と別れ、自然公園に向かう。この自然公園の一角には干拓されなかつた湖を中心にして市民の憩いの場所となつてゐる。昔から何となくこの場所が好きだつたので、今日もやつてきた。いつもは一人で来るが、鈴も一緒だと何か新鮮だ。

「ねえ、焰」

「何だ、鈴？」

「あそこそこいるのって」

ゆびをす方向を見る。そこにはショートカットのかわいい女の子と
ぺんぎん帽子をかぶつた海の弟、涼がいた。宿題なのか、スケッチ
ブックに何か描いている。

「涼だな。よく気がついたな」

「あの子ぐらいでしょ。あのぺんぎん帽子かぶってるの」

確かに。あの真希姉^{デザイン}のあの帽子は目立つな。涼の近くまで
来ると気付いたのか声を上げる。

「焰兄さん」

「久しぶりだな、涼。元気にしてたか

「は、はい。そ、それとお久しぶりです。鈴音さん

「鈴さんでいいわよ。そつちの子は…彼女？」

「と、友達です」

と、必死に否定する涼。

「そうですか。ただの友達とは私は何か悲しいです

「い、いや。その」

わざと肩を落とすショートの子に必死に言い訳する涼。毎度ながら思つたが何このかわいい生き物。

「嘘、嘘。分かってるんだから。あ、紹介遅れましたね。校倉名雪
つていいます

にっこり笑う。うん、かわいい。鈴も同様のよつだ。

その後、雑談に花を咲かせ、夕刻になり、涼達と別れ寮へと帰る道
中。

「焰にいちゃーん」

「だが、断る」

親戚の花梨に会い、ハグされよつとしたのを避ける。

「相変わらずね、花梨」

「それはこっちの台詞だぜい。鈴さんよ。あたしの計算違いだった
ぜい。まさかここまで焰兄ちゃんのこと……」

花梨が言つ終える前にその口を塞ぐとする鈴。

「無駄だぜい」

と真庭拳法の構えをとる。

「上等よ」

鈴も何かしらの構えをとる。仕方あるまい。

「落ちつけ」一人とも

「焰は黙つてて……」

「兄ちゃんは黙つてるんぜい……」

「まつ、なまら

「断罪……」

「こきなし……」

「断罪円は勘弁……」

と喧嘩はやめたようだ。名残惜しそうな花梨を見送り、寮へと帰る。途中で鈴と別れ自分の部屋へと行く。すると、

「私が優勝したら つ、付き合つてしまつ。」

「はい？」

と篠が一夏に告白をしていた。篠は言ひ終えると脱兎の如く駆け出した。非常に青春の一ページな光景だが恐らく一夏には通じてはいないだろ。なぜか、恐らくあいつは
どこまで?と言いそうな奴だ。一波乱あるかな。そう思いつつ部屋に戻った。まさか、この告白事件が俺と刻?を巻き込むとはこの時予想もしてはいなかつた。

今回は2話投稿です。

s.i.d.e — 夏

六月のある日曜日。俺と焰は久々に弾の家に遊びに来た。

「で？」

「で？ で理解するのは難しいでしょ？ 弾。一夏も困惑するだけですよ」

そうだがな。代弁してくれた海に同意する。

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

「それは幻想だ、弾」

焰が切り返す。ちなみに俺達は今、モンハンをしている。

「そうだな、結構気を使つ」とがめいし、何かと不便だな

「それだけならまだしも、暑くなつた影響かきわどに格好も田立つようになるし」

「それ、役得じゃね？」

「馬鹿言つな。誤解されちまつたら最後、弁解は難しくなるし」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんだ」

そつぱい終わって、クエストクリア。

「よし、これくらいこなすのか」

「畠かわらばんじつめか?」

と畠の予定を話すとすると、

「お兄ー…わっしきからお畠出来たつて畠つてんじやんー…わっせと食べ
に」

「わっだぜ。わっせと食べないとあたしが」

どかんと蹴り開けて入ってきたのは弾の妹の五反田蘭とその親友の
真庭花梨だ。

「あ、久しふり。邪魔してる」

「久しふりだな、花梨」

「畠兄ちやん~~~」

「だが断る」

ハグをしようとしたのが、花梨は突っ込んで行つたが、これをかわ
す焰。もはや定番と行つていい光景だ。

「い、いやつ、あのつ、き、来てたんですねか……?全寮制の学園に

通つてこるつて聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はちよつと外出。家の様子見に来たついでに寄つてみた」

「や、そうですか……」

しかし、蘭つて昔からそうだナゾ、何でおれ相手だと妙にたどたどしいといふか、敬語なんだらうな。それを知つてか知らずか、弾と海と焰はため息をついている。何故だ？

「蘭さん、花梨ノツクぐらいはしなさい」

「あ、すみません。海さん」

「海兄ちやん、何で知らせてくれなかつたのさ……」

「あなたに逐一知らせる義務はありませんから」

「そんな海兄ちやんに宣戦布告するばい」

「ほひ、花梨。私に勝てるつもりですか？」

「そうこつ海の田は獣猛な鮫だ。一方の花梨は

「女に一言は無いーー。」

なんかかつこいい」と言つてゐる。ていうか

「やめろ、お前ら」

弾が突つ込む。

「すみません。少々血が騒いで」

「「」めんどだぜ。弾兄ひやん」

「そんな」なんで廻飯をお「」いつてもいいひとになつた。

「でよ「」一夏。ファースト幼馴染?と再会したつて?」

「ああ、簞な」

「ホウキ?……?誰ですか?」

「簞姉ちやんか、元氣にしてるの?」

「花梨、知ってるの?」

「お「」、幼馴染だぜ」

「アリ?」

「で、一夏。進展は無かつたなのか?」

「「」じつに」とです?」

「ああ、セリの鈍感(一夏)はあらう」と「一冉同じ部屋であんな」ことや「こんな」とことを

「までまで、してないからね。そんなこと決してしてないからね」

「へタレが」

「何ぞやくせんまざれて毒舌はこでいるんだ、海。

「あんなことやこんなことやそんなことまで……。」

「いや、やもれもしてないし、そんなことつてなんだ?」

「黙つて食え。お前ら……。」

五反田家の家長として、この商店街の大将（ちなみに中将は亀有さん）の五反田巖さんが現れた。

「すみません、大将」

「分かればよし」

満足げに頷いて料理を始める。

「お兄。あとで話しあいましょう……。」

「お、俺、この後一夏達と出かけるから……。ハハハ……」

「では夜に……。決めました」

なこを？

「私、来年IIS学園を受験します」

「その手があつた！！」

蘭が決意表明すると同時に花梨が便乗する。

「これで堂々と焰兄ひやんに付きまとえる」

「付きまとつうな。第一、洋子おばあんを説得できるのか？」

「大丈夫。父さんと鎌兄ちゃん経由で説得するから」

はあ～～とため息をつく焰。

「私達の成績なら余裕です」

「確かにHS学園には推薦は無いのでは？」

海の指摘に蘭と花梨は不敵にほほ笑み、一人ともポケットから紙を取り出し弾に渡す。

「げえつ！？」

「ほつ」

「HSの簡易適性試験…一人ともAですね」

「で、ですので」

「受かつたら、こりこりお世話をになるぜこ」

「ああ、受かつたらな」

と安請け合いしたら、剎那蘭が食いついてきた。

「や、約束しましたよー。絶対、絶対ですかうねー。」

「お、おひ」

「いいのかよ、母さん？」

「あー、いいじゃない別に。花梨ちゃんも一緒にいる」とだし。一
夏君、焰君、よろしくね」

「あ、はー」

「一応任された」

諦め顔で言う焰。

「弾、あさりめなさい」

「そうだな。ま、俺からは一言、IIS学園に入学する気なら、何か
しら護身の術は身につけている方がいいぞ」

「そうかも。じゃさつそく、道場に行くよ、蘭」

「ちよ、ちよっと待てよ。花梨」

怒涛の勢いで一人は出かけて行った。

「若いつていいですね」

「やうだな」

「二人とも、爺臭いぞ」

何を言つ

「さて、これからどうします?」

「久々ゲーセンに行きたいな」

「一夏、ニアホッケーで勝負だ」

あえて十連敗中のものを選ぶとは

「中学のままの俺だと思つなよ」

「いい、返り討ちにしてやるよ」

さて、行きますか。

s.i.d.e 刻?

「お久しぶりです。校倉さん」

「おひへ、わざわざ呼びたして悪いな。何か予定でもなかつたか？」

「いいえ、大丈夫ですよ」

今日、昨年居候していた校倉さんから呼び出された。

「今日、呼んだのは他でもない。紫苑さんから言伝を貰えるためにな」

「……祖母か？」

「ああ、今日はお前さんの誕生日だ。十六になつたら、伝えてくれつて頼まれたからな」

そこで区切り姿勢を正す。

「さて、言伝まじつだ。鏧の菩提寺に鏧家の歴史書を預かつてもらつてる。どう扱つかは、おまえの自由だとな」

「歴史書ですか？」

焰の真庭語みたいな？

「まあな、菩提寺の住所は分かるか？」

「ええ、分かります。お盆にでも墓参りのついでに取りにいこいつかと思ひます」

「あ、刻？お兄ちゃんだ」

突如かわいい声がした。

「せひ雪がん」

「じんちくば」

「あら、刻？の坊やじゃない」

名雪ちゃんの母、校倉彩子さん

「お久しぶりです。彩子さん」

久しぶりだね。そういうや、もう聞いたのかい？」

はし
體があした

卷之三

おはよー食へて

お嘗葉豆豆子にていたたかの〔〕

菊　　お兄ち　　人
遊　　人

一食べ終わってからな

何にせよ、行動は夏になるか。俺はそう思いつつ曇天の空を見上げた。

side焰

夕食後、山田先生に呼ばれた。以前頼んでいたものがようやく出来たといつことだ。

「わざわざすみません」

「いえ、大丈夫ですよ。問題はありませんか?」

作ってもらったのは、変体刀のコアの収納ケースだ。これまでコアがはいつていた箱をそのまま利用していたが防犯上と利便性を考慮したものがいいと思い、入学当初に頼んでいたものがようやく完成した。基本はIS装備の応用か待機状態がブレスレット、機動時がけ収納ケースとなる。待機状態でもコアの反応が分かる優れものだ。

「ありがとうございます」

「いえ、作ったのは私じゃないですし。そう腹まらないでください。ところで、真庭君。以前から聞きたいとは思っていたのですが、四季崎記紀の変体刀でしたか。他の刀はどんな特徴なのですか?」

ま、気になるのも仕方がないか。

「特徴ですか。一言で言つと

絶刀『鉋』主眼は頑丈さ

斬刀『鈍』 主眼は切れ味

千刀『?』 主眼は多さ

薄刀『針』 主眼は軽さと薄さ

賊刀『鎧』 主眼は防御力

双刀『鎧』 主眼は重さ

悪刀『鋸』 主眼は活性力

微刀『釵』 主眼は人間らしさ

王刀『鋸』 主眼は毒気のなさ

誠刀『銓』 主眼は誠実さ

毒刀『鍍』 主眼は毒気の強さ

炎刀『銓』 主眼は連射性と即射精と精密性

ですね

「全部銘が金属偏ですね」

「ま、それは四季崎なりのしゃれでしょうかね

そう言って後にした。ま、四季崎が完成させたかったのは、完了形変体刀?刀『鎧』こればかりは話したくはないがな。しかし、何故

鏢の「アがあつたのだろうか？」謎は深まるばかりだ。謎といえばもう一つ、まだ誰にも話してはいないが初代真庭蝶々が？刀流初代鏢一根と邂逅した同時期、初代真庭鳳凰も四季崎記紀と会っていたらしい註釈が真庭語（裏）に書かれていた。何故？と疑問ばかりわいてくるが考えたところで憶測にすぎないが、こここのところの事件を偶然で済ますのは腑に落ちない。考へても仕方ないか。そう思い、糖分摂取のため自販に向かつた。その後に、厨房で刻？の誕生ケーキでも作るかと思いつつその日を終えた

キャラ紹介

校倉 隼人

プロフィール

38歳。校倉総合運輸の社長。校倉必の直系。刻？の親戚。性格は豪快。なお、親バカ。

校倉 彩子

プロフィール

30代前半。隼人夫人。容姿は敦賀迷彩。筈の親戚。たまに、筈ノ之道場で剣道指南している。

校倉 名雪

9歳。涼のクラスメート。容姿は凍空^{ヒカル}なゆき(ショート)。めつ
さかわいいので、商店街にFC^{ファンクラブ}もあるとかないとか。

幕間 2 (後書き)

真庭道場 2

師匠「はい、やつてきました。真庭道場のコーナー。進行役は俺と蝶次郎と」

弟子2号「弟子2号の花梨だぜ」

師匠「わて、花梨は獣組募集で全さんが考えててくれたキャラだよな
弟子2号「やうだぜ、作者は名前見たとたんこれだつて決めたらし
いぜ。ところで師匠、何故作者は原作の獣組を出さないんだ?」

師匠「ん~。蝙蝠は現代の場だと奇奇怪怪だといつ理由で没。川
獺は最後まで悩んだが、先送りにしていつだ。出るかもしれない
いしでないかも知れない。狂犬は忍法でNGつという理由で、あと
後々キーパーソンとして出るかもつて作者はぼざいでいる」

弟子1号「骨肉細工と狂犬発動はチート過ぎるもんな

師匠「やつづお前の忍法も結構なもんだぞ。2つつて」

弟子1号「いやいや、師匠。あたしの足軽は自分が持つたものまで
軽減できないし、出来て海渡れるくらいだし」

師匠「十分スゲーよ。そここれから展開なんだが」

弟子1号「夏休みの回まであたしり出でこれないかも」

師匠「そつなんだよな。じゃなくて、次章あの人物（憑依）を出す
そうだ」

弟子一「号」「憑依って言つだけでわかるんじやないのか？」

師匠「あとそれからついに刻？があのセリフで決める場面が……で
るかも」

弟子一「号」「あくまで予想つてわけなのか。じゃ今回はこれにて

師匠「終」。あ、感想、質問まつてまーす」

第七話 風の予兆

side 焰

「おはよー、一夏」

「おひす」

「ああ、おはよー、焰、刻？」

いつもの面子で食べる朝食。

「刻？、今日昼休みいいか？」

「いいけど、どうした？」

「昨日、お前の誕生日だった。一日遅いが、誕生日祝いってことで」

「ありがとな」

とモード、

「おはよー、焰」

「グッモーニングですわ、一夏さん」

「おはよー」

鈴、セシリ亞、篠が来た。

「三人ともおはよつ

「何話してたの」

「ああ、昼休みに刻?の誕生祝いでもしようつとこつ話だ」

「わうなのですか。おめでとわいわくます、刻?さん」

「ありがとな。まさか、焰昨日帰るのが遅かったのは

「ああ、ホールケーキを作っていた。自信作だ」

「階段ケーキじゃないだろうな?」

「3段重ねだ

「多いでしょ……」

「やうだな

そこで話を打ち切った。なお、篝たちも参加することになった。

朝のSHRの前、教室はいつも喧噪だ。一夏は篝とセシリヤに囲まれている。刻?はのほほんさんとその友達と共に「化物語」の感想で盛り上がりしている。俺はと言えば、IS武装のカタログを眺めている。内容は銃火器。いかせん火力が乏しいので、何か装備したいがぱつとは思いつかない。黒鳳の容量も少ないので1武装がせいぜいだ。

「諸君、おはよう」

「と、もう時間か。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業となるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それも無い者は、まあ下着でも構わんだろう」

いや、構うだらうークラスの大半が心中で突っ込んだろう。

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はい。ええとですね、今日は何と転校生を紹介します！しかも2名です！」

「ええええええつ！？」

普通分散させるものではないかとは思う。ふと、手首のブレスレットを見れば鍛が反応していた。驚いていた我をしり日に転校生がはいつてきた。

「失礼します」

「…………」

ぴたりとざわめきが止まる。そのうちの一人が男子だったからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

「こやかな顔でそう告げた。しかし、一ユースになつてもよそうなものを・・・少し探しを入れるかと思いつつ、観察する。が

「男子！守つてあげたくなる系の！」

「しかもひづのクラス！」

「地球上に生まれてよかつた~~~~！」

「フフ、夏の薄い本の内容が

つて最後誰だ！！同時に一夏と刻？は思つた.....刻？？

side刻？

何でかは分からぬ。今まで女子と話しても、友達関係にはなるがそれ以上はいかないのが常だつた。まあ、紫苑婆が生きてた頃は？刀流の修行で忙しかつたからな。初めてだな、一目惚れつてやつ...

「花、は.....惚れても.....」ツ痛。なんだ今の？

「どうした、刻？？」

「いや、何でもない」

「そうか」

焰も何か考えているらしく、あまり突つ込まなかつた。外見は銀髪

の可愛い子なんだけど、雰囲気が眼帯もあってか軍人そのものだ。何、俺って軍人萌え？この考えに絶望していると、

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

そう言って

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

それで終わった。山田先生が泣いてるぞ。その子は一夏の方を見るなり、つかつかと近づき平手を

「物騒だな」

と焰がその手を止めた。

side 焰

「何者だ？」

「真庭焰だ。ドイツでは過激な挨拶が常識なのか？」

「邪魔だ！！」

さて、我に向かって平手を放とつとした瞬間

「主、認証」

機械的な声が聞こえ、ボーデヴィッヒの左手に大きく反り返った鍔なしの刀が握られていた。やはりか！ 鎖も意味がないことを悟り警戒する。

「なんだ、これは？」

「四季崎記紀の完成形変体刀の一つの一振り、毒刀「鍔」だ。氣をつけるよ、そいつは四季崎の刀の中でも最も邪悪な刀だ。自我が食われるぞ」

「何を馬鹿な

「ラウラ、忠告は聞いておけ

「教官へ。」

「与太話ではないとこり」とだ。 そうだな、真庭

「そうですね、抜刀しなければ問題ない

「そういふ事だ。ラウラ、しまえるか？」

「問題あつません」

そう言つて、なおした。左手の中指に禍々しいデザインの指輪が装着された。が一夏の方を見て

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

と言い捨て席に座つた。

「あー…………ゴホンゴホンーではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第一グラウンドに集合。今日は2組と合同でHS模擬戦闘を行う。解散！」

さて、どうしたものかねえ。今は考える時間は無いか。またあとで考えるかと思い、急いで移動することにした。

side一夏

「ああ！転校生発見！」

「しかも織斑君達と一緒に！」

HRが終わって、さつそく各学年の教室から情報先取のための尖兵が駆け出してきている。

「ちつ、予想以上に早い」

「したがあるまい。煙幕で」

「やめろ、この間もそれで怒られたじゃないか」

「何にせよ、急げってことだな」

「な、なに？ なんでみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ」

「…………？」

? なんで「意味がわからない」って顔をするんだ?

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいなんだろ?」

「あつ！ ああ、うん。そうだね」

「おかげで俺らは珍獣扱いの待遇だ、急げ、あと一、二分だ」

さて、どうにか群衆に捕まる前に校舎を出ることができた。そして、

第一アリーナ更衣室

「うわ！ 時間やばいな！ すぐに着替えちゃまおつせ！」

とにかく急げ。そう思い一気に脱いだとこりで、

「わあつ！？」

シャルルが叫んだ。

「どうした？」

「な、何でもないよ」

「「お先に一夏」」

見ると、焰と刻？は既に着替えたのか、脱兎の「」と駆け出していく。

「ああ、待てお前ら。急いで、シャルル」

「う、うん」

「遅い！」

第一「グラウンド」に無事到着とはいかなかつた。ああ、鬼が腕を組んで

ぱしーん

「くだらんことを考へてゐる暇があつたうどと列に並べー！」

俺とシャルルは一組整列の一番端に並ぶ。

「災難だな、一夏」

「お前らなあ……刻?、調子悪いのか?」

「うん、いつも通りだが?」

と言つて髪をいじくる。分かりやすいな。焰は焰で、目を鋭くしながら、もう一人の転校生ラウラ・ボーデヴィッヒをみて何か考え込んでいる。

「焰、やつぱ気になるのか?」

「ああ、毒刀『鍛』は真庭にとつても因縁があるからな」

「因縁?」

「ああ、真庭忍軍末代十二頭領が一人、真庭鳳凰が毒刀『鍛』の所有者だった」

「鳳凰? お前の忍び名と同じだな」

「ああ。しかし、なにも起きなければいいがな」

「末代頭領に何があつたんだ?」

「一言でいえば、鍛を抜刀して乱心した。わが先祖を切りつけ、真庭の里を壊滅させた」

「……凄まじいな」

そこで話を打ち切る。改めて完成形変体刀に戦慄する。そう言えば、変体刀については名前と特徴ぐらいしか知らない。以前、歴史の特集で巖流島の戦い（前編は宮本武蔵対佐々木小次郎、後編は鏑七花対鈴白兵）って番組を見たところ、後編の方があやふやだったような気がする。まずはそこから調べるか、そう思い頭を実習に切り替えた。

side刻?

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい!」

射撃！？まあい、ビのへりこまかにかつてこつとマジまか。まあ、なるよにこなれだ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。鳳！オルコット！」

戦闘実演か

「それで相手はどいつだ？わたくしは鈴をひとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。じつちの単語。返り討りよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

けじやつぱは銃器は無いわ。マジでマジで。

「あああああーつ。ビ、ビにてくださこーつー」

ぼんやりしていたため反応が遅れたが、体はすぐに反射して、放つ

「？刀流・蒲公英」

飛行物体を容赦なく貫く。やべ

ドカーン！数メートル離れた壁にぶつかり、その正体がわかつた。

「あいたたた、ひどいですよ、鱗君」

山田先生だった。

「すみません、突然のことだったので手加減できなかつたんで」

「「ホン、二人には山田先生と対戦してもいい」

大丈夫なのか？

と、さつきまで思つていていたが認識を改めよう。山田先生は、2対1にもかかわらず手傷を負わずに一人を倒した。二人の即興のチームプレイの未熟さが目立つが、それを差し引いても強い。

「さて、これで諸君にも工学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意をもつて接するように」

パンパンと手を叩いて織斑先生が皆の意識を切り替える。グループごとの実習になるようだ。訓練機が打鉄3機、リヴァイヴ3機といふことで専用機持ちがグループリーダーを務めることになった。俺はボーデヴィッシュさんの補佐をやるように指示されたが肝心の本人がやる気がないため実質俺が指示を出していた。

「おい」

ひと段落したところで声をかけられる。

「何だ？」

「さつきの技はなんだ？」

「？刀流・蒲公英。？刀流の初步の技だ」

「？刀流？」

「虚しい刀の流れと書いて？刀流。鑓家代々伝わる無刀の剣法だ」

「……時間があつたら、私と戦え」

戦鬪狂か？迷つたが頷いた。しかし、改めてみると「気がつく」ともある。この子には、何と言つか個がない。強気な姿勢も恐らく織斑先生を真似てているだけだろう。まるで、鍛で自分を覆い隠すように。恐らく、毒刀がこの子を主としてみたのはこれが原因かもしね。願わくば何も起きないよう祈るしかないな。

side 焰

さて、実習も問題なく進んでいる。途中、黄色い声が上がつたから何事だと思えば一夏が篝をお姫様だっこをしているではないか。相変わらずだなと思いつつ班員を見れば、期待の眼差しで見ているが、俺の身長は低い方だし、する気もさらさらない。シャルルの班は引き際を誤つたか、千冬さんの直接指導か。グラウンド20週はさすがにきついな。そう思いつつ、実習を進めた。

昼休みの学食。俺達は一つテーブルを使って刻？の誕生会をした。

「おめでとう、刻？」

「ありがとな、焰。にしてもやつぱ多いぞ。このケーキ」

「すまんな。ちょっと張り切り過ぎた」

「にしてもおいしいわね。煩、あなたまた腕上がった?」

「まあな

思えば、真庭家は全体的に甘党だと思つ。とくに顕著なのは俺と密兄さんだろう……。閑話休題。

「俺からはこれ」

一夏は刻?に限定物のスニーカーを贈る。そう言えれば、前に欲しがつていたな。

「ありがとな。けつこう掛つただろ?」

「いや、俺と海と弾の割り勘だからな、気にすんな」

いつした具合で誕生会は進んで行つた。

「真庭君」

声をかけてきたのは、デュノアだつた。

「良かつたのかな、僕が同席しても

「構わんよ。ついでと言つては悪いが、お前の歓迎会つて意味合いもある。ま、もつとももう一人の方は取り付く島もないがな」

それとなく誘つてはみたが、見事に無視された。俺はともかく、刻？の様子がおかしかつたな。まさかな。

「ま、ここで会つたのも何かの縁。長いかどうかは分からぬがよろしく頼む」

「うん、じつちこね、よろしくね」

につこりと笑顔を見せる。まあ、悪いやつではなさそうだ。俺も鍛の件で少しばかり気がたつっていたかもしれん。

「そう言えば真庭君達は何時も放課後にHSの特訓してゐるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、今月に学年別トーナメントがあるからな。一夏の奴がむらつ氣があり過ぎるからな。その特訓だ」

「僕も加わつていいかな？何かお礼したいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「助かる。よろしく頼む」

何はともあれしばらくは様子見か。そう結論付けた。

シャルル達が転校ってきて4日経つた金曜日の放課後。俺達はアリーナで訓練を開始していた。

s i d e 一 夏

「そう言えば、俺と焰まだ模擬戦してなかつたな」

「言われてみればそうだな」

ISの実習が始まつた折り、たまに模擬戦をしているが焰とまだ戦つたことがなかつた。

「なら、やるか」

「望むところだ」

アリーナの一画を借りて、焰と対峙する。周りには、簞や刻?をはじめギヤラリーが多数いたがこの際気にしない。

「簞、合図頼む」

「ああ、ござ尋常に…………始め！！」

雪片を構え爆縮地で距離を詰める。が、察知されたか上空に飛び棒状手裏剣が襲いかかる。

「はあ……」

それを薙ぎ払いつつ、焰を見れば鬼火を発動そして投げつけた。鬼火を避けるもしくは切り払いながら接近する。焰は棒状手裏剣を一本構える。巻菱指弾の応用か?と思ったが接近する。手裏剣が放たれる。これを弾……ガキン！！何だと……弾くビックリか弾かれた。それを狙つてか、焰は鉋を構え

「報復絶刀！！」

side 刻？

「新技か」

俺はポツリと漏らした。

「新技ですか？」

興味深げにセシリアが聞いた。

「ああ、あれが焰の新技、鉄甲作用。投擲の威力を9倍いや11倍
……10倍だったかな？」

「要は、焰さんの投擲の威力が増したといったところですか」

「そうだな。だが欠点もある」

「溜めですか」

「正解」

溜めに時間がかかるとぼやいていたな。

「さて、一夏はどう出るかな？」

side 焰

決まった。が一夏は体を捻つて直撃を塞いだ。甘いな。

「平突き……」

横薙ぎの攻撃を放つ。直撃だったが、後方に逃れる。鉋をしまい、鬼火で追撃する。が、流石に追い込まれたか、動きが機敏になつたため当たらない。そうこうするうちに、一夏は雪片を拾い構え、爆進した。溜める時間もないか。観念し、鉋を構える。ガキン、一合、一合と斬り合つが剣術の腕は一夏の方が上手だ。我に勝てる要素は突き技くらいしかない。刹那、一夏の目が浅葱色に変わり、雪片が白く輝く、

「雪月花！！」

3連撃をどうにか鉋で塞ごうとあがいたが、1撃しか防げなかつた。一旦距離をとる。鉋を構え、投擲する。当然一夏は避ける。それでいい。棒状手裏剣を構え、接近する。再び始まる剣戟。数合の後、わざと後方に引く。追撃する一夏。甘い。能力発動「死翔刀」を発動させる。一夏に向かう鉋。気付いたのか、鉋を弾こうとする。再び接近し

「断罪円！！」

を仕掛ける刹那、一夏は雪片を投げつけた。流石に予想外だ。と避けたところで、一夏は針を構え、

「薄刀開眼・式の舞、剣閃・木枯し！！」

剣閃を放つた。棒状手裏剣で防ぐがすべて碎かれたうえに大ダメージだ。持つてあと一撃。鉋を寄せて構える。一夏も察したか針を構える。空気が凍る。そして

「断罪絶刀！！」

「零の舞・雪月花ーー！」

交差する剣戟。

「負けたか」

我は膝をついた。僅かに一夏の方が早かつたところとか。そうつぶやいたと同時に一夏も膝をつぶ。

「か、勝ったのか？」

「ああ、お前の勝ちだ」

「良くやつた、一夏」

「お見事ですわ、一夏さん」

息つく暇もなく介抱される一夏。役得か。そんな中

「負けたわね」

「ああ、負けた」

鈴が話しかける。

「ほり、しゃつとしなきこよ。あと、これ

そつぱつて取り出したのは、ポカリ。

「わざわざ済まんな

受け取つて、飲む。

「しかし、あの新技は驚いたぞ、一夏」

「ああ、木枯しか。実戦で使うの初めてだつたけどどうまくいった」

初披露での実力か、我もうかうかはできんな。その次は、セシリ
アとシャルルの対戦で今日の訓練は終了した。

第七話 嵐の予兆（後書き）

真庭道場！！！

師匠「はいはじめました、真庭道場の「一ナ。今回の弟子は

弟子二号「真庭白夜駄（真庭白夜だ）」

師匠「なあ、いつも思つけど。聞きづらいんだよ、お前の会話」

弟子二号「鹿他内ダロ。折れの忍法ノ福左様何打から（仕方ないだろ、俺の忍法の副作用なんだから）

師匠「まあ、お前の忍法についてコニマタさんから質問がきてるから回答してやつてくれ」

弟子3号「歐。折れの忍法、逆鱗探しはナーガ難でも合一手を怒らせる岳じや名井ンだ。合い手の喜怒哀楽の意標を吐く忍法だ。ま、大半は起こさせて志摩津する琴が大井がな。（応。俺の忍法、逆鱗探しは何が何でも相手を怒らせるだけじゃないんだ。相手の喜怒哀楽の意表を突く忍法だ。ま、大半は怒らせてしまうことが多いがな）」

師匠「成程。だけど、やつぱ聞きにくいわ。といひで思つたけどさ、束とはどういう関係だ？むしろ、お前ら会話成立してんの？」

弟子3号「質れいな。束とは合い棒兼濃い人兼根役者兼有人兼指定と行つた常呂だ。且和も正立はしているぞ（失礼な。束とは相棒兼恋人兼婚約者兼友人兼師弟といったところだ。会話も成立しているぞ）」

師匠「そつか。てか、婚約いつしたのーー?」

弟子3号「（遠い目をしながら）左穴（さあな）」

師匠「……ま、気まづくなつたので今回はここまで。次回は一〇の
主役一夏が弟子役だぜ。感想、質問、誤字脱字、真庭道場の弟子役
希望があつたらどんどん書いてくれ。では、今回はこれにて

弟子3号「修了（終了）」

第八話 発覚（前書き）

展開早いです。

第八話 発覚

side一夏

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかつていろいろつむりだつたんだが……」

「一応だらう。見栄をはるな。現に対銃器戦にお前は弱すぎむ」

う…反論したいが事実なのでしょうがない。焰は焰で手裏剣と鬼火以外にも鉄鞭や真庭拳法、効果は薄いが閃光弾、煙幕等の暗器を unused したトリックな戦い方だし、刻？は衝撃波等で戦つている。俺も対銃器用に編み出した技、木枯しはまだ鍛度が低い。

「そうだね。僕と戦つた時もほとんど間合いを詰められなかつたよね？」

「うう……、確かに。『瞬間加速』も『爆縮地』も読まれたしな」

「一夏のHSは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「そうだな。だけど、懷にはいれば一夏の勝率はかなり上がるもんな」

俺の勝利の大半は開眼のどちらかだ。一日の使用時間も少しだが増えたもののそれを頼りにしちゃいけないな。シャルルの瞬間加速に関する講義を受けながら理解を深めた。

「そう言えば、一夏は射撃武器の後付武装がないんだよね？」

「ああ、そうだな。俺と刻？は、拡張領域がないからな。焰はなんか一つ、つけるんじやなかつたのか？」

「まだ、思案中だ」

「なら試しに射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

そう言つて渡したのは、さつきまでシャルルが使つていた55口径アサルトライフル『ヴェント』だった。もう、使用許諾はしたらし。ために撃つていぐ。感想は速いと言つたところか。続いて、焰が撃つ。本人いわく、片手銃がいいと。そして

「俺か」

刻？の番になつた。焰から受け取る？とするが、

「あ」

「ま、待て」

謝つて落としたが、それを拾おうとするが、

思つように拾えない。そんな調子なわけで、他の場所で練習する子達に

「すまん」

と詫びを入れること5回、ようやく拾つて構えたが

「刻？……どこの向かつて撃つ氣だ」

「へ？」

構えたはいいが、銃口を自分に向ける始末。やつと氣付いたか、構えなおし撃つたところで、目標とは反対の方向に撃つ始末。

「刻？……やはり」

「だから、撃ちたくなかったんだよ」

ああ、やつぱりか。俺がそう納得してゐる中で

「じついつ訳だ？」

と筈が聞いてきた。

「ああ、鏃の人間には代々刀、武器が使えないっていつの呪いを受け継いできたんだよ」

「じついつ呪いよー？」

「そう呪つ呪いだ。それで、？刀流が生まれたんだよ

やけくそ氣味に呪つ刻？。俺も最初聞いた時、とてもじゃないが信じられなかつたしな。こつした騒動もあつたなか、午前の練習を終えた。そして昼食、俺達は屋上に集合した。

今日は、自分で作った弁当にしてみつと思つていたが

「簞とセシリアは俺に用意はするなと云ひつこ

「ああ、俺は鈴からだ」

と用意していない。

「い、一夏、弁当作つてきたんだ、食べるか?」

「い、一夏さん、わたくしサンディッシュ作つてきましたの。お召し上がりになつてくださいな」

と簞とセシリアから弁当を貰つ。

「焰、酢豚作つてきたから。か、勘違いしないでよね。作り過ぎただけなんだから」

鈴、シンテレは焰には通用しないぞ。焰は苦笑いしながら受け取り、「ほひ、パイン入りか。分かっているじゃないか、鈴」

と素直に称賛している。さて俺もまづ簞の弁当を開ける。

「お、つまらうだ

サケの塩焼きに鶏肉のから揚げ、こんにゃくとじの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えというバランスの良い献立の数々がそこにはあつた。食べてみれば、どれもおいしい。

「つまらうだ、簞」

「そ、そりゃ

何、顔真っ赤にしてるんだ?」と思いつつセシリアのサンドイッチを食べてみると

「甘ーー。」

何で? B-L-Tサンドが甘いの? そして、刻?、何で徐々に後退している。何とかサンドイッチを食べ上げる。そう言えば

「籌、何でお前の分、唐揚げないんだ?」

「一夏、察してやれよ」

刻?が麦茶を飲みながら言つ。だから、分からぬんだって。

「だけど本当にまいから籌も食べてみろよ。ほら」

くわつ、と焰達が凝視する。何なんだよ、お前ら?

「あ、これつてもしかして日本ではカツプルがするつて言つ「はー、あーん」って言うやつなのかな? 仲睦じいね」

シャルルがそんなことを言つて納得したよつに微笑む。そしてセシリア、何故ハンカチをかんでいる?

「甘いな

「……そりゃ

焰と鈴が呟く。そんな感じで昼食会は終わった。

side 焰

昼食を食べ終え、再び訓練を始める。シャルルに片手銃を貸してもらい、撃つしていく。鈴のアドバイス等のおかげで巻菱指弾の応用で幾分か精密射撃も可能になつた。周りの様子はといつと、一夏と第はシャルルに射撃を教わつてゐる。刻？はセシリアに接近戦における簡易的な格闘を教えてゐる。その時

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソひ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だつて聞いてたけど……」

当の本人は、周りを気にする素振りは無く、一夏を見ている。まさか！我はすぐに銃を装備、投擲の構えをとる。思った通り、ボーデヴィッヒは実弾砲を向けた刹那、

「飛来絶刀！！」

銃を投擲する。ようやく一夏達も気づいたか構える。

「ずいぶんと物騒だな」

「貴様・・・・・」

射殺さんばかりに睨んでくる。

「ずいぶんと一夏に『執心ではないか？痴情のもつれか何かか？』

おこひ、と一夏が突つ込むがこの際気にしない。

「誰が。あいつがいなければ教官は大会一連覇の偉業を成しえただろ。おこひとは容易に想像できる。だから、存在を認めない」

「つは。何を言つかと思えは。確かに千冬さんの優勝であつただろ。うな。だがな、あの人は優勝そんないしより一夏を選んだ。それがすべてだ。それにな、責任の一端は我にもあるからな」

そう言つて、棒状手裏剣を構える。

「まだ、とやかく言つのなひば、我が相手だ」

「助太刀するよ」

とシャルルが隣に立つ。一瞬で装備呼び出し（コール）を終える。

『そここの生徒一何をやつてこる一学年とクラス、出席番号を言えー。』

スピーカーからの声が鳴り響く。騒ぎを聞きつけたのである。

「……ふん。今日はひこひ」

横槍を入れられて今日がそがれたか、あつさりと引いた。やれやれだ。そのまま鉋を拾いしまう。

「焰

一夏が話しかける。

「あのときの」「とは『氣にしてないからな』

「言つたな。うまくやれば、お前が誘拐される」とも、千冬さんが優勝逃すこともなかつた

「馬鹿言つた……平行線になつそつだか、もつ『わな』」

「すまん、一夏」

「…あ～。もう4時だし、今日はやめましょ。焰も一夏もくよくよしない。いいわね」

鈴が仕切り直すように声を上げる。鈴の明るさには毎回助けられるな。といいつつ、ロッカーに向かつた。

「わついや、一夏。シャルルはどうした？」

「何か用事があるみたいだ」

転校以来シャルルはIISの実習後の着替えを一緒にしたがらない。何故かなと思った時、携帯が鳴る。メールのようだ。内容を確認すると、奏兄さんからだつた。

「すまん、刻？。少し用事が出来た。先に帰つてくれ」

「何かあつたのか？」

「野暮用だ」

と言い、外に出る。以前にシャルルについての情報を花梨の兄貴、奏兄さんに依頼した。俺の情報力では、せいぜい外堀が限界だった。

「奏兄さん、さつきのメールの件だが」

「ああ、俺もびっくりいたぜ。まさか、ISシェア3位のデュノア社がスキャンダルすれすれなことやってたなんてな」

「語訳はいいです」

「あいあい。シャルル・デュノアだつたな。率直に言おう。女だ。本名は、シャルロット・デュノア」

……？……！女！

「なぜ、性別を偽る必要があるんだ？」

「ああ、そいつはなお前らに近づくためだ。要は、お前らのISの情報の強奪のために派遣されたって事だ」

あれが演技だとは我にはとても思えぬだがな

「言いたかないんだが、彼女…愛人の子だ。その愛人って言うのも数年前に亡くなつてな。言つ」ときがざるおえない状態らしい」

ふざけているな

「おひつけ、焰。調べたついでに弱みも何個か掘んできた」

「……いつも思つんだが、奏兄さん、どこから仕入れているんだ？」

「そいつは秘密だ」

「わうわうと思つたわ。ともかく、まだまじでないでくれよ」

「あいあい。じゃ、またな〜〜」

ふう、予想以上に重い内容にため息をつく。知つてしまつた以上は真意を問わねばなるまい。しばらく思案した後、一夏の部屋へと向かう。ノックをする。

「すまんが、デュノアいるか」

「わっ、ほ、焰！？」

「……すまんが入つていいか？」

「う、うん」

入れば、一夏はおらず、ベットの一つが膨らんでいる。

「どうかしたのか？」

「ちよつと、風邪氣味で。一夏は夕食を食べに行つてゐるよ

「わうか……聞きたいことがあるのだが、いいか？」

「な、何かな？」

「率直に言おひ。お前、女だろ」

時間が止まるところ止まることなのだな。微妙な空気が停止した。

「な、何

「違和感を感じたのは、お前が転校した時からだよ。ニュースにもなつていい内容だ。事実、我らの時も圧力はかけたとはいへニュースにはなつたからな。次点はお前の日々の態度いや仕草かな」

と語り切る。彼女は、カタカタと震えていた。

「悪いとは思つたが、知り合いで凄腕の情報屋がいてね。それで、やめて……」

見れば、ベットから起き上がつたシャルルいやシャルロットと言ひ直して、目を真つ赤にしてぽろぽろと涙を流しているではないか。まずい、泣かせるつもりはなかつたのだが……

「た、ただいま……」

間が悪い時に一夏が帰ってきた。

「よお、煩……つて何でシャルルが泣いてるんだ！？」

あ～～と思いながら、何とか事情を説明する。聞けば既に一夏に女であることはばれていたらしい。原因を追究したがはぐらかされた。

まあ、いつもの事かと思ひ、もつ一つ追究する」とした。

「まあ、我が聞きたいのは一つだ。汝……一夏と刻に害をなすか？」

いつも以上に目を細め睨む。シャルロットは一瞬、怯えたが凜とした口調で

「なさないよ。なしたくな」

そう答えた。

「なりい」

そつまつて立ち上がる。

「え、そんなんでいいのか

「なんだ、複雑にした方がいいのか？」

「いや、そうじゃないんだからさ」

「そつまつ、答えた時の目で信頼した。それでいいじゃないか。ああ、この事はまじさんよ」

また明日と言い残し、食堂に向かつた。

気まぐれに屋上にでてみた。なんてことは無い夜だ。苛立つ……織斑一夏。教官に汚点を起こさせた張本人……。排除しようとしたが、生意気な小男に邪魔される始末。苛立つ。部屋に戻ろうかと思つた矢先、大柄な男がいた。見れば、修行だらうか、一撃一撃に氣迫を感じる。

「七花八裂・改!!」

技名を叫び、次々と技を繰り出す。その光景に私は見とれた。

「「」のくら」にじとくか……ボーテヴィッシュさん?」

「ずいぶんと修行熱心なのだな」

「まあな、強くなりたい一心でやつてるからな」

迷いなくそう言い放つ。その能天気さが癪に障る。

「なあ、あんたに一つ聞いてもいいか?」

「なんだ?」

「あんた、何のために戦つてゐるのか?」

その問い合わせ…

「知れたこと、教官のよつになるためだ」

そう言い放つた私に

「 そりが。ま、いいや、戦う理由なんて自分のためだ」

そう言って去っていた。なぜだ、何故そつ私を憐れむよいつを見る。

ただ苛ついた。

第八話 発覚（後書き）

キャラ紹介

真庭 奏

この物語における川瀬さん。花梨の兄貴。職業は探偵。副業で情報屋。情報力高し。

使用忍法 記録通り

第九話 嵐の序章

s i d e 焰

いつものように登校する。ふと、クラスの喧騒がいつも以上であることに気がついた。入れば、

「そ、それは本当ですのーー?」

「う、嘘ついてないでしょーうねー?」

「本当だつてばーこの噂、学園中で持ちきりなのよー月末の学年別トーナメントで優勝したら男子のいづれかと交際でき」

「俺らがどうしたって?」

「「「ああああー?」「」」

何なんだ?と思つた同時に予鈴が鳴る。

「じや、あたしはこれで」

「授業の準備をしませんと」

鈴とセシリアはさう言つて話をやう。まあ、いいかと思つて授業を受けた。

昼休みになり、食堂へと向かう。一夏と刻?は何か用があるらしく、珍しく俺一人だ。日替わり定食を頼み、食べる。その途中で

「焰、座つていいか?」

篠が同席する。何というか、霸気がない。

「どうした? また一夏がらみか?」

軽口を叩いてみるが

「それだつたらどんなにいいか」

両手の人さし指をつんつんさせながら言ひ。何この娘? 乙女なんですけど

「焰」

睨まれたので、とにかく話を聞こつ

「じ、実はな今度の学年別トーナメントで優勝したら付き合えと言つたんだ」

もしかしてあれか

「知つていたのか!?」

「偶然通りかかっただけだ」

「話を戻そう。それが何故かトーナメントで優勝したら男子のいすれかと付き合えると噂が広まっているんだ」

朝の喧嘩の内容はそれか。一夏と刻？はともかくなんで俺まで？俺は自分で言つのも何なんだが背は低めだし、顔はやや女顔だ。もてる要素はあまりないと思うのだが

「その台詞、鈴の前では言わない方がいいぞ。しかし、これはいつたいどうこうことなんだ」

沈みまくる簫。

「どうも何も優勝するしかあるまい。お前も木刀とはいえ完成形変体刀の持ち主だ。何かしらの見所があるのでないか？」

「やつ……かもな」

「これまたさつきとは違つた沈んだ表情になる。やれやれと思いつつ悩みを聞いた。

「まあ、それは人として持つていい感情だと思つぞ。かつとなつてグサつてならない限りはな」

「それでも不安なんだ。また、あんな風になるんじゃないかつて

「生真面目過ぎるが、簫。……つとつとつとつだ。王刀『鋸』の特性は知つてるか？」

「いや、知らないが」

「毒氣のなさだ。不安なら、無心になつて振つてみる。何か、答えが出るかも知れんぞ」

「……そうだな。色々愚痴つて悪かったな、焰。その、ありがとう

「別にかまわんよ」

そこで昼飯を食べ終わる。さて、午後もがんばりますか。

side 鈴

「「あ」」

先にアリーナにいたのはセシリ亞だった。

「随分と速いじゃない。焰達は？」

「まだ所用で遅れるそうですね」

「ふ〜〜ん

そう言いながら、準備をする。まさか、あんな噂流れてるなんてねえ。焰は一夏と同じくらい鈍感だからいきなり誰かと付き合うことは無いだろうけど、不安なものは不安だ。現に焰はもてる。一夏に比べると少ないけど、花梨みたいに積極的に行動する子もいるしなか3年の影の薄い先輩とも親しく話してたし油断はできない。にしてもあの鈍感は〜〜〜！！

「鈴さん……何、百面相してますの？」

「ええ！？ 嘘、顔にててた！？」

「くじと頷くセシリ亞。

「今は……セシリ亞」

「……あら」

セシリ亞の表情も険しいモノに変わった。二人の視線の先にあるのは、一機のI.S.。黒を基調としたカラー・リングを施されたドイツの第三世代機。黒き雨の名を冠する機体、シユヴァルツェア・レーゲン。

そして、その操縦者 ラウラ・ボーテヴィッヒ

「……」

「……？」

いきなり、撃つてきた。何とか避ける。

「……………」
「……どうこうもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してゐるじ
やない」

双天牙月を連結して、衝撃砲を準備する。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふ
ん、データで見たときの方が強そうではあったな」

いきなりの「」挨拶。

「何？やるの？わざわざドイツんだりからやつて来てほこられた
いなんて大したマゾッブリね。それともジャガイモ農場じゃそういうの流行つてんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方は言語をお持ちでないようだからあまりいじめるのは可哀想ですわよ？犬だつてワンと言いますのに」

「はつ、一人がかりで量産機に負ける者が専用機持ち、ましてや代表候補生とは笑わせてくれる。よほど人材不足のようだな、貴様らの祖国は。ですが、数だけしか能のない国と古いだけの国だ」

「言ひづやない。上等よ。

「いいわよ、やつてやつづじやない。セシリア、ビツチからやるか
ジャンケン」

「ええ。別にわたくしはどちらが先でも構いませんが、少しばかり灸を据えてやる必要がありますわね」

「はつ！ 一人同時にいいだ。一足す一は所詮一にしかならん。下らん種馬を他の女と取り合つようなメスと、不意打ちしかできん小男に恋などという現を抜かすメスに私が負けるものか」

「こいつ（怒）

「……いいわよ、そこまで言ひなマゾでボッコボコにしてやるから。廃棄処分になつても泣かないでよねッ！」

「こいつの場にいない人を侮辱するような方など、同じ欧州連合の者として我慢なりませんわね。一度とそのような口を叩けないよう！」

「口で呴いて差し上げますわ」

「御託はござりん、ひとつとと来て」

「「上等ー。」」

s.i.d.e — 夏

「一夏、今日も放課後練習するよな?」

「ああ、勿論だ。今日使えるのは」

「第三アリーナだ」

と焰が答える。やうに言えれば

「刻? たちはどいつした?」

「刻? は所用で今日は休むそつだ。篝は剣道場だ。鈴とセシリ亞は先に行つているだり?」

「やつか……それにしてもなんで篝は剣道場に?」

「おそれらへ鋸で素振りでもしているのだよ。あの刀の特性は毒氣のなさだからな」

などと、雑談していると

「「オーンー。」」

突然爆発音がした。

「何事？」

「いひちで先に様子を確認する？」

シャルが観客席へのゲートを指す。ピットに入るよりも早く様子を見ることができる。急いで向かい確認すると

「鈴！セシリア！」

二人が相手にしてるのは黒いIS「シュヴァルツェア・レーゲン」を駆るラウラの姿だつた。よく見れば鈴とセシリアの方が追いこまれていて、すでにエネルギーも操縦者レッドゾーン生命危険域に達している。

「まづいな

そつ言つたのは焰だつた。

「しかたあるまい

そつ言うなり鉋を構え、

「報復絶刀！！」

とアリーナを覆うバリアーに斬りかかつたが

「くそつ！？」

はじき返される。確かに時間は無い。ならば、

「焰、下がつてくれ」

針を構え薄刀開眼する。十分に見える。

「これが物を殺すつていうことだ」「

針で線を切る。アリーナを覆っていたバリアーが跡形もなく消え去つた。

「行くぞ、焰」

「承知……飛来絶刀！！」

と焰はラウラに向けて鉈を投擲する。

「ふん……。感情的で直線的、絵にかいたような愚図たちだな」

鉈が届く寸前で止まる。が時間稼ぎには十分だ。俺はセシリシアを、焰は鈴を抱え離脱する。

「う……。焰？」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな……シャルル、二人を頼む」

俺は雪片を、焰は棒状手裏剣を構える。

「前衛は任せる」

「ああ」

爆縮地を駆け、ラウラに接近する。

「面白い。実力の差を思い知らせてやる」

激突する刹那、ガキンと金属音が響く。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

「模擬戦をやるのは構わん。 が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならっては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなり」

トヒウラは素直に頷く。

「織斑、真庭、デュノアもそれでいいな……あと真庭、不意打ちはするな」

「！？」

よく見れば、鮑が死翔刀の状態になつてゐる。

「分かりました」

焰は、鉋を引き寄せて答える。

「は、はい」「僕もそれで構いません」

「よろしい。それではトーナメントまで、今後一切の私闘を禁止する」

パンツーと千冬姉が強く手を叩く。それはまるで銃声のよう銳く響いた。

「…………」

「…………」

場所は保健室。ベットの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむつスーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくともよかつたのに」

「あのまま続けていれば勝つていましたわ」

感謝するかと思えばこれである。

「鈴

焰が黒い笑みを浮かべ、鈴に近づき

「そんなこといつのまじめのお口かな～～

と鈴の口をつなぐ。

「いた…痛いって」

じたばたする鈴。なんか、中学の時もこんな光景あつたけ?

「でもまあ、怪我が大したこと無くて安心したぜ」

「そうですね。いつやって横になつてること自体無意味　つう
つうー」

馬鹿だろ

「馬鹿つて何よー馬鹿」

「一夏さんこそ大馬鹿ですわー!」

「お前らもな」

そつ言つた焰はセシリ亞の口もつまむ。まあ、いい薬にはなるだろ
う。

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「「ん?」」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。その後ろには、刻?と簞が。

「ななな何を言つてゐるのか、全つ然わかんないわねー。」
だから欧洲人つて困るのよね！！」

「そそそそですわね。そ、そう言つ邪推はいささか氣分を害しますわー！」

「一人ともまくしたてながら顔を真つ赤になつてゐる。……なんなんだ？」

「鈍感が」

「同じく」

後ろで刻？と簞が呴く。

「にしても、派手にやられたな。一人ともIRSの調子は大丈夫なのか？」

「ちょっとまずいかも」

「トーナメントに間に合えばいいのですが」

「難しいな」

カレンダーを見る。もう、トーナメントまで日数がない。その時

「ドドドドドドドド……！」

「な、何だ？ 何の音だ？」

「足音だな。数は数十人とみた」

相変わらず耳がいいな焰。ドカーン!と保健室のドアが吹き飛ぶ。
マジで?

「織斑君!」

「デュノア君!」

「真庭君!」

「鏺君!」

入ってきた なんて生易しいものではない。文字通りなだれ込ん
できたのは数十名の女子生徒だった。しかも俺達を見つけるなり一
斉に取り囲み手を伸ばしてきた。普通に怖いわ。

「な、な、なんだなんだ!?!?」

「落ちつけって」

「しかたあるまい、劣化版断罪……

焰がハリセンで断罪円を仕掛けようとしたのでひとまずは落ち着い
たようだ。

ん、なんだこれ

「なになに、え~と『今月開催される学年別トーナメントでは、よ
り実践的な模擬戦を行うため、ペアでの参加を必須とする。なおペ
アができなかつたものは抽選により選ばれた生徒同士でくむものと

する。優勝したペアには、学食ザートー一年間フリーパスを贈呈。締め切りは『』

「ああ、そこまでいいからーとにかくー。」

「我と組め、刻?」

「女子たちが『つよつよ』卑く、焰が宣言した。
『えらい、やる気じゃないか』

「無論だ。フリーパスだぞ。近接戦最強のお前と暗殺アサシ特化の我が組
めば優勝間違いなしだ」

刻?のところの振り仮名間違つてると囁つた。

「「「「ええええ～～～」「「「

「あ～～～、悪いな。俺はシャルルと組むからあきらめてくれ

「「「「ええええ～～～」「「「

「まずこ、ミスつたか。

「まあ、やつこいとなら……」

「他の女子と組まれるよこはいこし……

「男同士つじこつのも詮ハラハラになるし……『ハラハラハラ』

いつして、嵐のような喧騒ハラハラが去つていた。

「ふう……」

「あ、あの、一夏」

「一夏うーー。」

「一夏さうーー！」

「焰ーー。」

安堵のため息をついた俺にシャルルが声をかけようとして筆とセシリアと鈴に阻まれた。

「焰、私と組みなさいよ。私が^{アーチャー}狙撃手になるから」

むじむじ合っているのか。某紅茶を思い出しながら鈴を見る。

「それじゃあ、第4次の2の舞だら」

「関係ないわ。あたしは金ぴか違つてーー。」

「一夏、私と組め。……幼馴染だらーー。」

「いえ、クラスメイトとしてーーはわたくしとーー。」

「筆、それではお前の願いはかなわないじゃないのか？」

焰の突っ込みに閉口する筆。願いつてなんだ？ そう思った時

「ダメですよ……」

振り向けば山田先生が

「おふたりのHSの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。HSを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

あちやー、やっぱり駄目だつたか。うつむく一人。

「もう言ひ事だ、鈴。ゆっくり養生しろ」

と鈴の頭をなでる焰。

「子供扱いする……痛つ」

こいつした会話を終え、俺達は保健室を後にした。

side刻？

いつものように修行に励む。今回の焰はこいつになくやる氣だ。恐るべき、焰の糖魂。

さて、新技を試すか

「？刀流・桐！？」

足払い・突き・横薙きを速攻で繰り出す技だ。原型は紫苑婆が使っていた名もなき技だ。

「まだまだな」

いかせん鍊度は低い。今日までにするか。

「こしても、荒れそうだな」

セツツヅヤベ。今回の件は、嵐の序章かそれとも……

第九話 嵐の序章（後書き）

真庭道場――――

師匠「はい、はじまりました真庭道場の「一ノ一」。今回の弟子役は

弟子4号「織斑一夏です」

師匠「質問」「一ノ一」始めたいんだが、質問がないという状況。笑え
ばいいのかな、泣けばいいのかな?」

弟子4号「そんな重い話を俺に振らないでください」

師匠「と、まあ話を変えて現段階の「IS」抜きの登場人物の強さを俺
なりにまとめてみたぜ」

真庭白夜 右近左近=織斑千冬 真庭蝶次郎 (経験の差) 鐃刻
? ラウラ・ボーデヴィッヒ 真庭焰 篠ノ之等=鳳鈴音 織斑一
夏=セシリア・オルコット=シャルロット・デュノア 越えられな
い壁 IS学園一年女子

弟子4号「偏見混じつてません?」

師匠「気にするな、弟子よ。あくまでも俺なりだ。この表じゃ頭の
良さは含まれちゃいない」

弟子4号「質問しますけど、白夜さん千冬姉より強いんですか?」

師匠「まーな。俺らの学生時代、唯一千冬に一本取ったのは後にも
先にも白夜だけだったな。逆鱗探しを駆使して最後笑わして勝つた

からな、あいつ

弟子4号「想像できない。どんな学生時代だったんですか？」

師匠「懐かしいな。束と白夜が計画立て、俺と奏で馬鹿やつて千冬と真希が突つ込むつて毎日だったな」

弟子4号「や、そつなんですか。（だから時々、千冬姉の制服に返り血が残つてたんだ）」

師匠「じゃ今回はここまで、次回の真庭道場の「コーナーは奏が弟子役だ。感想、質問、要望等お願いします。これにて

弟子4号「終了」

第十話 七面鳥

s.i.d.e - 夏

「しかし、すゞこな」つや」

「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認にそれぞれ人がきているからね。一年には今のところ懇親は無いけど、トーナメント上位者には早速チケットがはいると思つよ」

「ふーん、『苦労な』とだ」

「まつたくだ」

「緊張感零だな、お前ら」

俺は緊張はしてゐせ。焰は試合の前に棒付き飴なめてゐる。

「わい、はじめは一夏とシャルル・ボーテヴィックヒと算か。次に我と刻?。対戦ペアは……」

「お～～。おひひひ」

「よひ、本音」

のほほんさん?

「一回戦の対戦、私とかんむりやんだからよむりしへ～～」

やつぱり、ペナントに入る。

「ま、頑張れ。むろん優勝は我らだがな」

「相変わらずだな。お前の糖魂。ま、焰達とはつまくいっただとして決勝戦だな。首を洗つて待つてろよ」

「やつてみる。ただし、その時には一夏はハツ裂きになつてゐるだろつがな」

俺達はにやりと笑い、拳をうつた。

「さて、行くか。シャルル」

「うん、行いつ、一夏」

「よひ。まさか初戦で当たるとはな」

「ふん、私と当たる前に負けられては困るからな、好都合だ」

「はは、じ心配どつも。安心しろよ、その天狗の鼻をへし折つてやるから」

中央モニターが戦闘開始までのカウントダウンを開始する。アーリナ全体の視線が一人へ向けられ、ブザーが鳴り響いた。

戦闘が、始まつた。

「「叩きのめす!」」

白と黒、相反する一色が同時に後ろへ弾けた。それに追従するように、オレンジ色の光と、灰色の光も移動を開始する。

「シャルル！ とりあえず最初の作戦で行くぞー！」

「うんー！」

「ふ、小細工など捻り潰す！」

「安心しろ」

俺に砲弾を放つべく、ラウラは肩の砲身に少しの意識を向けていた。その隙を縫つて、爆縮地を使ってラウラの眼前に迫る。雪片を大上段に構え、まっすぐにラウラを見据える。

「 真正面から、小細工なしでぶつ叩いてやるからな！」

「つー、上等だー！」

ラウラに向けて放たれた斬撃はすんでのところで回避された。即座にプライズマブレードを展開し、俺へと向き直った。

『うそ、一夏も気をつけて』

プライベートチャネルもそこそこに、僕はアサルトライフルを構え

た。相対するは、篠ノ之箒の駆る打鉄。

「「「めんね、一夏じゃなくて」

「なつ……悔るなー」

「悔りなつよ。悔れないから、全力で行くんだ」

言葉を終えたと同時にアサルトライフルの引き金を引いた。数回の銃声と、それを上回る銃弾が箒へと襲い掛かる。

「ぐつ……

咄嗟に手に持つ刀型のブレードで防ぐも、数発は装甲へ当たり、エネルギーを削っていく。

僕は両手にサブマシンガンを持ち宙空へと飛ぶ。反撃しようとした箒は

「な、に……？」

「篠ノ之箒さんは言つてなかつたつナ？これが僕の特技の高速切り替え（ワピッシュ・スイッチ）だよー！」

言つて、僕は両手の引き金を躊躇いなく引き抜いた。

「つー、この……」

例えI-Sを装着した箒の身体が銃弾に追いついたとしても、量産機たる打鉄の限界値は低い。先ほどを遙かに上回る連射で、雨のような弾丸を受け、箒はたらを踏んだ。

「！ダメージが上がっている……？」

「サブマシンガンの効果的な射程に入ってるからね。するとか、言わないでよねッ！」

徐々に距離を詰め、シャルルは両手のサブマシンガンを簫へと投げつけた。簫はそれをブレードで薙ぎ払い、そして、目の前に現れた僕に驚愕した。

「速い……まさか、イグニッシュョン・ブースト瞬間加速！？」

「やつだよ。とつておきなんだけど、キミの相方はここから見向きもしてないからね。一気にケリをつけさせてもいいからー。」

右手からブレードが実体化する。が

「舐めるなーー！」

渴と言つだらうか、動きが止まった。何で？簫はブレードを構え言う。

「確かに私は一夏と同様銃器には弱い。だけど、それがどうした。私の剣、存分に見ろーー！」

簫の目が変わった。まるで、王者のよう

「旋風ーー！」

ブレードから放たれた剣閃は容赦なく僕を貫く。しまった、短期決

戦のはずが

「まだだ」

顔を上げると既に箒がいた。とつさにブレードを振るうが剣術は箒が上だ。すぐに追い込まれた。

「偽・雪月花」

それは一夏の剣を箒がアレンジした別の雪月花。容赦なく僕を襲つた。まずい。その時、

「悪いな、箒。雪月花」

一夏が箒に雪月花をくらわせた。崩れ落ちる箒。もしも、コンビネーションがもつとうまい人と組んでいたら僕は負けていたかもしない。

「悪いな。何とか、木枯し決めて隙作つたんだ。やれるか?」

「十分」

作戦道理とは行かなかつたが、これで2対1だ。勝負はこれからだ。

side焰

「倒されたか」

そう呟いた。

「最後は怒涛だつたな」

「何かを掴んだんだろう。まだまだ、力不足だつたようだがいざれは化けるな」

「ああ」

激戦は続いていく。

side一夏

爆縮地でラウラへと直進する。袈裟の形に振り下ろす。突撃の最中に展開した零落白夜の刃を以て。

「……ぬるい。あの人の動きを劣化トレースしたような動きで、私に触れられると思つたな！」

しかし、ラウラは白式の速度にも動じなかつた。触れれば問答無用でシールドエネルギーを消滅させる零落白夜の刃を前にして、自身の右腕をそれに振り上げた。

「こ」の停止結界の前ではその剣も意味をなさないと理解できなかつたのか。学習能力のないやつだな

嘲笑し、ラウラは目の前の敵に向けて肩の砲身、その銃口を構えた。俺も同じように笑い、ラウラを見ている。それが少女にはたまらなく不愉快だったようだ。

「何がおかしい」

「いや、ルールすら理解してないやつが学習能力云々を言つつてのが面白くてな」

「何を……っ！？」

突如、ラウラの背後に衝撃が走り、シールドエネルギーが減少した。集中が途切れたことにより結界から解放された俺の斬撃をかわし、ラウラはひとまず距離を取った。

ラウラの背後にいたのは、シャルル・デュノア。ショットガン 散弾を手に、ラウラを見つめていた。

「悪いけど、僕らはタッグ戦をやつてるんだ。敵は一夏だけじゃないから、よろしくね」

自分を小バカにしたような言い方に、ラウラは憎々しげに舌打ちをした。

sideラウラ

「くっ……」

停止結界を使えばそれは自らの最大の隙となる。二人の連携は隙がない、個人技ではどうにもならない。

（私が……押されている……？）

二人に攻め込まれ、内心で考えて、その事実に激昂した。

「そんなことがあつてたまるものか……ふざ、けるなあッ！」

零落白夜の刃を避け、その勢いのままに白式の背後へと回る。

シャルルのフォローよりも速く、白式の背を蹴り飛ばした。

「一夏！」

「遅い！」

向けられたシャルルのアサルトライフルをワイヤーで弾き飛ばし、砲弾を放つ。

そして左手にプラズマブレードを構え、背後へと全力で振り抜いた。

「なつ！？」

金属音が鳴り響き、雪片が宙を舞つた。驚愕の顔に染まる一夏に斬撃を放つた。

シールドエネルギーを確実に削り、次の敵を確認するべくすぐさま一夏を殴り飛ばした。

「貴様、じきこと、負けるものか！」

「悪いけど、負けてもじつよー。」

正面からシャルルがサブマシンガンを両手に突撃した。弾丸の雨を搔い潜り、右手をシャルルへと向けた。

「は、迂闊だな！」

弾丸は停止し、既に武装を近接用に換装していたシャルルも停止する。

そのまま肩の砲身に意識を向ける。片方を潰してしまえばもう片方はどうともなる。そのまま、シャルルへと砲弾を放とうとしたが、

背後からの攻撃を意味するアーティ、その身を固めた。

「な……こ……？」

驚愕しつつも、すぐさまシャルルを置いて真横へと飛んだ。手にアサルトライフルを持った一夏は、私に向かつて引き金を引いた。

「ぐつ……、ピうこつことだ！ ヤツは近接武器しか保有していないはずだ！」

「僕が訓練の時に使用許可^{アンロック}したんだよ。残念だつたね

「ツー？」

「でやあああツー！」

風切り音から金属音へ、シャルルが高速切替によっていつの間にか切り替えたブレードが腹部へ直撃した。痛みを感じずとも、その衝撃は身体へ通る。たまらず後方へ下がるが一夏の銃撃が再び襲いかかった。獣の咆哮を思わせる連続した銃声は地面を這いつゝに着弾する。

「ふざけるな！ 私がこんな……こんなことがあってたまるかあツー！」

鋭く伸びたワイヤーが一夏の手にあるアサルトライフルを弾き飛ばした。もう片方のワイヤーで一夏の首を絞めて拘束、視線はシャルルへと向けられていた。

いつでも一夏をシャルルへ放れるよう、隙を作らず、隙を見逃さず。いつ高速切替をされてもいいよう、戦闘体勢を保つたまま、

シャルルを睨み付けた。

「……」

「……」

睨み合う一人。ちらりと一夏は雪片式型の位置を見つめ、そして一人へと視線を戻す。

そして 唐突に、動き出した。

瞬間に、”それまでのシャルルからは考えられない程の” 加速をして。

「なつ……瞬間加速だと！？」

「やつぱりさつきのを見てなかつたみたいだね」

「何故だ！ データにはなかつたはずだ！」

「当たり前だよ。この試合で初めて使つたからね！」

超音速で接近するシャルルの右手にはブレードが握られたまま。予想外の出来事に硬直で動けないところへまで肉薄した。

「隙あり。だよ」

右手を振り上げ、シャルルがラウラへ攻撃の意思を表す。それを防ごうと左手のブレードで受けようとその手を上に向け、防御の姿勢で構えた。直後、右脇腹に、想像し得ない衝撃が走っていた。

「がッ……」

一夏を拘束していたワイヤーが離れ、アリーナ端へと吹き飛ばされた。右手を振り上げたままのシャルルの左手のシールドのトトには、パイルバンカーが仕込まれていた。

「これで……一気に決める！」

体勢を立て直せないわたしに瞬間加速で接近し、動く間にすら「」えずに追撃を放つシャルル。シールドエネルギーがゼロになるまで、何発も何発も。

ふと、観客席で誰かが「終わったかな」と呟いた。

自分を照らす唯一の光、織斑千冬。彼女になるには、負けは許されない。

彼女のよつこにあるには、最強であることが前提条件である。最強である為には、負けることなど許されるわけがない。

負けたくないのか？

（私は、負けるわけにはいかない！）

力がほしいか？

（ああ、欲しい）

自我を失つてもか？

（それを得られるのなら、私など……空っぽの私など何から何までくれてやる！

だから、力を。比類なき最強を。唯一無二の最強を。 私に寄
越せ！）

なら、寝てろ。

それを最後に私は暗転した。

s i d e 一 夏

バチン！突然稻妻が走ったかと思えば、シャルルが吹き飛ばされる。ラウラは顔をうつむけたまま、毒刀・鍔を出しそれを抜刀した。刀から閃光があふれる。眩しさに目をそむけたが、收まり見る。そこには鍔を抜刀したラウラが……いや違うあれは、誰だ？

「ラ、ラウラ？」

「ラウラ？誰だ、それは……俺は、四季崎記紀だ！！」

伝説の刀鍛冶ばうれいが再びこの世にあらわれた。

第十話 亡靈よ（後書き）

真庭道場――――

師匠「はい、はじまりました真庭道場の「一」。今回の弟子役は

弟子5号「あいあい、忍び名川獺こと真庭奏です」

師匠「わつわく忍び名ばらしたな」

弟子5号「ま、フライングつていふことで 早速、質問答えて
いきましょつや」

師匠「そつだな、真庭家全員の忍び名は次の通りだ」

真庭白夜 真庭白鷺

真庭真希 真庭鴛鷺

真庭鎌太郎 真庭蝠蝶

真庭蝶次郎 真庭蝶々

真庭密三郎 真庭蜜蜂

真庭亀有 真庭海龜

真庭海 真庭喰鮫

真庭涼 真庭人鳥

師匠「ま、原作通りだな」

弟子5号「田新しいのさつちの母さんと妹ぐらいか」

師匠「続いての質問だ。」の物語で、f a t eのクラス分けにする

とどうなるかだ」

弟子5号「偏ると思つのは何故だりうへ」

師匠「シャラップ。これも次の通りだ」

セイバー 織斑一夏 織斑千冬 篠ノ之筈 鐸刻？ 真庭亀有（若いころ）

弟子5号「しかしながら、刻？はセイバー？」

師匠「無刀の剣士だからだ！！」

弟子5号「亀おじさんは意外だな」

師匠「ああ、何でも若い頃（10代）はフェンシングの大会で優勝したり、代表になったとか。結構もてたらしい。静香おばさんとはその縁で会つたとか会わなかつたとか…」

弟子5号「今度調べよつか？」

師匠「頼む、続いてはランサーだ」

ランサー 真庭白夜 更識楯無

弟子5号「槍使い少な！？」

師匠「白夜に至つてはいつ使つてているか俺でも見たことがない」

弟子5号「だよな。あいつ、いつも槍（銘・偽日本号）持つてゐけ

ど使つ仕草すら見せないし……調べてみたが、謎だった

師匠「……新たな謎は置いといて、次はアーチャーだ」

アーチャー 鳳鈴音 セシリア・オルコット シャルル・テュノア
ラウラ・ボーデヴィッヒ 右近左近 真庭密三郎

弟子5号「多いな」

師匠「アーチャーと言つ割には全員の使ってないけどな……続いてはライダー」

ライダー 織斑千冬 真庭真希 更科楯無

弟子5号「何でライダーなんだ?」

師匠「これと言つて、乗り物に騎乗するつて奴はいないが、f a t eの「ライダー」じゃある一つの共通点がある」

弟子5号「それは」

師匠「姉御肌もしくは姫さんの存在」

弟子5号「確かに、f a t eとe x t r aで証明している」

師匠「だろ。続いては、キヤスター」

真庭焰 真庭花梨 更科楯無 四季崎記紀 篠ノ乃束

弟子5号「何で、また?」

師匠「焰と花梨の場合、鬼火と鼠火の火の忍法で。生徒会長は作者の私見だ。確かに、水を操るつてことは魔術師に見えるかもな、四季崎に至つては予知能力で、束は、言つまでもないだろ。続いてはバーサーカーだ」

真庭海 恋する乙女達 酒に酔つた千冬

弟子5号「海は分からんでもないが……

師匠「恋する乙女はまあ、語るまい。酒に酔つた千冬は……だれにも止められねえ（遠い目をしながら）」

弟子5号「確かに（遠い目をしながら）」

師匠「気を取り直して最後、アサシン」

アサシン 真庭家一同 右近左近

弟子5号「元忍者の家系だからな」

師匠「だな。じゃ、今回はここまで。感想、質問、誤字脱字、要望等あつたらよろしくお願ひします。感想は作者の栄養源になります。あの作者はガラスのハートだからそのところ踏まえてよろしくお願いします。では、これにて

弟子5号「終了」

第十一話 野望の果てに眠れ（前書き）

お待たせしました。やっと完成しました。BGMは『亡靈よ野望の
果てに眠れ』で

第十一話 野望の果てに眠れ

s i d e — 夏

四季崎紀紀? なんで伝説の刀鍛冶を名乗っている?

「は、どうやら歴史の改竄は改変程度に終わったというわけか、やつてられないな、おい」

歴史の改竄? 改変? 何のことだ?

「ん、何かと思えば全刀じやないか。まだ、残つてたのか。にしても、不完了だな、お前。まあいいや。この体は慣れてはいなが、試し切りする分にやあ十分使える」

そういうふた四季崎? は眼帯をとる。現れたのは金色の瞳。

「取つておきだ。避けて見せろよ! ! !

鍔から禍々しい何かを纏つた剣閃が放たれた。

s i d e 焰

四季崎紀記だと! ? まさか、鍔の毒は四季崎の思念だというのか。

「なんにせよ、行かねば分からぬか

「ああ、そうだな」

一夏が避けた剣閃は観客席のバリアーに当たり徐々にバリアーを無

効化にしているため観客は避難しているようだ。

「行くぞ」

「ああ

side一夏

「つぐは

呻き声を出す。シャルルは剣閃をくらい戦闘不能だ。俺も何とか避けてはいるが、少し当たつたところは禍々しい何かが引っ付いて微量のダメージになつていて。落ち着け、何も化け物と戦おつってわけじやないんだ。深呼吸をする。よし、

「まう。やつと戦う面になつたじやねえか。ん」

「援軍だ」

「無事か、一夏？」

見れば、焰と刻葉だつた。正直助かつた。

「ああ、何とかな。一人とも気をつけろ。鍍に纏わりついているあれに振れれば、微量だがダメージくらう

「鍍の属性か？」

「ああ、そうだぜ。これが鍍の特性『猛毒投』だ。ま、これは、後付なんだがねえ」

「やっと笑つ四季崎。

「お初にお皿にかかる四季崎殿でよいのか？」

「堅苦しい挨拶は苦手とこりより嫌いでね。砕けていいつや

「なんで、年端もいかない女の子に憑依してんだ、あんた？」

「怒り *max* の刻葉が言つた。なんだろう？ 関係ないかもしけないが、うつすら何か見える。

「なんだ、虚刀じゃないか。」この女はお前の……一根のやつもそつだつたが、なんで虚刀が選ぶ女はおつかない奴なのかねえ？…おつと、関係なかつたな。この鍛は俺の毒しづんが格段に強くてな。意志が弱いとすぐに毒しづんが回り易くなるんだよ。ま、この機体のせいでもあるな。他者をまねるとは、面白い仕掛けだが俺に言わせりや不完成だな、」

「一つ聞きたい。なぜ、完成系変体刀を工房にしたのだ？」

「エフ？ ああ、このインフィニット・ストラトスの略か。一言でいえば氣まぐさ。氣まぐれで俺の子孫のことを予知してみたら面白いもの作つていたからな。材料もあつたことだし、少々脚色してみたまでや」

予知？ 材料がある？

「ま、そこは虚刀も俺の子孫にあたるわけだが、もう一つの系統のほうか。おしゃべりもここまでこりよつや。特に虚刀、お前がどれくらこ完^アしたかに興味がある

ゆっくりと鍛を構える四季崎。

「まだ、この体じゃ、過去と少し先の未来しか見えないが俺はお前らに倒されるだろ。だが、未来つてのはほんの少しなことでぶつまくるものだ」

「……言わぬくても……」「……

俺達は獲物を構える。

「ほつ、いい面だ。なら俺も取つておきを見せてやろ。こいつはよつ、この日の本の最後の剣の時代の寵児が使つていた構えだ。この構えから繰り出される三段突きは回避不能つて曰くつしきだ。避けてみろよ」

「……上等だ……」「……

亡靈退治の始まりだ。

side 篇

ラウラがかの伝説の刀鍛冶四季崎紀記を名乗り、「俺の子孫が……」と言つ所で、私は実家にある家宝の刀を唐突に思い出した。作者銘紀記、篠ノ之日和に捧げる刻まれてある女性用の実刀を。まさか、その人がISを作れた理由も……

「……お……つき……篇……」「……

とシャルルがいた。

「早く、避難するよ」

確かに、私がこの場にいてもやれることはないだろう。むしろ、一夏達の邪魔になる。それでも、

「すまない、シャルル。私は残る」

端から見れば愚かだろうが、それでも私はこの戦いを見届けたい。

s.i.d e 焰

「百鬼夜行！！」

鬼火を連続で投げ出しているが、四季崎はカノン砲や剣閃でそれを打ち消す。

「零落白夜！！」

「甘い！！」

鍔による神速の突きが繰り出された。何とか雪片で受けた一夏。その隙を突き、刻葉が

「虚刀流・梅！！」

だが、AICによつて動きが鈍くなる。

「刻葉！！」

私は、棒状手裏剣を投擲する。それに気づいた四季崎は手裏剣を避ける。AICの影響がなくなり、身軽になる刻葉。

「どうした、虚刀？お前の実力はこんなものか！？」

挑発する四季崎。

「言われなくても見せてやるさ、ただしその時にはあんたはハツ裂きになつていいだらうがな！！」

森羅のレジストの能力の一ツAHICレジストを発動させた。

それに合わせ、我と一夏は援護に入る。我は鬼火で、一夏は剣閃で四季崎めがけてはなつていくがすべて捌かれる。

「」んなものか。真庭忍軍に全刀！！」

「ずいぶんと余裕だな」

刻葉が接近する。

「虚刀流・桐！！」

新技・桐を決めた。がそれでも四季崎は倒れず、まだ余裕綽々の顔だ。

「上々だな、虚刀に全刀、真庭忍軍。だが、まだ、初代達の足元にも及ばねえ」

挑発しまくる。

「全刀でなんなんだよ？」

一夏が叫んだ。そういえば、四季崎はさつきから一夏のことを全刀と呼んでいる。

「なんだ知らないのか。完了系変体刀・全刀・鎧。完了系変体刀は鎧と鎧を合わせて五・六本作つたんだが、どれもこれも完了にはほど遠いものだつたが、最終的に残つたのが鎧と鎧だ」

全刀・鎧。虚刀は無刀の剣法、ならば全刀は？

「最終的に全刀はいつかがたが来るとは思つて、鎧を完了形変体刀にしたんだがどうやら正解だつたようだ」

薄く笑う四季崎。その笑みは冷笑。

「虚刀は一根が深く根を張つたから、虚刀は今もなお健在だ。それに比べてお「ふざけるな！！」・・・・・ん？」

一夏に冷笑を向けていた四季崎が振り向いた先には、簾がいた。

「何が全刀だ！！一夏は一夏だ。亡靈が馬鹿にするな！！」

いい啖呵だ。少々ビビッていたようだな、我らは。

「ほほ、言つな。お前さんは王刀の所有者か。……日和？」

日和？誰だ。

「いや、違うな。あいつはあんたより髪は短かつた……つつ

今度はなんだ？身構える。

「…………」んな力……がほしかつた……わけじゃな……んだ……
た……助けて……
ちい。なかなか、しぶといな。作り物にしてはなかなかの根性だが
な。さて、少しばかり喋りすぎたな。続きと行こうか！！」

四季崎が再び宣戦布告をする。

「…………委細承知。四季崎紀記、あんたを倒す」

殺氣を含んだ宣戦布告を刻葉が言つ。

「同じく、さつきから全刀だが鏽だかしらぬ一ヶビ、馬鹿にさつれ
ばなじじや『氣分悪いしな』

一夏が雪片を構え宣言した。

「亡靈は黄泉の府へ帰つていただこうか

それを皮切りに再び戦いが始まった。

s i d e 刻葉

再び四季崎に接近する。が四季崎も鍛のほかにカノン砲やらワイヤ
ーブレードを駆使してくる。杜若で翻弄し接近する。狙うは鍛のみ。

「じい、虚刀……」

四季崎は鍛を構え、挑発する。あの構えは3段突きか。

「連撃木枯らし！！」

一夏が雪片で剣閃を放つ。その数、7。

「は、甘いな

「ぬしもな

その隙を突き焰が

「刺し穿つ死翔の絶刀」ガイ・ボルグ

鉋を全力で投擲した。おそらく、鉄甲作用 + 卷菱指弾応用だらう。技名は「愛嬌」というやつか。

「ちい」

力ノン砲は木枯らしの連撃を防がなければならぬ。鍍かAICで鉋を防がなければならない状況で四季崎が選んだのは

ひた

鉋が止まった。そのまま落ちる鉋。再び「ちを向く四季崎。が

「なに！？」

再び鉋が襲い掛かる。焰のIAS黒鳳の能力「死翔刀」だ。不意を突かれた四季崎は鍍で応戦する。

「虚刀流奥義・飛花落葉！」

全力全開だ。四季崎を見れば、己の作品に満足した職人の顔になつていた。

四季崎から鍛か離れる。その瞬間に倒れるラウラ。外傷はなぞうだな。

「大丈夫か？」

呼びかける。

「ああ……」

とつあえず無事のようだ。

「なんで、そんなに強いんだ？」

唐突に聞いてきた。

「まだ、俺は強くねーよ。まだに剣士だしな。あいつだつて、3人
がかりだ」

だけどまあ

「強くなり一てから強い、こんなんじや駄目か?」

「……よくわからなーいな」

だよな。

「確かにのは、あんたを助けたかつたからだ」

「何故？」

「…………惚れたからだ」

「誰が誰に？」

「俺があんたに惚れたからだ」

言つたそばから心臓が早鐘を打つ。それを聞いたラウラは顔を赤くして氣を失つた。俺らを見ている焰と一夏はにやにやしているがこの際気にしな・・・・・!-

「何か来るぞ！！」

「よく分かつたな。虚刀」

唐突に空間に裂け目が入り、そこから現れたのは蟻をかたどつた被り物をかぶつた左手が刀の男と

「へえへえ。あのあんたがもう一人の虚刀ねえ。あの女とはずいぶんと違うわね」「

蜘蛛をかたどつた被り物をかぶり左足が刀の女が現れた。

「真庭忍軍毒組！！」

焰が叫んだ。

「久しいな、鳳凰よ」

左手が刀の男が言った。

「どくまにが何の用だ？」

……あれ空気が凍つた？

「待て、刻葉。どくまにて何だ？」

と一夏が聞く。

「真庭忍軍毒組。略してどくまに」

「そんなかわいらしい略し方やめる……」

焰が突つ込む。

「別にいいぞ」

あれ？

「我らをやう呼んでいる女がいるのでな。別に気にしてはおりんよ

なぜか哀愁漂う雰囲気で答える左手が刀のどくまに。

「ま、我らの目的はこれよ」

そういうつて毒刀の鞘を拾い鍔に向け何かしらの処置を施した。

「では、我らは引いひ」

追撃したいが俺たちは満身創痍だ。が

「そこの侵入者たち止まりなさい」

見れば訓練機を纏つたIS学園教師陣だ。

「やれやれ、毒蜘蛛」

「はいな」

毒蜘蛛と呼ばれた女が前に出る。そして、ISを装備した。そのISは手足が合計8本そのうち一本は刀だった。教師陣に向かっていく。

「忍法・鎖縛陣」

手足から白い粘着質の糸が繰り出される。教師陣のISはひとつ残らず絡み付かれた。

「爆ぜろ」

そういうつた瞬間、糸が爆発し煙幕が立ち込めた。

晴れた瞬間にはそこにどくまにはいなかつた。

「俺があんたに惚れたからだ」

それを聞いた私は、そう言われて ときめいて、しまったのだ。
そして早鐘を打つ心臓が言っている。一いつの前では私は、ただの
15歳の「女」なのだと

「う、あ……」

ぼやつとした光が天井から降りているのを感じて、私は目覚めた。

「気が付いたか」

見れば織村教官がそばにいた。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷とダメージがかかることで筋肉疲労と打撲が
ある。しばらくは戦闘は不可能だ」

「……何が起きたのですか？」

あまり思い出したくはない。意識を失った私はそのまま深い闇……
いや、狂氣というのだろうか、何もかもが狂った感覚になった。

「……お前は鍔を抜刀し、乱心した。四季崎紀記と名乗り、織斑達
に襲いかかったが結果は返り討ちだ」

四季崎紀記？ふと、左手を見れば指にはめつてあったあの禍々しい

指輪はなかつた。

「教官、鍍はどうに?」

「……一応重要要件であり機密事項なのだが、お前が気を失つた直後に真庭忍軍毒組と名乗る二人組が鍍を奪い逃走中だ」

真庭忍軍毒組?

「田下調査中だ。ついでに言えばお前のHISYSTEMが搭載されていた」

ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで使用禁止のシステムだ

「恐らくではあるが、お前の乱心はこのシステムも絡んでいるかもしない。ドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろ?」

結局私は

「ラウラ・ボーデヴィッヒ!」

「は、はいっ!?」

「お前は誰だ?」

その問いに私は

「わ、私は……。私……は……」

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウカ・ボーディヴィッヒとなるがいい。なに、時間は山のようにあるんだ。少なくともお前には側にいる人間もいることだしな」

「やり、と教官が笑つた。

「鏻のやつは私はここ数か月しか交流はないが、いさかとひじかく愚弟達の親友ひじかくだからな、悪い奴じやあるまい」

そういうつて私の頭をなでる教官。そういう終わつて席を立つてベットから離れる。もう、ついでに言つたのだつた。教師の仕事に戻るよつだ。

「ああ、それから」

ドアに手をかけたといひで、振り返らずに再度言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。お前はお前だ」

そしてドアを開けた瞬間、見知った長身がそこにいた。

「なんだいたのか」

「つて、織斑先生！」

「見舞いなら手短にな」

「あ、ありがと」

「あ、ありがと」

変わつて入つていく鏑刻葉。席にかけて

「あ～～、体のほうは大丈夫なのか？」

「ああ、しばらくは戦闘はできないが、日常生活に支障はないそつだ」

「やうが、よかつた」

「氣まずくなるぞ」

「俺が言つたことは覚えているか？」

俺があんたに惚れたからだ。

思つ出して赤面してしまつ。

「おおお、覚えているつて言つのならいいんだ。改めて言いたいことがあるんだ」

頬を搔きながら、その無刀の剣士は

「俺はあんたに惚れていいか？」

真摯な顔で見つめてきた。思わず、左田が金から青になりそつなほど緊張してしまつ。

「返事はすぐじゃなくともいいから言つてくれ」

そうじつて顔を赤面にした無刀の剣士は出て行つた。

「ふ…ふふ…ははは」

なんだ世界は意外にも明るいじゃないか。返事などもう決まつてい
る。差し合つてするべき事はどうやって告白しようか。考えただけ
でも、楽しくなつてきた。私は今日といつ日を死ぬまで忘れないだ
ろう。そう思えるくらい晴れやかな気持ちになつた。

第十一話 野望の果てに醒れ（後書き）

真庭道場――――――

師匠「おーす、ちーす、めーす、長ーーと待たせてすみません。真庭道場の始まりだ――」

弟子6号「少しあは落ち着かんかい。とうよつなんわしが弟子役？」

師匠「ローテンションだぜ、亀おじさん。皿口紹介よひじべ」

弟子6号「はあーーー。まあいいわい。真庭家家長真庭亀有だ。若いには

師匠「わひわく、質問コーナーだ」

真庭家の当主は誰？原作みたく12人いるの？

弟子6号「一応当主はわしだ。真庭家は12頭領制はなくなつたが、鳥、魚、獣、虫と一応分かれている。本家は鳥だつたが、先代当主だつたわしの親父と次期当主候補だつた兄（白夜、真希、焰の父）がとある事件で死んでしまつたのでな、一応当主代理という形になつてゐるが白夜と真希は継ぐ気ないし、焰はまだ未成年なので未だに当主代理のままじや」

師匠「とある事件については本作で明らかにしていく予定なので期待してくれ」

弟子6号「あれば15年前の

師匠「ネタバレ禁止拳！！」

ドカーン

師匠「今回これまで、感想、誤字脱字、要望等よろしくお願いします。ではこれにて

弟子6号「終了…パタ」

あと一話入れて一巻の内容を終わらせる予定です。

side 焰

ようやく解放された。我だけ何故長引いたかと思えば真庭忍軍毒組についてだ。まあ、愚痴を言つても仕方ないのでそのまま食堂へ行く。案の定閉まつていた。

「仕方あるまい」

そういうて部屋に戻る。刻葉はいないようだ。さて、何があつたかな？

「これだけか

あつたのは、サウの『飯と小豆の缶詰だけである。やうなこ手はないが。

そつそく調理開始。コンコン、つヒノックが聞こえる。いたのは

「鈴か

「聞きたいことあるけど今時間いい？」

「別にいいぞ」

と言つて中に招く。

「つひ、何食べよつとこ人のよあんたはーー。」

「これが、宇治金時丼だ」

「『』飯に小豆かけてんじやないわよ」

「何を言つ。これはな、18世紀に『ザート』と飯をぱりぱりに食つのがかつたるかつたサンドウイッチ將軍が作った由緒正しい……」

「んな訳あるか」

バシンと劣化版断罪円で使うハリセンではたかれる俺。

「仕方なかつ。食堂は閉まるし、食料もこれくらいしかないのだから」

「しょうがないわね。真希さんへの報告は見逃してあげるわ

鈴、いつの間に。

「それで、何が聞きたい」

「何がつて、あの試合よ。ボーネヴィッチが鍛だけ？それ抜刀して四季崎紀記つて名乗つた後どうなつたのよ。きりきりはまきなさい」

「答えたいたが、生憎と機密事項だ」

「へ、やつぱり？」

この前とは違ひ大胆不敵にも現れた真庭忍軍毒組。おそらく構成は史書通りだとすれば五人。そう言えども、あの時女のほうは

へえへ。あのあんたがもう一人の虚刀ねえ。あの女とはずいぶん

と違つわね

「もう一人の虚刀?」

「何々?」

しまつた、つい口が滑つた。

「鈴、他言無用なら少し話す」

「いいわよ

「さて、今回も真庭忍軍毒組の「うち」一人が現れた。一人はこの間言つた左手が刀の男。もう一人は左足が刀の女だ」

鈴が想像してうわっと顔をしかめた。

「女の方はIS持ち。その女が刻葉を見て、もう一人の虚刀と言つた」

「なら、言いたくないけど刻葉の」

「いや、あいつは天涯孤独。唯一の親戚は祖母の親戚のみだと聞いた。もちろんこれは白だ」

毒組にもう一人の虚刀。謎は深まるばかりだ。その時、再びノックが

「山田先生」

「真庭君と鑑君にお知らせがあるのでいいでしょうか?」

「刻葉はいませんが、俺が伝えておきます」

「ありがとうございます。今日は大浴場の点検で使用はできない予定だったのですが、予想以上に早く終わったので、それなら男子に使ってもらおうって計らいなのです」

ふむ、大浴場が悪くはないな。

「わざわざすみません、刻葉には俺から言つておきます」

そつ返事をした。

「と畜う訳だ」

「はいはい、ゆっくり浸かつて行きなさい。あんたの入浴、鳥の行水だつて
真希さん言つてたし」

いつの間にーー！

油断できないなと思いつつ、刻葉を探すと顔を真っ赤にした刻葉がいた。

「刻葉」

「焰か」

「大浴場で入浴が可能だがどうする？」

「俺はよしどべ。シャワーでいい」

いつもより何か動搖しているな。野暮はなしか。

「わかった。ゆっくり眠れ

「ああ

そうじつて別れる。話は後日にでもできる。大浴場へとついた。一
夏はすでに入つているらしく。

s.i.d.e — 夏

「僕の」とはこれからシャルロットって呼んでくれる?ふたりきり
の時でいいから

「それが本当の…………？」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた本当の名前

「わかった シャルロット」

「ん」

嬉しそうに頷くシャルル いやシャルロットが返事をした。その
時、

カラカラカラ

と浴場のドアが開く音がした。なんで?と、とにかくこの状況はや
ばい。シャルロットもそう感じたかあたふたしている。

「さて、まずは掛け湯か」

「の声は焰。まさかのタイムラグ。普段の焰なら勘のいいことだから察してくれたりするが今日は事件+事情聴取。勘が働くかないのも無理はない。」

「シャ、シャルロット」

「な、何一夏?」

「俺が焰を何とかサウナに誘うからその隙ついて体洗ってくれ」

「う、うん?」

「思い立つたらすぐ行動だ。幸い焰はまだこっちに気づいてはいない。」

「なあ、焰」

「一夏か。改めて見ればすごいな」

「そりだな、お前サウナ好きだったよな」

「?嫌いではないがな」

「最近特集で見たんだがサウナ入つてから体洗った方がいいらしいぞ(嘘)」

「本当に?」

「本当に^{まじ}でだ」

何とか誘^ううことに成功する。サウナのつくりも豪勢だ。フインラン
ド人もびっくりだ。

「一夏」

ほつとするも束の間、焰が話しかけてきた。

「お前鎧が付く縁者はいないのか?」

鎧。四季崎が言つた完了系変体刀の一振りいや正確には完了系変体
刀候補か

「いや、分からないな。お前も知つてると思つけど

「ああ、悪いな」

そう、俺と千冬姉には両親がいない。なので、親類縁者という人が
いないのだ。

「やっぱり俺が針に選ばれたのは

「鎧も多少は関係しているだろ?」

「ますます分かんねえな」

「まつたくだ」

今日初めて真庭忍軍毒組を見たがあれは異形だ。はたして、戦えば

勝てるのか?……いや、勝つんだ。

「一夏」

「なんだよ?」

俺の心を知つてか知らずか焰が再び口を開いた。

「無茶はするな。無理は多少ならしてもいいがな」

「なんだよ、それ?」

「戯言だ」

「こいつなりに気を使つてんのか?」

「しかし、熱くないな」

そういつた焰は炭に水をかける。室温が上がる。

「おいおい、かけすぎじゃないか?」

「何を言つ一夏?まさかもうギブアップか?」

「む、そこまで言つなら

「ギブアップ?まさか、俺ならこのへりで」

そういつて桶の水全部を炭にかける。一気に上がる室温。

「おいおい、いい加減にしておけ、一夏。全身汗だくではないか脱水症状で倒れるぞ。我は大丈夫だが」

「そんなヤワじゃねーよ。お前こそ一人称我になつてゐるぞ、水が飲みたいんぢやないのか。俺は大丈夫だけど」

「いや、お前の大丈夫より我の大丈夫の方が」

「いやいや、俺の大丈夫の方が勝つてゐるからね。もつしんどいんじやないのか？」

「馬鹿を言うな。我はサウナ大好きだからな。蒸すのが大好きでね。この間、鈴に蒸しパン作つてやつたら引いていたな。凝りすぎだと」

そう言つた焰は何故か柄杓をしゃぶり

「あれ、この飴全然甘くはないな」

とボケ丸出しだ。まあ、演技の方はもういいか。シャルロットももう上がつたころだらう。

「ち、今回はお前の勝ちで」

あれ……開かない？ what？

「どうした一夏」

「い、いや扉があかないんだよ」

「な、何！」

とにかく短期決戦だ。予想以上に俺たちの体力はない。

「い、一夏。こうなれば体当たりだ」

「おひ

ふたりで体当たりを仕掛けた。バン、開かれるドア。倒れこむ俺達。痛たたた。顔を上げた俺が見たのは、シャルロットの胸に顔を埋めた焰だった。

「キ、キヤ

「

そのままシャルロットは焰をビンタする。あわてて俺は目をそむけた。バキ、ドコ、フグラ、アベシ等の音が聞こえたがこの際無視しよう。

「あ すまん。シャルロット」

「あ、うん、一夏、焰のこと頼むね」

そういうて脱衣所に行くシャルロット。焰を見ればすさまじい様子になつてゐるがまあ、大丈夫だろう。あ、そう言えば、サウナのドアは立てつけが悪いって言つていたな。後悔したが、仕方ないので焰を介抱する。すまん、焰。明日何か奢つてやる。

翌日、あの後、焰は復活したがシャルロットに殴られた記憶は飛んでいた。そのかわり

「川の向こうで写真でしか知らない俺の両親と爺さんが手を振つて

いの夢を見た」

まあ、覚えていないところとド重複しちゃう。おっと、ホームルームが始まるな。

「み、みなさん、おはようござります」

教室に入ってきた山田先生は何故だかふりふりしている。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生と言いますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

歯切れが悪いな。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「え?」の声って

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願ひします」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ところとです。はあ……また量の部屋割りを立て直す作業が始まります……」

ブルーな山田先生。て、待てよ?

「え? デュノア君って女?」

「おかしい」と思つた！美少年じゃなく美少女だつたわけね

「つて、織斑君、同室だから知らないことは

「ちよつと待つて！昨日つて確か、男子が大浴場使つたわよね！？」

「まわか 我の記憶の空白感の前のあれは

「俺と焰は冷や汗を流す。まずい、ビのくひこまずいかつて言つと本
氣マズイ。

「焰あう！…！」

場シーンヒドアが開かれ飛刀が舞う。あわてて、棒状手裏剣で対応
する焰。

「鈴、お前殺す氣か！？」

「死になさい」

ハイライトがない瞳で宣言する鈴。

「一夏」

「一夏さん」

俺の後ろではブルー・ティアーズを展開させたセシリヤと王刀・鋸
を構えた筈がいる。

「「覚悟しろ（なさい）！…！」

展開される攻撃。鈴も衝撃砲撃つてるし、ジ・エンドか。

ズドドドドドンッ！

あれ俺ら生きてる?

.....

間一髪かどうかわからないが俺らを守ったのはラウラだった。

鑑刻葉

ラウラが静かに凜とした声で刻葉に話しかけた。

ੴ ਪ੍ਰਾਤਿਸ਼ਥ

「昨日の返事、今ここで返す」

そういうてラウラは刻葉の唇を奪い高らかに宣言した。

「お前は私に惚れていいいからな。あと、嫁にする。異論は認めん！」

宣言を受けた刻葉は

「キユウ」

と擬音とともに氣絶した。

「」、「刻葉」

「すみません、山田先生。」「は俺と焰が保健室まで担いでいくんで」

「一夏、逃げるんじゃないぞ……」

「もうですか……」

「ほ～～む～～う～～！～！」

「誰か助けて……」

ああ、今日は厄日だ。世界はこんな調子で回っていく。

「駄駄居間（ただいま）」
「s.i.d.e.???

「お帰り～～。ちやんと買つてきた～～？」

「湖の十里（「」の通り）」

「ここは世界のどこかにある秘密の研究所。ここは主とその弟子以外は知らない空間だ。

「やつぱ、ドイツ菓子はバウムクーヘンに限るね」

「畠田な（やだな）」

主の名は篠ノ之束、その姿は異色であった。空のように青い真っ青なブルーのワンピース。それはさながら不思議な国のアリスのアリスのようである。一方の弟子の名は真庭白夜。その姿は主に合わせたかトランプ兵を模した格好であるがひときわ目立つのは胸につけていた白鷺の描かれたバッヂである。

パラリロパラリロペロ～～

「「」、この着信音はあー・トゥウー・

携帯電話めがけて飛ぶ主。

「10点」

「も、もすもす？終日？」

「・・・・・・・・・・

「ぶつ～。

「……」

「村名曰出折れを見るな。安登5病語だ（そんな曰で俺を見るな。
あと五秒後だ）」

再びなる着信音。

「はーい、みんなのアイドル、篠ノ之東さんだよーーーつて、ああダメー！ 切らないでちーちゃん！」

「遣れ遣れ（やれやれ）」

弟子は主のために紅茶を淹れる。

「お前は∨Tシステムの件に躊躇んでいるのか？」

「ああ。あれ？ 私が作るのは完璧において十全でなければ意味がないから、目障りだから、白君にバウムクーベン買って来たついでに潰すように指示したから。ああ、言わなくてもわかつてると思うけど死傷者はゼロ。研究所の上役は死ぬほど社会的な制裁加えておいたから。こんなこと白君にとつては赤子の手をひねるより簡単なこと というかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない」

「宋田名（そうだな）」

「……白夜にも聞きたいことがある」

「何打？（何だ？）」

「真庭忍毒組、お前はどこのまで知つていいの？」

「……凝れ葉、真庭権門代打。割る賈が放せない（これは、真庭の問題だ。悪いが話せない）」

「……そつか。では邪魔したな」

「いやいや、邪魔なんてとんでもない。私はち一ちゃんの為なら二十四時間フルオープンだよー。」

「……では、またな」

「ち一ちゃんは相変わらずだね」

頷く弟子。

「やつぱり、解析しないといけないのかなあ。四季崎イチザキがつくった工

」

以前から主はその存在を懸念していたが最高の作品を作つていたため調査しなかつたのだ。

「それにしても、歴史の遺産が今頃になつて出てきたのはなんでだらつねへどう思ひの由如」

優雅に紅茶を飲む主。

「切てな。（さてな）」

そつけなく返事をする弟子。主の認める人間は少ない。彼女は世界

で数人にしか興味がない。それを知つてか知らずか、ただ弟子は紅茶を飲む。その時、再び着信音が鳴る。再び主は電話を取る。

「やあやあやあーひさしごりだねえーずっとずっと待つよー。」

「……。姉さん」

「うんうん。用件は分かつてるよ。欲しいんだよね？ いつ君の背中を守れるほどの力が。君だけのオンリーワン、筈の専用機が。もちろん用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。そして白と並ぶ立つもの。その機体の名は

「亞科乙姫（紅椿）」

かくして歴史を回つまえ。へねつ、へねつ、わがわがわ。

第十一話 風呂場にて（後書き）

皆様にアンケートです。

もしよかつたら、完了系変体刀候補 殺刀・鉄と淨刀・銀の特性、
キャラを募集しています。どんどん書いてください。

よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123v/>

IS語

2011年11月29日21時48分発行